

常陸鷹巢遺跡

—第2次発掘調査報告—

大宮町教育委員会
鷹巢遺跡発掘調査会

昭和62年12月

常陸鷹巣遺跡

—第2次発掘調査報告—

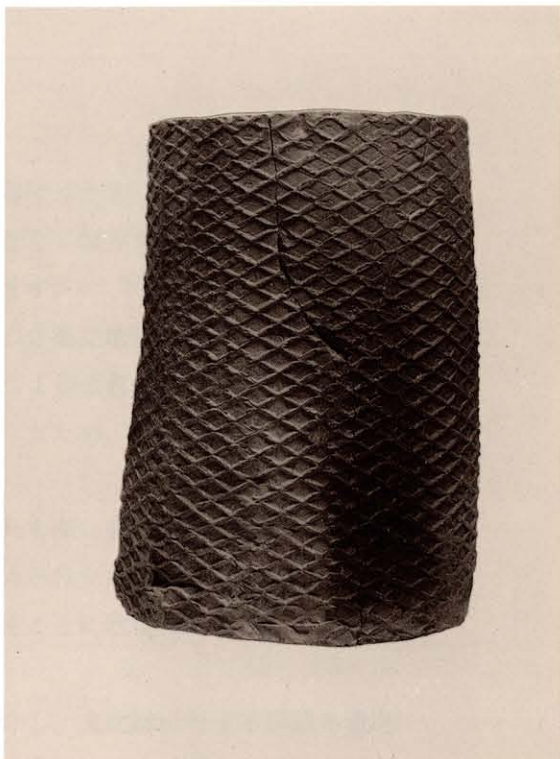
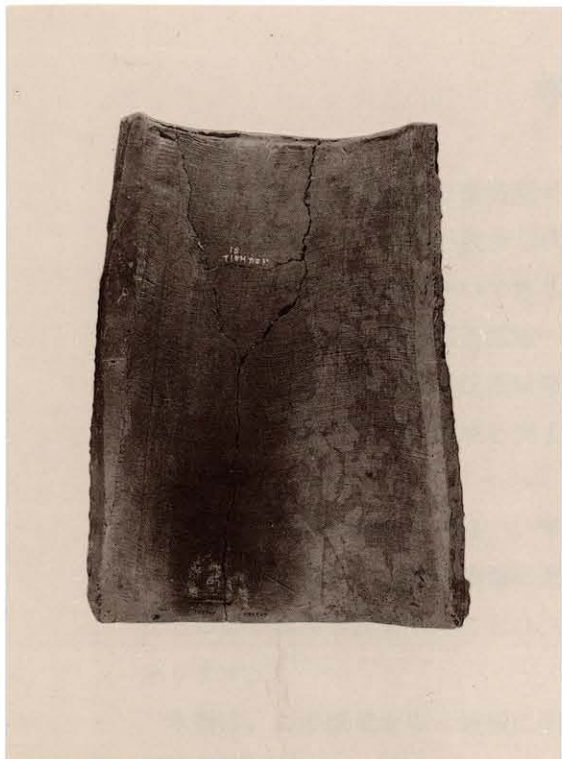
井上義安 植田友次 大芦あさ子編



遺跡の現状〈東より撮影〉



第二号住居址の遺物出土状態〈南より撮影〉



第一八号(上段)第一九号(下段)出土瓦

序

大宮町には、古代郷土の黎明期における先人たちが残した輝しい文化とその遺産である遺跡が数多く点在しております。鷹巣字原地区についてもこれら遺跡群の一つであります。

この度、水戸北部中核工業団地への企業立地等に伴う住宅対策の一環として、当該地が本町及び茨城県による公営住宅の建設、町土地開発公社での宅地分譲の予定地と決まったため、急ぎ発掘調査を実施した次第であります。

お陰様で関係された方々は、いずれも深い研究と体験に基づき、多くの困難を克服されながら慎重に進められたため、私たち郷土の先人たちの姿が解明されましたことは、まことに欣快にたえないところであります。

本書は、この成果を広く皆様に紹介し、文化財に対する認識と遺跡愛護の精神をさらに深められ郷土の未来を築く力の礎となるよう刊行したものであります。

最後に発掘調査にあたられました諸先生方をはじめ数多くの関係者各位のご尽力に対し、心から深甚なる感謝を申し上げる次第です。

昭和62年12月

大宮町長 菊池道隆

序 文

鷹巣遺跡の発掘調査は、昭和61年11月から昭和62年2月までの4か月間実施されました。この遺跡は、久慈川に沿って南にのびる標高50～60m、水田面から比高約5～10mの中位段丘の畑一帯にあります。昭和56年9月に一次調査が行われ、土器片や瓦片などが発見され、また西方斜面には瓦窯も付属し、単純な集落遺跡のみでなく工人関係集落も予想される重要な注目すべき遺跡であります。

この度、当該地に大宮町土地開発公社住宅団地の計画がもちあがり、土地開発公社から大宮町教育委員会に発掘調査が委託されました。その後、大宮町鷹巣遺跡発掘調査会が組織され、二次発掘調査を開始することになりました。

この発掘調査によって、得ることのできた遺物のうち最も数量の多いものは、土師器片と須恵器片であり、瓦の小片も混在し、また住居址、溝状遺構などが確認され、この地域における古代の人びとの生活の一端を知る上の貴重な資料を得ることができました。

ここに報告書発刊をみることができたのは、事前の発掘調査から全面的なご理解とご協力をいただきました茨城県教育庁文化課、水戸教育事務所社会教育課のご厚意と、調査団長井上義安先生はじめ関係各位のご協力の賜物であり心から謝意を申し上げます。

また、発掘にかかりました一切の経費を負担いただきました大宮町土地開発公社に対しまして、深甚なる感謝を申し上げます。

この報告書によって、祖先の偉業をしのぶことができると共に、文化財に対する認識が一そう深まり、遺跡愛護の精神、郷土を愛する心を培う上で貴重な資料となることでしょう。是非、この報告書を活用されることを心からご期待申し上げご挨拶といたします。

昭和62年11月

大宮町教育委員会

教育長 海老根 フ ミ

例 言

- 1 本書は、茨城県那珂郡大宮町鷹巣字原の住宅団地造成に伴う遺跡の発掘調査(第二次)報告書である。
- 2 発掘調査は、昭和61年10月23日から翌62年2月26日まで行った。
- 3 発掘調査面積は約15,000㎡である。
- 4 発掘調査は、鷹巣遺跡発掘調査会(吉田一満教育長)を組織し、井上義安・植田友次・大芦あさ子が従事した。
- 5 出土遺物の整理作業は、発掘終了後の3月3日から10月31日まで、那珂湊市檀原神宮社務所、大洗町髭釜遺跡調査団事務所、植田・大芦宅を使用した。
- 6 整理作業の分担は下記のとおりである。
井上義安 遺構・遺物図面の検討、接合資料の抽出、本文執筆、レイアウト、校正
植田友次 土器接合復元作業
大芦あさ子 土器接合復元作業、接合資料の抽出、瓦実測拓影図の作成、写真図版の作成
鈴木浩子 遺構・遺物図面の作成、瓦実測拓影図の作成、校正
小堤静江 遺構・遺物図面の作成、写真図版の作成、瓦実測拓影図の作成、校正
戸崎ともえ 遺構図面トレース
後藤つや子 遺構図面トレース
- 7 遺構写真は井上義安が担当した。
- 8 出土遺物は、大宮町教育委員会(那珂郡大宮町388の2)が一括保管している。

実測図凡例

- 1 住居址実測図、遺物分布図、接合関係図は $\frac{1}{20}$ で作図したものを $\frac{1}{2}$ 、カマドと柱穴は $\frac{1}{10}$ で作図したものを $\frac{1}{2}$ 、土器は $\frac{1}{2}$ 、土製品と鉄製品類は $\frac{1}{2}$ 、瓦は $\frac{1}{4}$ に縮小して収録した。
- 2 土器の接合資料は、出土地点番号(遺物番号と同一)、表裏関係(表△・裏▽・立ち▷)、床上レベル(計測単位cm)の順に記入した。
- 3 土師器のうち網点を貼付したものは内黒処理を意味し、還元焰で焼成した須恵器は断面を墨で塗りつぶして区別した。

本文目次

原色図版

序

例言

本文目次

挿図目次

図版目次

第一章	発掘調査に至る経過	1
第二章	遺跡の位置と考古学的環境	2
第三章	第一次発掘調査の概要	5
第四章	第二次発掘調査の概要	6
第五章	遺構の分布状況	9
第六章	竪穴住居址群の調査	10
第七章	まとめ	89

鷹巣遺跡発掘調査会役員名簿(昭和61年9月5日現在)

発掘作業従事者

遺物作業従事者

挿 図 目 次

第一 図	遺跡付近地形図	3
第二 図	発掘調査区位置図	4
第三 図	遺構分布図	7,8
第四 図	第一号住居址実測図	11
第五 図	第一号住居址出土土器実測図	11
第六 図	第二号住居址実測図	13
第七 図	第二号住居址出土土器実測図	14
第八 図	第三号住居址実測図	15
第九 図	第三号住居址出土土器実測図	16
第一〇 図	第四号住居址実測図	18
第一一 図	第四号住居址出土土器実測図(1)	19
第一二 図	第四号住居址出土土器実測図(2)	20
第一三 図	第五号住居址実測図	22
第一四 図	第五号住居址出土土器実測図	22
第一五 図	第六号住居址実測図	24
第一六 図	第六号住居址出土土器実測図	25
第一七 図	第七号住居址実測図	27
第一八 図	第七号住居址接合関係図	28
第一九 図	第七号住居址出土土器・紡錘車・鉄鎌実測図(1)	29
第二〇 図	第七号住居址出土土器実測図(2)	30
第二一 図	第八号住居址実測図	32
第二二 図	第八号住居址出土土器実測図	33,34
第二三 図	第八号住居址接合関係図	35
第二四 図	第九号住居址実測図	36
第二五 図	第九号住居址出土土器実測図	37
第二六 図	第一〇号住居址実測図	39
第二七 図	第一〇号住居址出土土器・土錘実測図	40
第二八 図	第一一号住居址実測図	42
第二九 図	第一一号住居址出土土器・紡錘車実測図	43

第三〇図	第一二号住居址実測図	45
第三一図	第一二号住居址出土土器実測図(1)	46
第三二図	第一二号住居址出土土器実測図(2)	47
第三三図	第一三号住居址実測図	49
第三四図	第一三号住居址出土土器実測図	50
第三五図	第一四号住居址実測図	52
第三六図	第一四号住居址接合関係図	53
第三七図	第一四号住居址出土土器・支柱実測図	54
第三八図	第一五号住居址実測図	56
第三九図	第一五号住居址出土土器実測図	56
第四〇図	第一六号住居址実測図	57
第四一図	第一六号住居址出土土器実測図	58
第四二図	第一七号住居址実測図	60
第四三図	第一七号住居址出土土器実測図	61
第四四図	第一八号住居址実測図	63
第四五図	第一八号住居址接合関係図	64
第四六図	第一八号住居址柱穴断面図	65
第四七図	第一八号住居址カマド実測図	65
第四八図	第一八号住居址出土土器・紡錘車実測図	66
第四九図	第一九号住居址実測図	69
第五〇図	第二〇号住居址実測図	70
第五一図	第二一号住居址実測図	71
第五二図	第二二号住居址実測図	73
第五三図	第二二号住居址カマド実測図	74
第五四図	第二二号住居址出土土器実測図	74
第五五図	第二三号住居址実測図	76
第五六図	第二三号住居址接合関係図	77
第五七図	第二三号住居址カマド実測図	78
第五八図	第二三号住居址出土土器実測図	79, 80
第五九図	第一八号住居址出土瓦実測拓影図	81, 82
第六〇図	第一九号住居址出土瓦実測拓影図	83, 84
第六一図	第一九号住居址出土瓦実測拓影図	85, 86

第六二図	第二三号住居址出土瓦実測拓影図	87, 88
第六三図	住居址長幅分布図	91
第六四図	住居址主軸方位図	91

図 版 目 次

図版第一	遺跡の遠景〈東方の久慈川流域から鷹巣台地を望む〉 遺跡の遠景〈西南より〉
図版第二	遺跡の現状、中央付近から右側が第一次調査区域〈南より〉
図版第三	遺跡の現状〈北より〉 遺跡の現状〈東より〉
図版第四	住居址の分布状況、第六～八号住居址付近〈北より〉 住居址の分布状況、第一二・一三・一七号住居址付近〈東より〉
図版第五	発掘調査の状況、第一一号住居址〈南西より〉 発掘調査の状況、第一三号住居址〈東より〉
図版第六	第一号住居址全景〈南より〉 第二号住居址全景〈東南より〉
図版第七	第二号住居址遺物出土状態〈南より〉 第二号住居址遺物出土状態〈南西より〉
図版第八	第三号住居址全景〈南より〉 第四号住居址全景〈東南より〉
図版第九	第五号住居址全景〈南より〉 第五号住居址カマド残存状態
図版第一〇	第六号住居址遺物出土状態〈南より〉 第六号住居址カマド残存状態
図版第一一	第七号住居址全景〈南より〉 第七号住居址遺物(下段：鉄鎌)出土状態〈南より〉
図版第一二	第八号住居址全景〈南より〉 第八号住居址カマド残存状態
図版第一三	第八号住居址柱穴(P ₁)断面 第八号住居址柱穴(P ₂)断面

- 図版第一四 第九号住居址全景<北より>
第一〇号住居址遺物出土状態<南東より>
- 図版第一五 第一二号住居址全景<南より>
第一三号住居址遺物出土状態<南西より>
- 図版第一六 第一四号住居址遺物出土状態<南より>
第一五号住居址遺物出土状態<西より>
- 図版第一七 第一八号住居址遺物出土状態<南より>
- 図版第一八 第一八号住居址カマド断面と平瓦出土状態
第一八号住居址柱穴(P₃)断面
- 図版第一九 第一九号住居址遺物出土状態<東南より>
第一九号住居址遺物出土状態<東より>
- 図版第二〇 第二〇号住居址土層断面<南より>
第二〇号住居址カマド残存状態
- 図版第二一 第二二号住居址遺物出土状態<南より>
第二二号住居址カマド残存状態
- 図版第二二 第二三号住居址全景<東より>
第二三号住居址全景<南より>
- 図版第二三 第二三号住居址カマド残存状態
第二三号住居址Wコーナー付近平瓦出土状態
- 図版第二四 第四・六・八・九号住居址出土土器
- 図版第二五 第一七・一八・三・四・五・六号住居址出土土器
- 図版第二六 第六・七・一一・一三・一七・二〇・二一・二二・一一号住居址出土土器、紡
錘車、土錘、鉄鎌
- 図版第二七 第四号(左)第六号(右)住居址出土土器
- 図版第二八 第八号(左)第一二号(右)住居址出土土器
- 図版第二九 第一六号(左)第一八号(右)住居址出土土器
- 図版第三〇 第一九号(上)第二三号(下)住居址出土瓦
- 図版三一 第二三号住居址出土瓦

第一章 発掘調査に至る経過

大宮町の北部に位置する鷹巣字原の台地は、昭和48年、日立那珂精器株式会社が町の工場誘致に伴って、工場建設用地を取得した場所である。ところが、この予定地一帯は、茨城県遺跡地名表(596)に記載されている周知の遺跡であり、工場建設にあたっては、事前に発掘調査を実施し、記録保存の処置を講じなければならない土地であった。

昭和56年6月に至って、大宮町当局は日立那珂精器株式会社の理解と協力をえて、建設予定地にトレンチを設定し確認調査を行った。その結果、明確な住居址の発見にまでは至らなかったけれども、遺構らしい落ち込み、住居址の存在を裏付ける古墳時代後期(鬼高式)、歴史時代(国分式)の土師器、須恵器片、瓦片に加え、後期縄文土器片などが採集できた。台地の西側斜面には瓦窯址も散在しており、このような各種の遺物が出土するに及んで本地点は古代の瓦製作に関係する遺跡としての可能性が指摘でき、遺跡の重要性と同時に本調査の必要性も考慮された。

会社側は、開発計画を一時中断し、発掘調査を実施し工場建設用地を造成することに決定した。昭和56年9月2日、会社からの委託によって大越四郎教育長を会長に選出し、大宮町鷹巣遺跡発掘調査会が結成され、同月24日から12月25日まで発掘調査を行った。調査団長に伊東重敏氏が委嘱された。この発掘は本遺跡の第一次調査で、対象面積は約5,000㎡であった。

発掘調査は、歴史時代の堅穴住居址15軒、掘立柱建物址2棟、柱穴列を伴う溝状遺構1本を検出し、未調査の建設予定地約15,000㎡を残して終了した。

その後、建設予定地は、日立那珂精器株式会社より大宮町土地開発公社の所有となり、ここに新しく住宅団地の建設が計画され、その造成工事を行うこととなったのである。

今回の発掘は、その団地造成に伴う第二次の調査になる。調査会は、昭和61年9月5日、吉田一満教育長を会長として結成し、①調査会規約、②会計規定、③事業計画、④予算、⑤業務委託契約などについて審議が行われた。調査は担当者に井上義安(日本考古学協会員)、調査員に植田友次(常陸太田市文化財専門委員)、大芦あさ子(大洗町団子内遺跡調査団)が従事することになった。

遺跡の現状は雑木林となっていたために、まずこれの伐採作業から始め、続いて表土(約50cm)の除去作業を行いながら、11月4日より地元鷹巣、小祝賀地区の作業員諸氏の協力を加えて、遺構確認と発掘作業を翌年の2月26日まで実施し、別稿に記述したような予想どおりの成果を収め終了することができた。

第二章 遺跡の位置と考古学的環境

大宮町は、久慈川と那珂川にはさまれた那珂郡のほぼ中央に位置し、巨視的にみれば、北に標高200 m前後の山地(鶯子鶏足古期層)が続き、南に標高15～30 mの沖積地(低位段丘)が河川の周囲に分布し、北高南低の地形的特色が認められる。町の北部、大賀、鷹巣付近には、久慈川の沖積地に面して、いくつかの中位段丘(標高30～50 m)が複雑に発達している。鷹巣遺跡もこうした中位段丘の一つに占地している訳である。

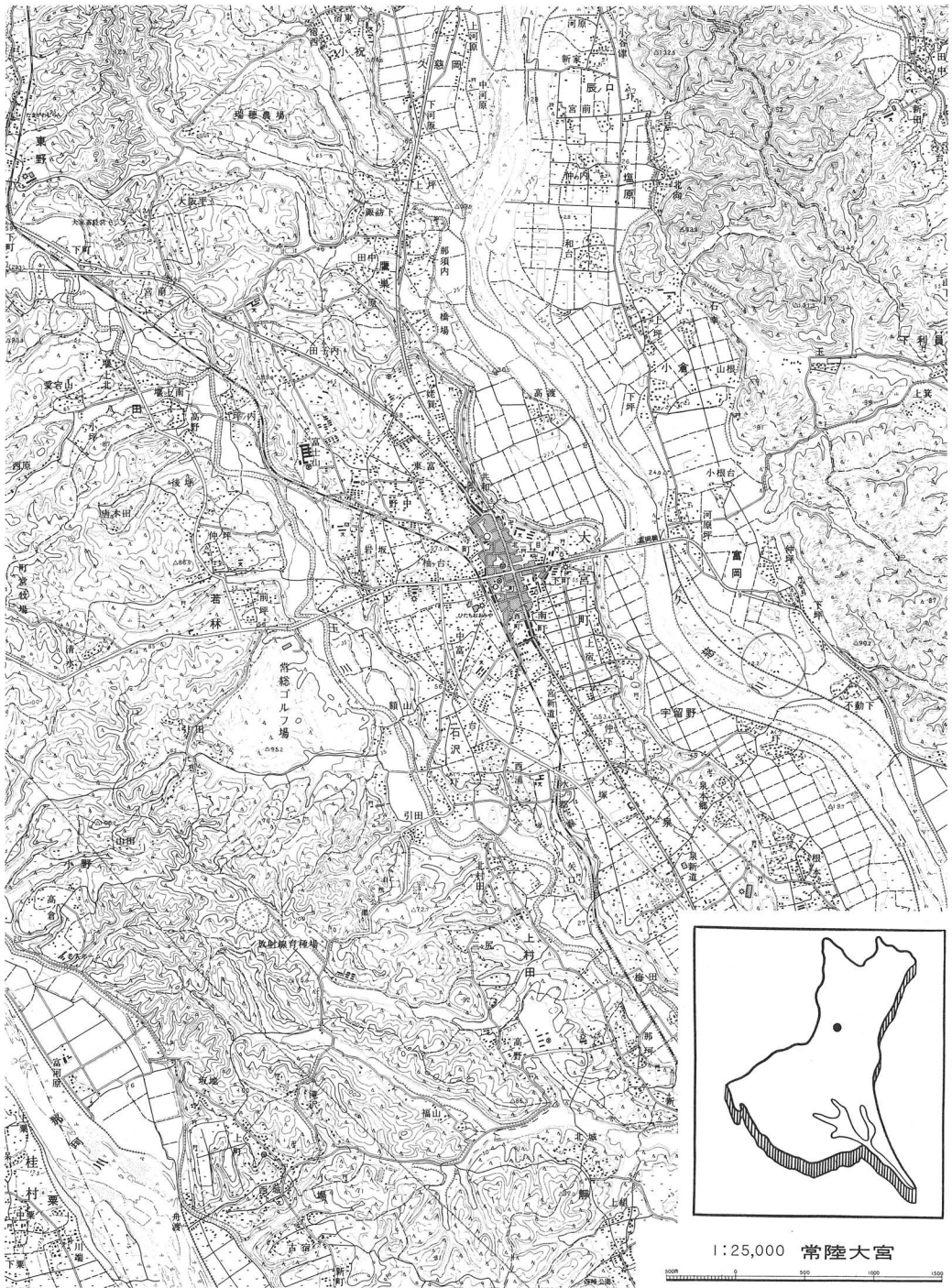
昭和52年3月に発行した『大宮町史』によると、本遺跡を台地の西南縁に存在する瓦窯址を含めて、次のように説明している。

久慈川に東面する南東にのびる台地で、標高50～60メートル、水田面からの比高約5～10メートルである。この台地の南から西へかけて、谷津が入り込んでおり、遺跡はその台地の南西斜面中にある。分布調査によると、布目瓦が散布する範囲は台地縁辺部から斜面途中までであり、斜面中に、地脹れ状のものが二か所確認できた。次いでボーリング調査をしたところ、標高55メートルラインで、布目瓦が集中しているのが確認でき、その中に窯壁の断片がみられた。このことにより窯址と断定したが、同時に、地脹れ状の二か所においては、明らかに窯址であることが判明した。しかも形状から判断すると、長さ6、7メートルの半地下式の登窯と理解されるだけの様相をもっている。以上のことから、窯址群は二基にとどまらず、それ以上あると考えられる地形をもっている。南側のこの斜面で、鉄鏝が若干採集されたのが福祉センターに所蔵されているが、地形的にみて、タタラ址とも考えられ、この斜面地については、今後問題となるであろう。採集されている布目瓦の時期は、奈良時代後期と判断される。

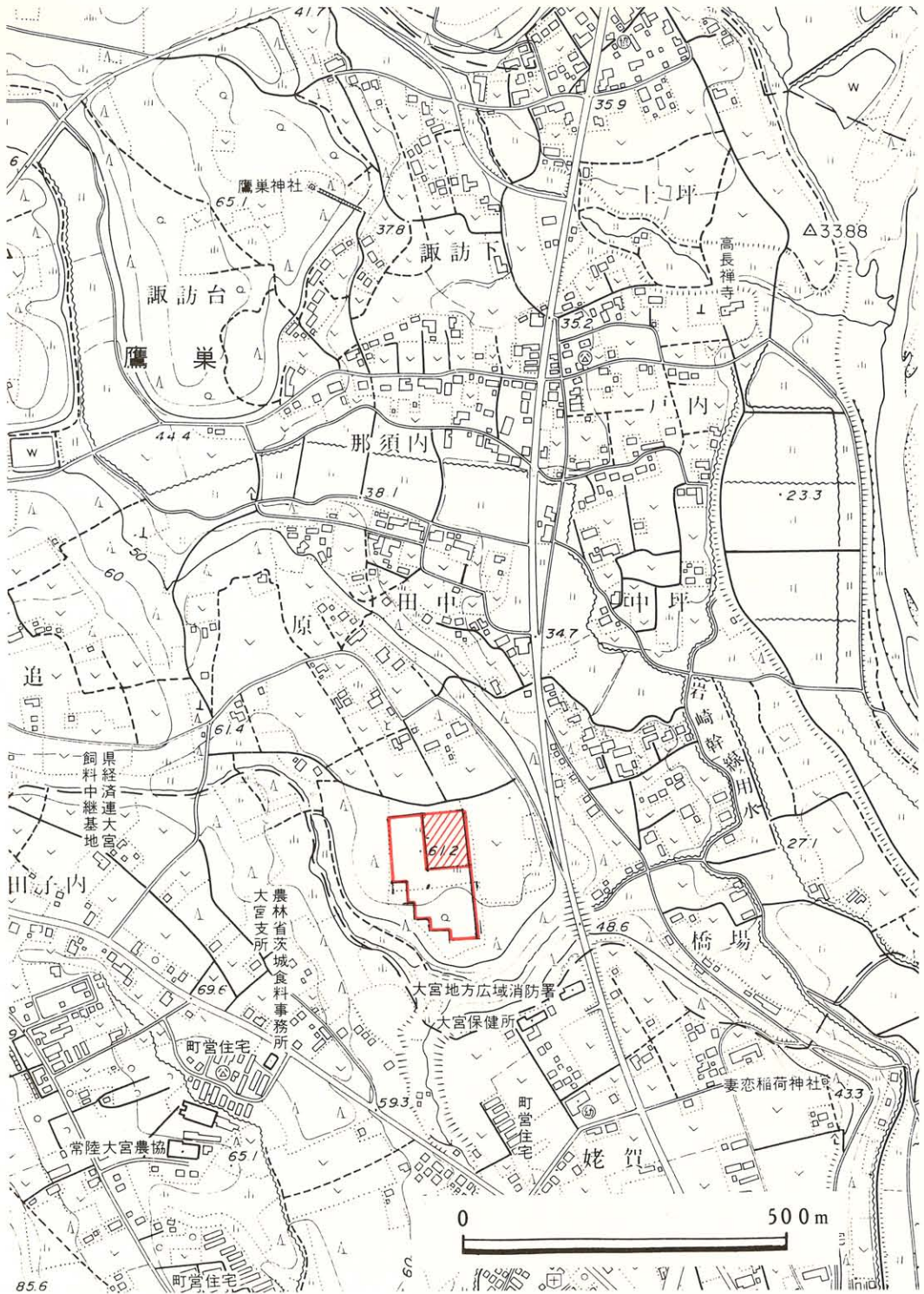
以上の記述が、町史編さん当時の本遺跡に対する一般的な認識であったとは思われない。発掘前に現地を踏査してみると、斜面の北東側に平坦な畑地や山林が展開しており、ここに瓦製作にかかわった工人の住居址、工房址が存在すると考えてほぼ間違いのない場所であり、遺跡の推定面積は約50,000㎡である。町史の担当者は、おそらく布目瓦の僅少性、瓦窯の重要性を強調せんがための記述であったように推察できる。

遺跡の西方には、『常陸国風土記』久慈郡の条によれば、「^{たんせきまきど}丹石交錯れり、色は^{へんべき}瑠碧に似たり、火を^{いとよ}鑽るに尤好し」というメノウを産する玉川が南流し、また、綾織で知られる「^{しどろ}静織の里」も存在し、周辺には鷹巣古墳群(形象埴輪、須恵器出土)、糠塚古墳(前方後円墳)、昭和48年に発掘した一騎山古墳群などが散在し、考古学的事象に事欠かない地域である。

奈良時代の大宮地方は、機織あるいは瓦製作などに関係した専門集団が居住し、古代常陸における工芸技術の重要な役割を担っていたことが窺われるのである。



第一図 遺跡付近地形図



第二図 発掘調査区位置図

第三章 第一次発掘調査の概要

本遺跡は、昭和56年6月24日から7月21日までの予備調査をへて、第一次調査が実施された訳である。この予備調査は伊東重敏氏の担当で行われた。それによると幅1mのトレンチを10m間隔で南北に入れ、細部確認の必要があればグリット法を併用して調査を実施している。A～LトレンチのうちA・B各トレンチ内に遺構らしい落ち込みが発見できた。この調査では、古墳時代の鬼高式土器、歴史時代の国分式土器と瓦の小片、縄文時代後期の土器破片若干を採集した。こうした遺物により製瓦関係の遺構が埋没している可能性も考えられ、本調査の必要性が指摘されたのである。

第一次発掘調査は、以上の予備調査の成果を踏まえて、同9月24日から12月25日まで実施されたのである。本発掘には、再び伊東重敏氏が担当者となって行い、整理事業は佐藤政則氏(日立市立郷土博物館)の協力をえて外山泰久、金田正志の両氏が従事し、報告書『常陸鷹巣遺跡』(昭和58年3月)を刊行している。

本発掘調査は、報告書に記述はないが造成地約20,000㎡のうち¼に当る東北側の約5,000㎡を発掘した。

遺構分布図によると、遺構は発掘調査区の中央部分に存在せずそれぞれ東西の両側に発見されている。

東側の発掘区においては、住居址9軒、掘立柱建物址2棟と柱穴列を伴う溝状遺構1本が発見された。住居址は、その分布の状態から未発掘の東側畑地にも埋没しているように考えてよい。

西側の発掘区で発見した住居址は、報告書によると4軒が重複したものであるというが、残存状態は必ずしも良好とはいえない。発掘区を拡張すれば当然住居址が出現するような場所である。

発掘した住居址は、すべてカマドを伴う隅丸方形竪穴で歴史時代の国分式期に該当するものである。住居址の規模は、大きいもので一辺約4.3m、小さいもので約3.0m、平均3.6m程度となり、その面積は17㎡から7㎡まであり、10㎡を越える住居が6軒存在する。

出土遺物には、土師器の甕形土器、坏形土器、高台付坏形土器、同皿形土器、須恵器の坏形土器、高台付坏形土器、壺形土器、蓋形土器などが共伴し、紡錘車やフィゴの口、鉄製の紡錘車、刀子、鉄鏝などが存在する。これらの遺物の特徴を総合して、大略9世紀前半～中頃に営まれた住居址群であろうと説明している。

また、住居址群の北西側にある掘立柱建物址については、出土遺物が皆無であり、構築年代は明らかにされていない。おそらく住居址群と同時期か若干新しくなる遺構であろう。

遺跡の西側斜面雑木林の中には、瓦窯址群が埋没していて布目瓦片が出土し、久慈郡衙址への供給が指摘されていて、はなはだ興味のある問題を内包した遺跡である。

第四章 第二次発掘調査の概要

今回の調査範囲は、第一次において発掘調査を行った残りの部分で、団地造成予定地20,000㎡のうち約15,000㎡である。

この範囲における私たち調査員の共通した認識は、第一次発掘調査の内容(地形・面積・遺構の種類と数量など)をつぶさに検討し、歴史時代の瓦製作に関係した工人の竪穴住居址が、少なくとも25軒程度発見でき、掘立柱址や土壇状遺構はあまり期待できそうにもないということであった。この認識が基本となって発掘調査の計画がたてられたのである。

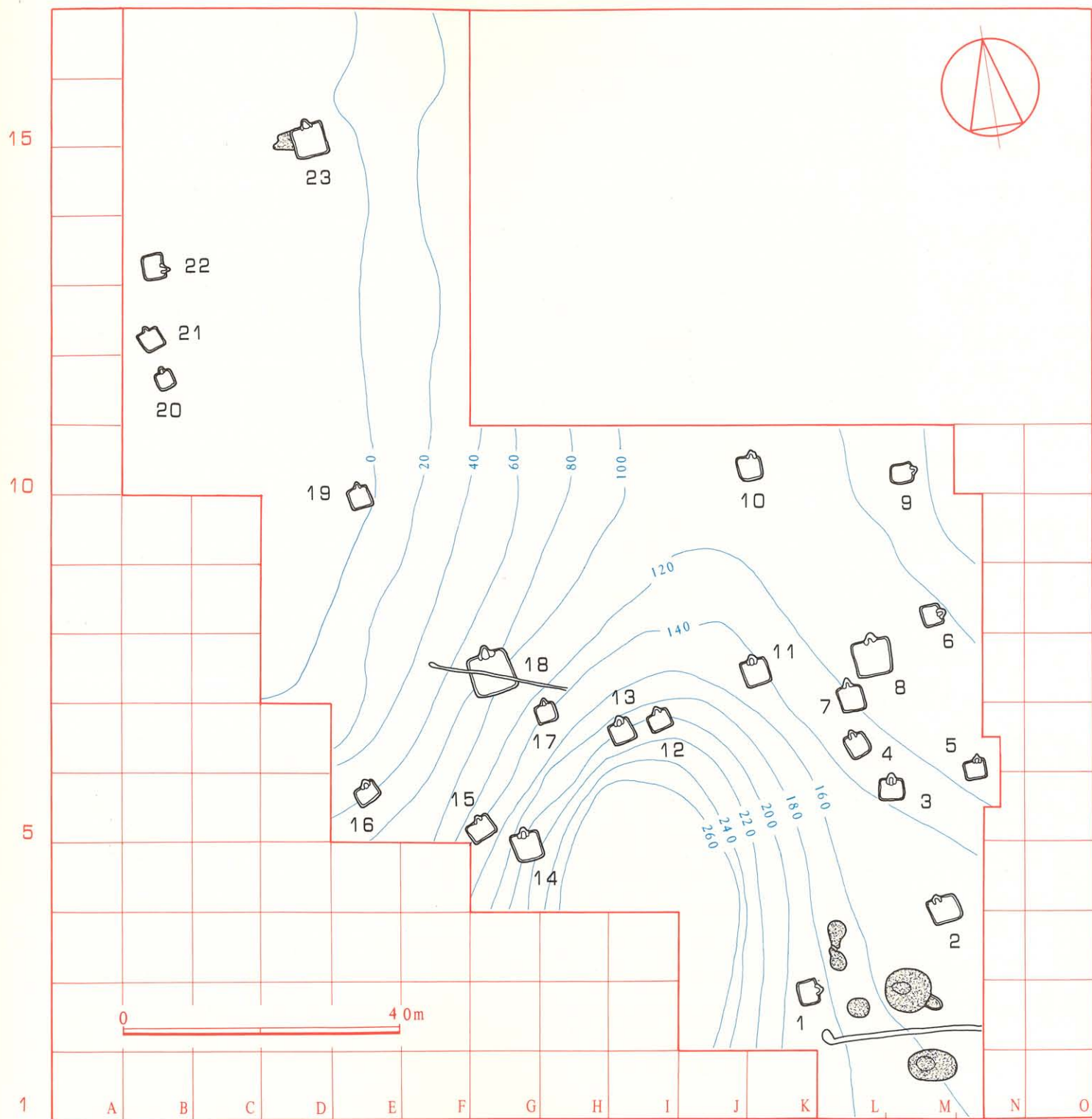
調査区の現状は、一部の緩斜面を除き平坦であり、大小の灌木類、チガヤ類などの雑草が繁茂し、南西側の斜面山林に続いている。ローム面までの堆積土を調べると、第一次調査区に比較して、西寄りの境界付近を除き、厚さが60cmから深いところで80cmにも達することがわかった。このために調査区全域の表土は、大型機械を導入して削除し、北側の調査終了地と南側の斜面に搬出することにした。

遺構の確認作業は、表土除去がある程度進行した段階で並行的に実施し、その種類と数量を把握することに努めた結果、最終的に歴史時代(国分期)の住居址23軒、溝状遺構(住居址の時期より新しい)2本、円形の砂金採掘穴(昭和8年冬発掘)などが発見でき、私たちの分析結果に近い遺構数となったのである。

これより先に、調査区全域には、グリッド設定作業が行われた。グリッドは、原点を南西隅に置き、西から東に横軸をとりアルファベット記号を表示し、南から北の縦軸にアラビア数字(算用数字)を用いた。各グリッドは10mの方眼である。

調査は、遺構を確認できた時点から記録することにした。すべての遺物は、原位置のまま柱状に残し、出土地点・床上レベル・表裏関係などを記入し、その状態も合わせて観察し収納する方法を採用した。これによって個々の遺物が基礎資料として果たす役割は倍加されるだろう。

以上に述べてきたように、今回の第二次発掘は、前回の調査にくらべ、発掘調査に対する態度は根本的に相違し、それは調査法を含めた作業全般に好影響を及ぼしているのである。



第三图 遺構分布図

第五章 遺構の分布状況

第二次調査区は、第一次調査区の西および南側に相当する面積約15,000㎡の範囲で、調査区の南端は斜面に続いている。西側も斜面となるが、ここの山林(第二〇～二二号住居地の西方)には、瓦を焼成した窯址が10基前後埋没し、その破片も若干採集できる。

すでに前章で概要を記述したように、調査区内からは歴史時代に該当する竪穴住居地が23軒、住居地の年代より新しい溝状遺構が2本、さらに南端の東側からは、昭和8年の冬、地元の人達が掘ったという円形の砂金採掘穴と小穴が4基ほど発見された。また畑地となっていた西側には、貯蔵穴と思われる円形、長方形の攪乱が若干散在していた。第一次調査の時に検出した掘立柱建物地に伴う柱穴列は、住居地の存在しない平坦部分(第一〇・一九～二三号住居地付近)に期待したが確認できなかった。

今回発掘した住居地は、調査区の南側に18軒、北西側に5軒存在し、住居地の数としては発掘面積に比し決して多い方ではない。この点に起因するかどうかはわからないが、重複関係をもつ住居地はなく、すべてが単独で発見されている。

先般、大洗町団子内遺跡において、歴史時代の国分式住居地を11軒調査したが、前代の住居地に比較すると、規模が著しく小形化し、主軸方位もほぼ同一方向を指し、住居構築上に規則性が窺われた。本遺跡も国分式の住居地であって、規模と主軸方向の点などにある程度の規則性を認めることができる。

分布の傾向としては、東側の第三～八号住居地の6軒が円弧を描いてまとまるようにもみられ、さらに東方の未発掘の畑地や山林へと続くことは確実であろう。浅い谷が北上する中央部分の第一二・一三号住居地の付近にも、数軒の住居地が近接する。これも一つのグループにまとまるかも知れない。第一八号住居地の北側には、第一九号住居地が離れた地点に1軒あり、それより北西側に4軒存在するが、このグループは、窯址のある斜面の方に続き、なお数軒の埋没が予想できるのである。南端部の第一・一四～一六号住居地の南側は、斜面になって支谷に移行している。

窯址に近くなる住居地は、布目瓦破片の廃棄量も多くなり、特に第一九号住居地の床面上からは全遺物の60%に近い破片が出土し、恰も住居地の凹地が瓦捨場に利用された感を深くするのである。また第二三号住居地の周囲の確認面からも22個の瓦破片が採集されている。

発掘区における住居地の分布状況からは、明快なグループ分けによるありかたを把握することは困難であるが、傾向としては大略以上のように理解することもできるかと思う。

第六章 竪穴住居址群の調査

第一号住居址(第四・五図、図版第六)

遺存状態 比較的良好であるが、カマドの残存は悪い。

規模・形態 W-X間約3.4m、Y-Z間約3.3m、W-Y・X-Z間約3.0mの大きさを有し、長方形を呈する住居址である。周壁は30~35cmの深さでほぼ垂直に掘り下げている。面積約11㎡。

床面 全体に平坦であって、亀裂のない程度のかたさ、つまり硬度3に相当する。周壁に沿って幅約10cm前後、深さ5~7cmの周溝がめぐる。貼床の痕跡は認められない。

柱穴 床面には検出できず、確認面の各コーナー近くに5個発見された。P₁とP₂は直径25cm、深さ42cm、P₃は若干大きく直径30~35cm、深さ60cm、P₄は直径約30cmのピットが2個存在し、深さは41cmと48cmである。これらはいずれも壁外に掘られた支柱穴と考えられる。

カマド 東壁(W-X)のほぼ中央に構築されている。灰白色粘土を用いて構築してはいるが、全体に残存状態は悪く、両袖部を僅かに残す程度である。焚口~奥壁間約105cm、燃焼部幅約50cm程度の大きさになる。

埋没土 3層に区別でき、床面上に粘土質のロームⅢ、ローム粒子の多い黒褐色土Ⅱ、黒色土Ⅰが堆積し、Ⅱ・Ⅲ層は明らかに人為的に埋め戻した土砂と判断できる。

遺物の種類・出土状態 大部分は土師器の甕形・坏形土器の破片であつて、自然石も多く出土した。総数56個である。内訳は土師器37個、須恵器1個、自然石18個である。自然石の割合が32%の比率を占めて多い。土器破片38個の表裏関係を調べると、表20個(53%)、裏13個(34%)、立ち5個(13%)の割合になる。

この状態をドット・マップ上から観察すると、北壁中央(A-Bセクションの西側)に接して自然石の集中がみられる他は、全体にまばらに散在し、平面分布上からの特別な傾向が指摘しえない。また、垂直分布図をみても同様なありかたを示し、ただ自然石塊のグループだけは一括廃棄と考えられる。

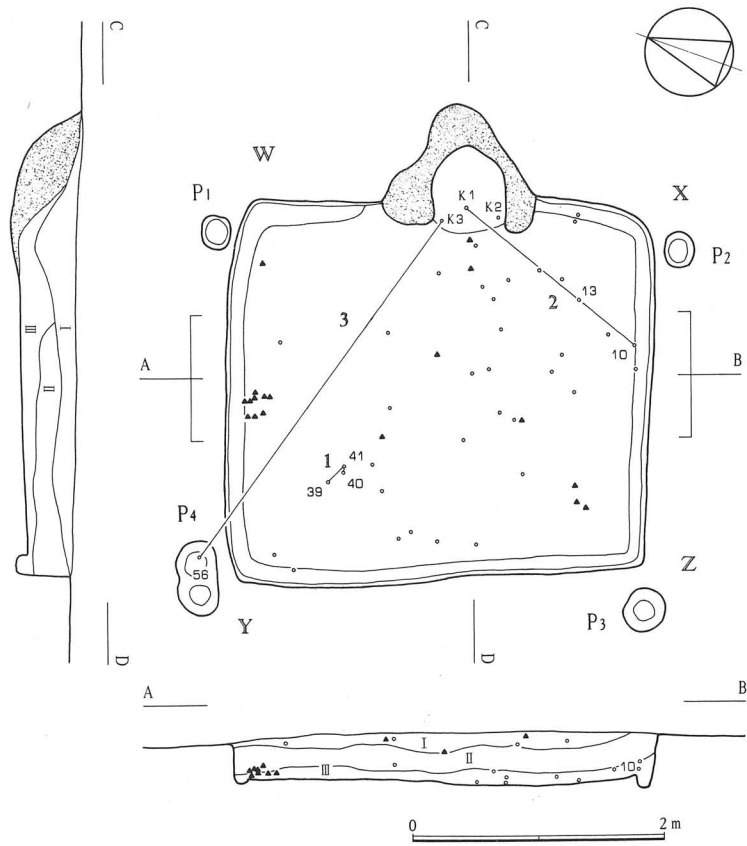
接合資料 土師器に3例抽出できた。

接合資料1<坏形土器>39▽2・41▷6・40▽4

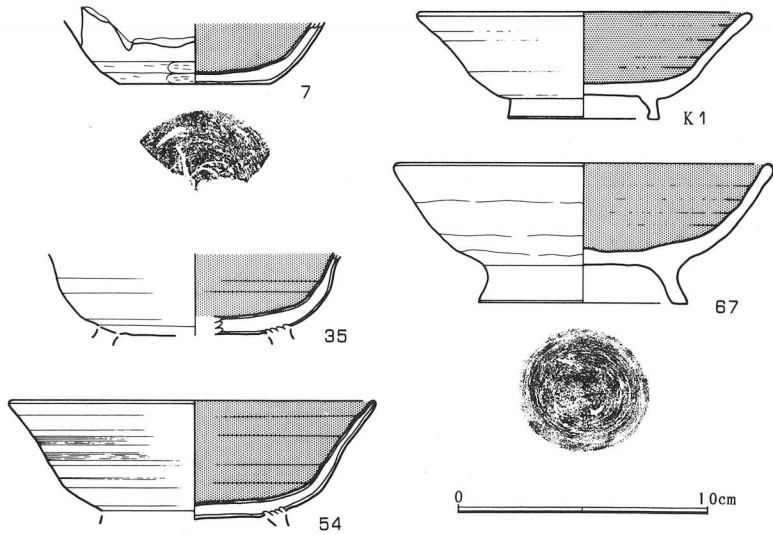
接合資料2<同>10▽11・K1(カマド内)

接合資料3<同>56(柱穴内)・K3(カマド内)

時期 住居址の廃絶は9世紀第3~4四半期のころと思われる。



第四図 第一号住居址実測図



第五図 第一号住居址出土土器実測図

第二号住居址(第六・七図、図版第六・七)

遺存状態 良好である。

規模・形態 W-X間約4.5m、Y-Z間約4.2m、W-Y間約3.8m、X-Z間も同様で、不整形長方形を呈する。面積は約15㎡である。周壁はほとんど垂直に掘り下げている。深さは30～35cmを測る。

床面 周壁に近い部分(外区)は硬度2、それより内側(内区)が硬度3に相当し、中央付近は凹凸が多い。周壁に沿って幅約10cm、深さ7cm前後の溝が存在する。

柱穴 各コーナーとW-Y間の中央、X-Z間の中央にあり、合計6本となる。各柱穴の直径は、P₃の20cmを除きすべて40cmである。深さはP₆の74cm、P₃の80cm以外は90～100cmである。

カマド 北壁中央より僅かに西に片寄っている。灰白色砂質粘土で両袖を構築している点は、他の住居址のカマドと変りない。奥壁～焚口間の全長約120cm、焚口幅約40cm、燃焼部幅約45cmを測る。天井部は崩落し内部に赤褐色土・砂質粘土が存在する。

埋没土 2層に区別できる。土層の断面を観察すると、まず東南の壁外から黄褐色土砂が中央付近まで投棄された後、その上部に黒色土で埋め戻しを行っている。人為埋没土砂である。

遺物の種類・出土状態 土師器甕形土器、坏形土器、須恵器では甕形土器、坏形土器、壺形土器、盤形土器、蓋形土器などの破片に加え、自然石も出土し、合計141個になる。

その内訳は、土師器88個、須恵器22個、自然石31個である。土師器と須恵器の表裏関係は、表70個(64%)、裏38個(34%)、立ち2個(2%)の割合を示す。自然石の31個は遺物全体の約22%に相当し、一堅穴出土の自然石としては多い方であろう。須恵器破片の出土数は土器全体に対し約16%に相当する。

遺物は、中央より東側とYコーナー寄りの空間に自然石が多く散在し、西側のWコーナーにかけて土器の出土量が目立つ。A-B断面のドットをみると、土器破片および自然石は、いずれも床面から中間付近に多く散在しており、確認面にはほとんど発見されていない。接合資料は、当然のことながら西壁寄りのドットに抽出でき、多くの土器破片はWコーナー付近から廃棄されたものと思われる。

接合資料 下記の6例(土師器3例、須恵器3例)が検出できた。

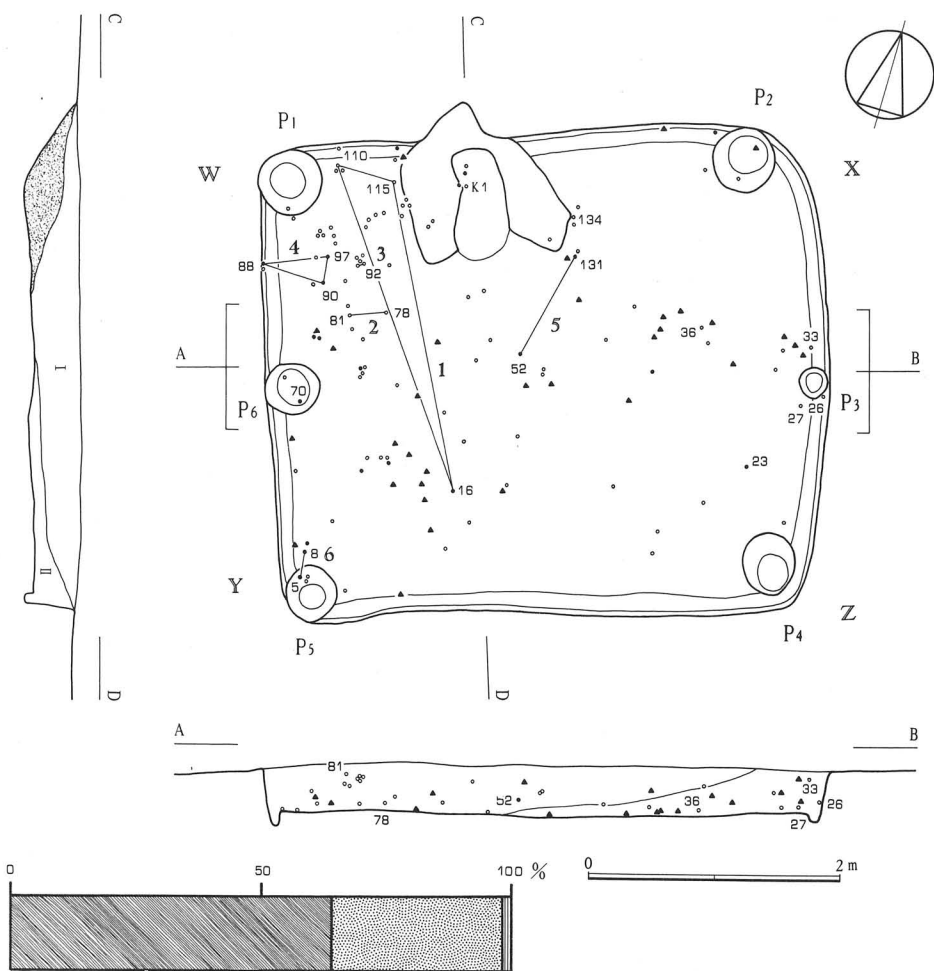
接合資料1<土師器甕形土器>115△3・16△0・110△1

接合資料2< 同 >81△29・78△2

接合資料3<土師器坏形土器>93△1・92△0

接合資料4<須恵器甕形土器>88▽26・90△18・97△17

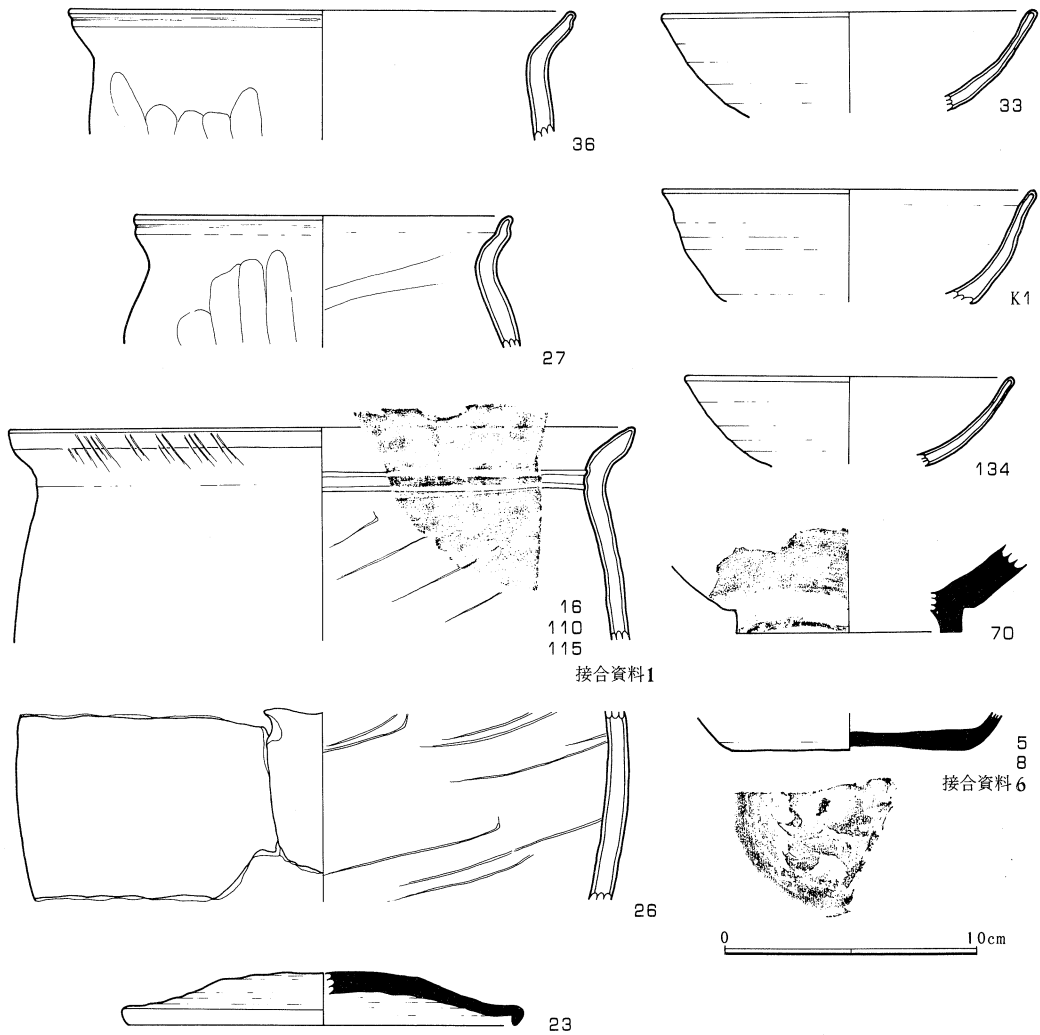
接合資料5<須恵器坏形土器>52△13・131△11



第六図 第二号住居址実測図

接合資料 6 < 同 > 5 △ 22 · 8 △ 12

時期 国分式期の住居址で、9世紀第2～3四半期のころであろう。



第七図 第二号住居址出土土器実測図

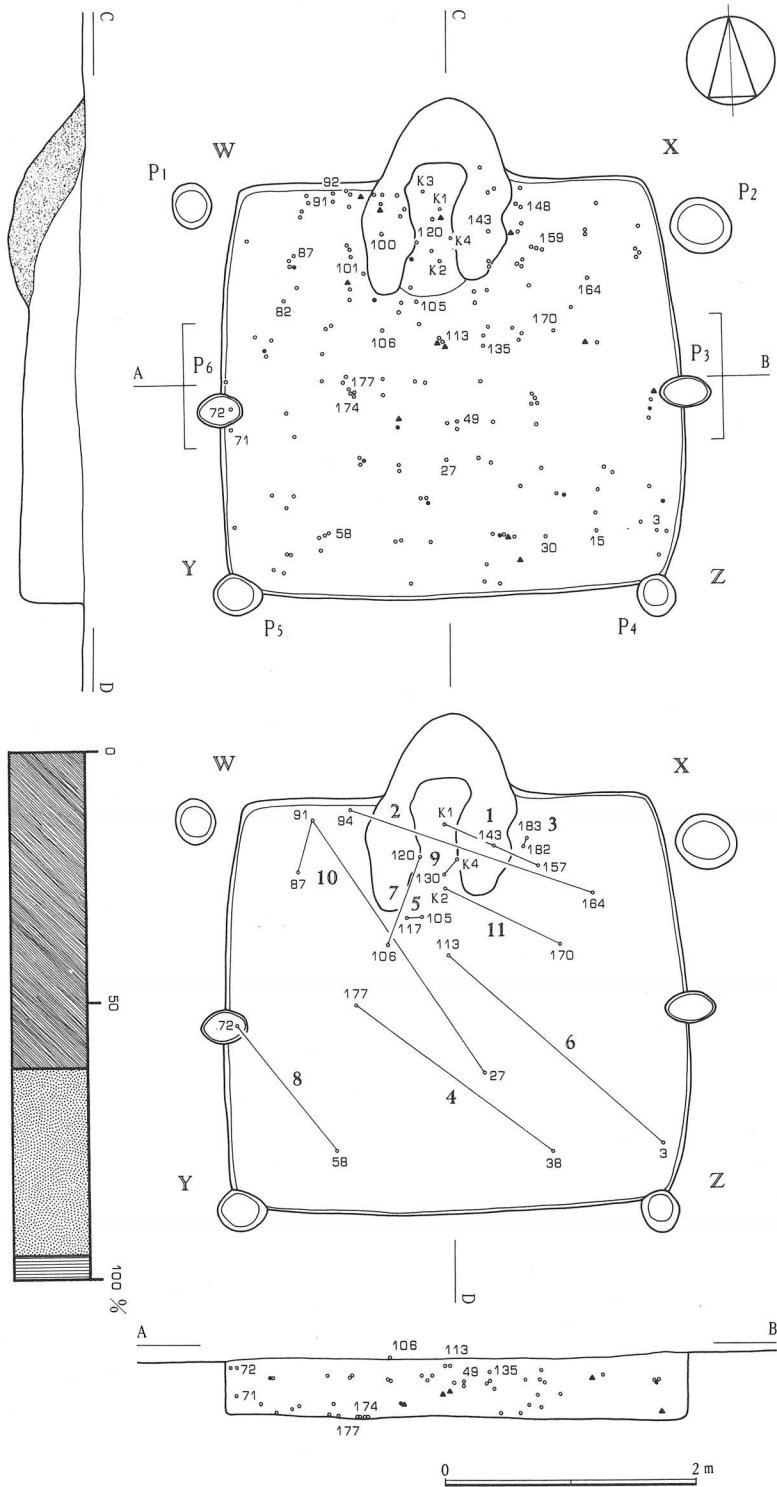
第三号住居址(第八・九図、図版第八)

遺存状態 比較的良好である。

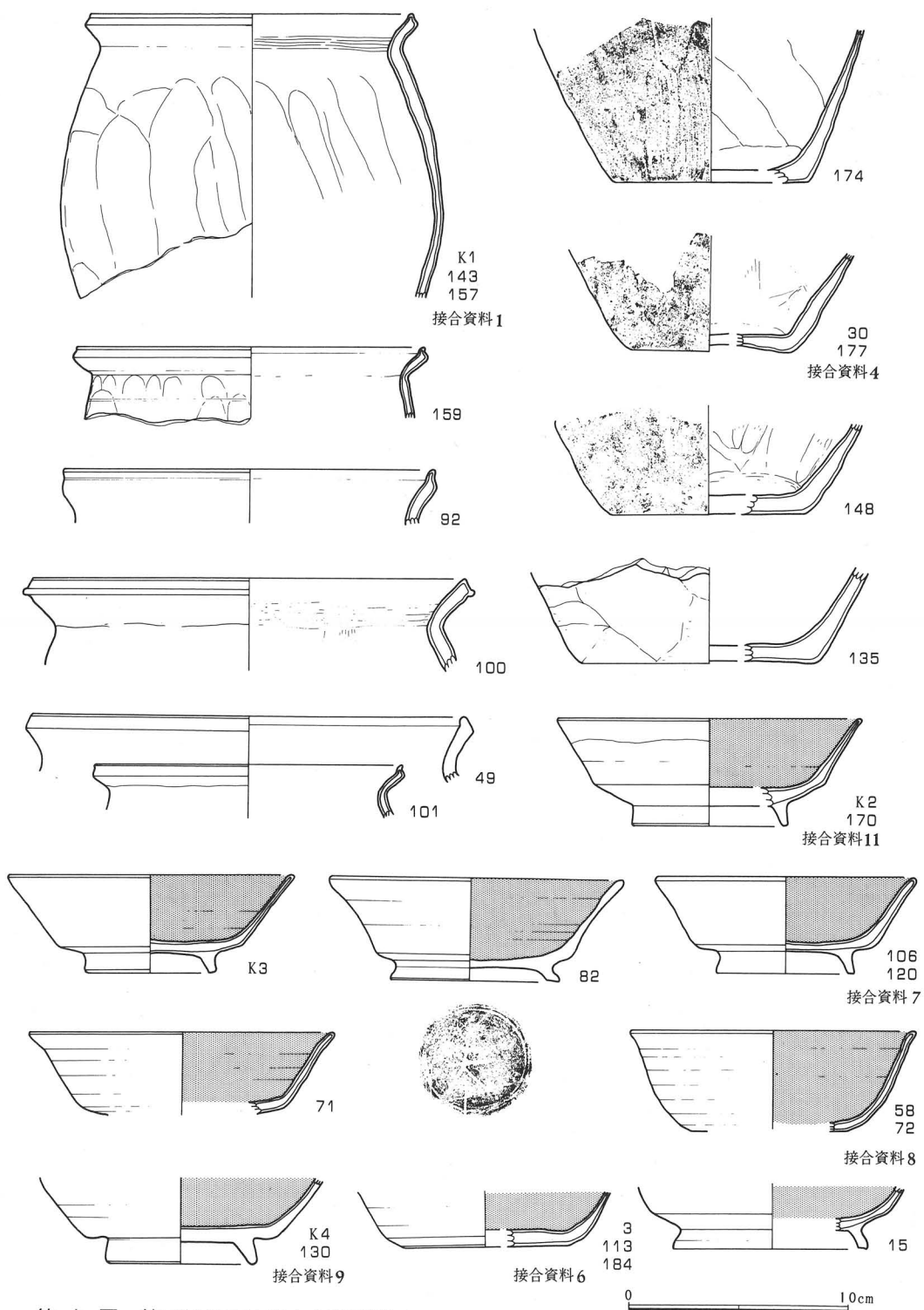
規模・形態 W-X間約3.2m、Y-Z間は30cmほど長く約3.5m、南北の両壁間は約3.3mを測り、不整形を呈し、面積は約12㎡である。周壁面はほぼ垂直に掘り下げ、深さは西壁(W-Y)が40cm、東壁(X-Z)に移行するにしたがい50cmと若干深くなる。

床面 平坦ではあるが全体に凹凸が認められ、硬度は3に相当する。貼床と周溝は認められない。

柱穴 ピットは6本存在する。このうちP₁とP₂はコーナーより僅かに離れたローム面



第八図 第三号住居址実測図



第九图 第三号住居址出土土器実測図

に、P₃とP₄はコーナーに接して外側に発見され、直径は30～45cm、深さ30cm前後である。この4本のピットは支柱穴と考えられる。これに反し東西両壁の間にあるP₅とP₆は、楕円形を呈し、いずれも斜め(45°前後)に掘り込み、深さは60cmを測る。このピットも柱穴と考えられるので、その場合の上屋構造は他の住居と著しく相違したものになるだろう。

カ マ ド 北壁の中央に構築し、両袖部の遺存状態は良好である。奥壁～焚口間の全長は150cm、焚口幅約40cm、燃焼部幅45cmあり、左右の袖部は灰白色砂質粘土を使用している。

埋 没 土 床面から確認面までの土層断面は、微量のローム粒子を混入した黒色土で、細別区分線を引くことができなかった。おそらく同一性状の土砂を投棄し埋め戻したのであろう。住居址の周囲からこれだけ多量の土砂は容易に竪穴内に流入しない。

遺物の種類・出土状態 土師器では甕形土器、坏形土器、高台付坏形土器の種類があり、須恵器もほぼ同様な破片が存在する。遺物の総数は185個、内訳は土師器破片160個、須恵器破片15個、自然石10個である。土器破片の表裏関係は、表108個(61%)、裏59個(34%)、立ち8個(5%)の割合になる。

住居址内の遺物は、ドット・マップ上から観察すると、平均的に全空間に散在し、その垂直分布のありかたも、ほぼ平面分布に似通った状態である。接合資料は後述する11例が発見されていて、この中の6例までが接合間隔に違いはあるけれども、おおむねW-Z(北東-東南)の方向に並列する。廃棄の方向性と関係する好事例である。

接合資料 すべて土師器で甕形土器に5例、坏形土器に3例、高台付坏形土器に3例の11例が発見できた。そのありかたは接合関係図に示すような状態である。

時 期 国分式期の住居址に属し、年代は第二号住居址とほぼ同様に考えられる。

第四号住居址(第一〇・一一・一二図、図版第八)

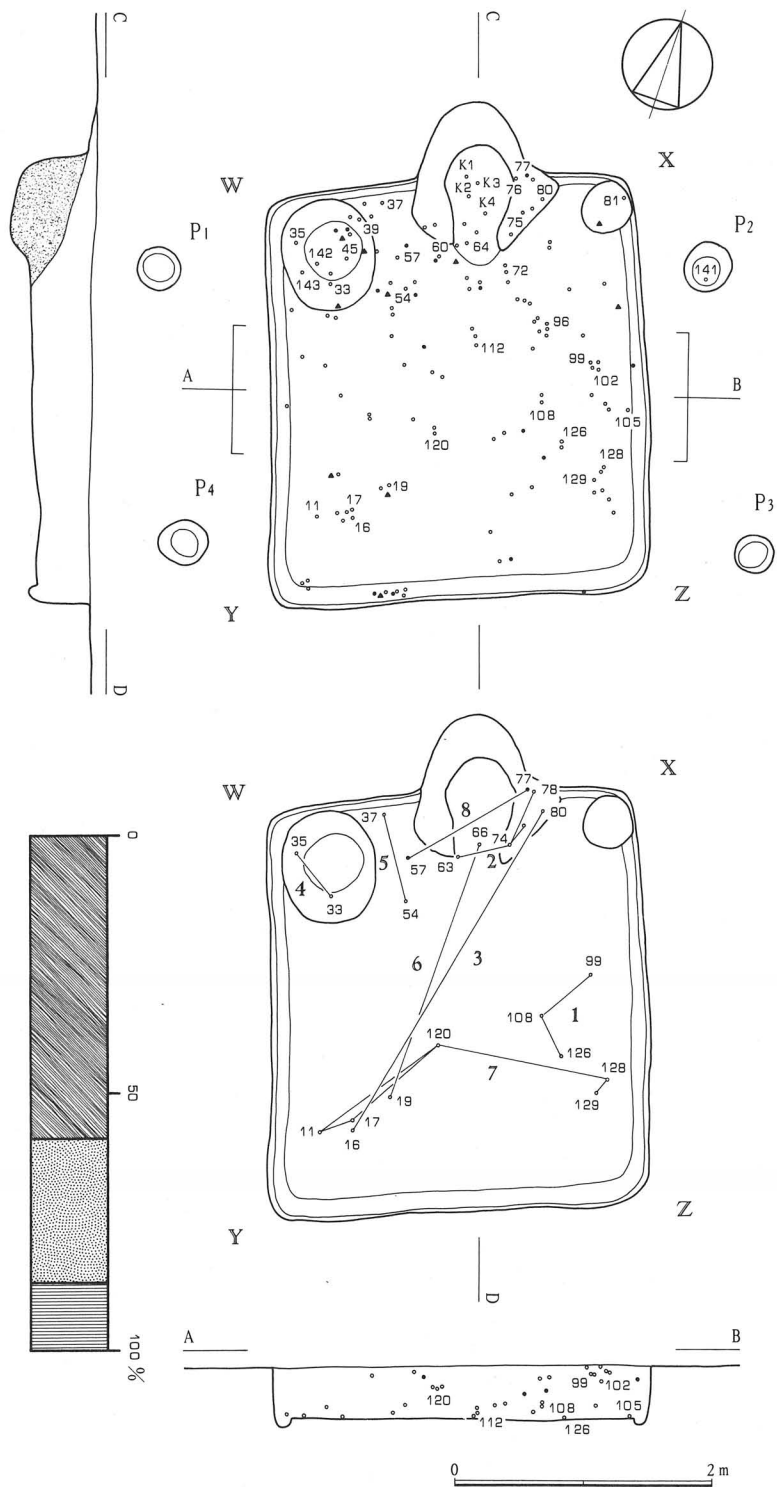
遺存状態 全体に良好である。

規模・形態 W-X間約2.9m、Y-Z間もほぼ同様の長さである。W-Y・X-Z間は3.2mを測り、長方形を呈する。面積は約9.2㎡である。壁高は40cm前後で、ほぼ垂直に掘り下げている。

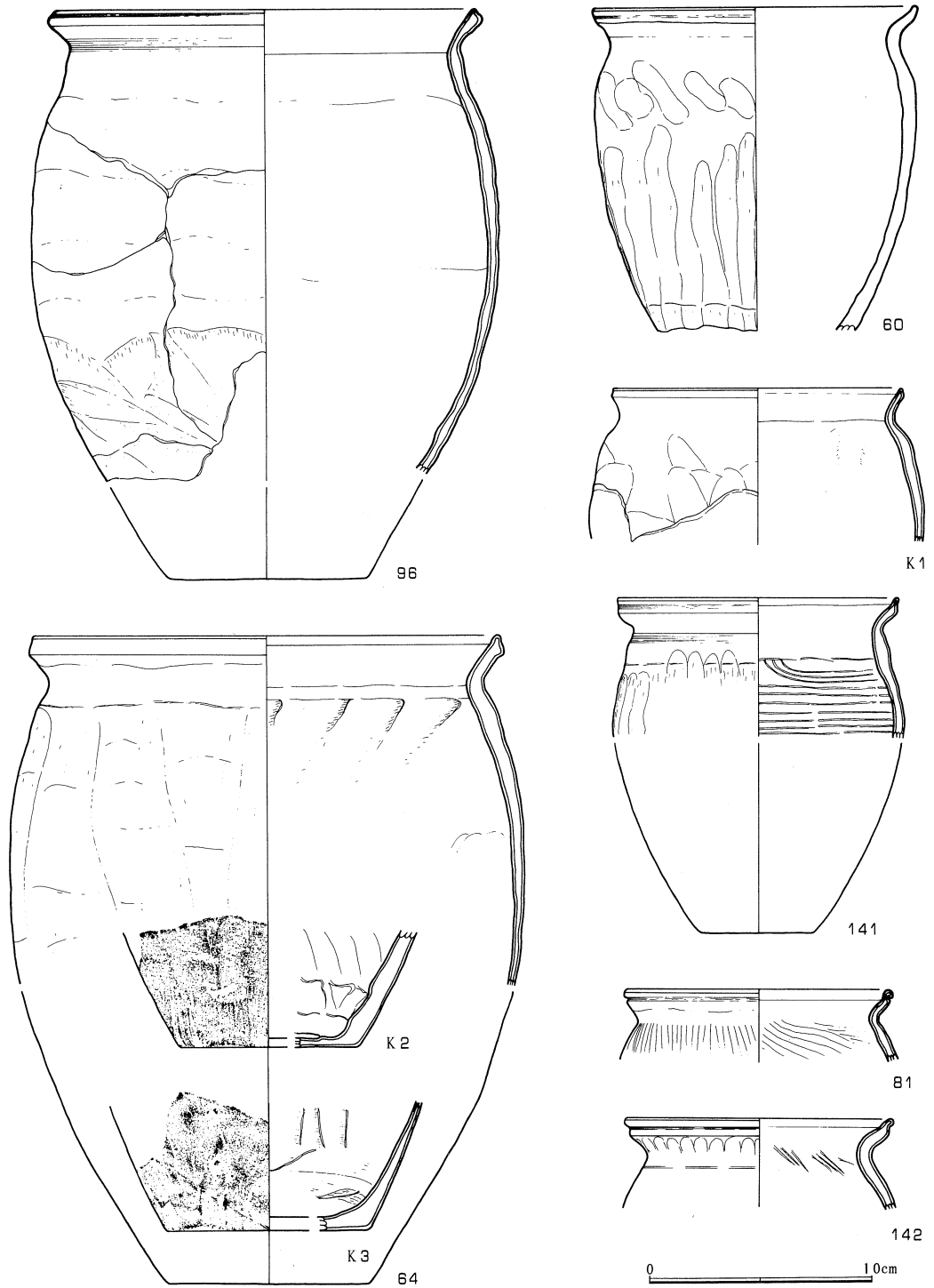
床 面 全体に硬度3に相当し、多少凹凸が認められる。周壁に沿って幅10cm、深さ5～8cmの溝がめぐる。Wコーナーに直径約75cm、深さ57cmの円形の穴が存在する。またXコーナーにも直径40cm、深さ18cmの穴が認められる。多分貯蔵用の施設であろう。

柱 穴 床面上には柱穴らしきピットは存在しない。壁外のローム面を精査した結果、4本のピット(P₃の位置がずれている)が発見できた。深さ30cm前後なので本住居址に付随した柱穴であろうと考えられる。

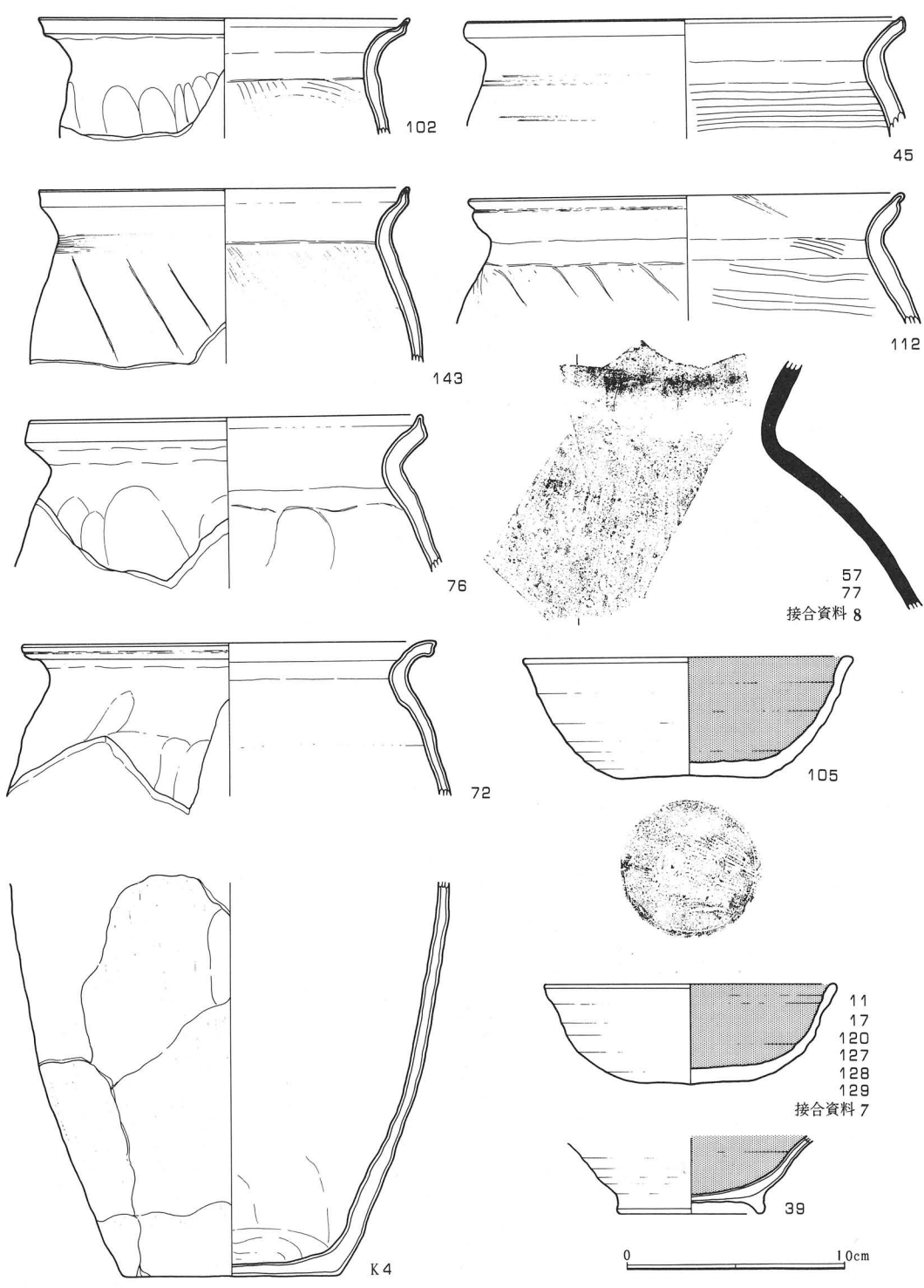
カ マ ド 北壁の中央より僅かに東に片寄って構築されている。奥壁～焚口間は125cm、焚口



第一〇图 第四号住居址实测图



第一一図 第四号住居址出土土器実測図(1)



第一二図 第四号住居址出土土器実測図(2)

幅約35cm、燃焼部幅45cmで、両袖部の残存状態は良好であり、灰白色の砂質粘土をもって築いている。内部の土層は、焼土を含む赤褐色土の上に、天井部の落下、崩落した砂質粘土が堆積する。

埋 没 土 第三号住居址の埋没土に類似した性状の黒色土である。

遺物の種類・出土状態 大部分は土師器の甕形土器、坏形土器の破片であり、須恵器の坏形土器、甕形土器の破片15個が出土した。遺物総数143個の内訳は、土師器119個、須恵器15個、自然石9個である。土器破片131個の表裏関係は、表75個(57%)、裏40個(31%)、立ち15個(12%)の割合を示している。

ドット・マップに記録した遺物の散在状態は、どちらかというとな北壁に移行するにしたがい、その数が増加する。接合資料の接合方向や出土レベルなどから、北壁～東壁方向からの遺物廃棄が考えられる。接合資料は、土師器7例、須恵器1例の合計8例が抽出できた。

接合資料1〈土師器甕形土器〉126△0・108△13・99▽35

接合資料2〈 同 〉63△8・74△10・75▽12・78△8

接合資料3〈 同 〉80△9・16△6

接合資料4〈 同 〉35△30・33△8

接合資料5〈 同 〉54▷8・37▽6

接合資料6〈 同 〉19▽0・66△19

接合資料7〈土師器坏形土器〉129▽34・128▽40・120▽22・11△10・17△1

接合資料8〈須恵器甕形土器〉77▽10・57△4

時 期 国分式期の住居址であって、9世紀第3～4四半期と考えられる。

第五号住居址(第一三・一四図、図版第九)

遺存状態 比較的良好な状態で残っている。

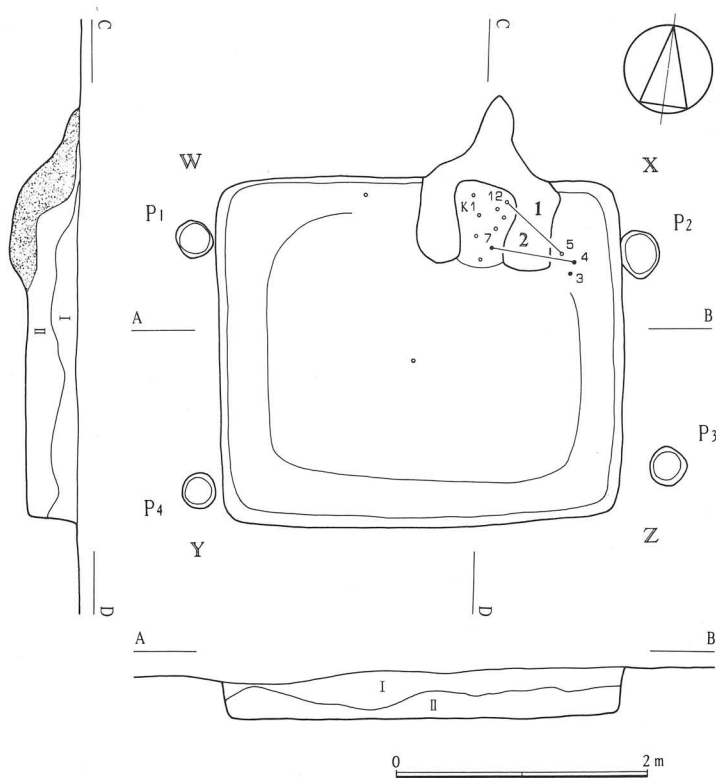
規模・形態 北壁と南壁は約3.2m、西壁と東壁もほぼ同じ長さの2.7mを測り、長方形を呈する住居址である。壁高は35～40cmを有し、若干斜めに掘り下げて構築している。

床 面 ほとんど平坦であって、壁の近くの外区は硬度2、それより内部の空間は硬度3に比定できる。周溝は全然検出されない。

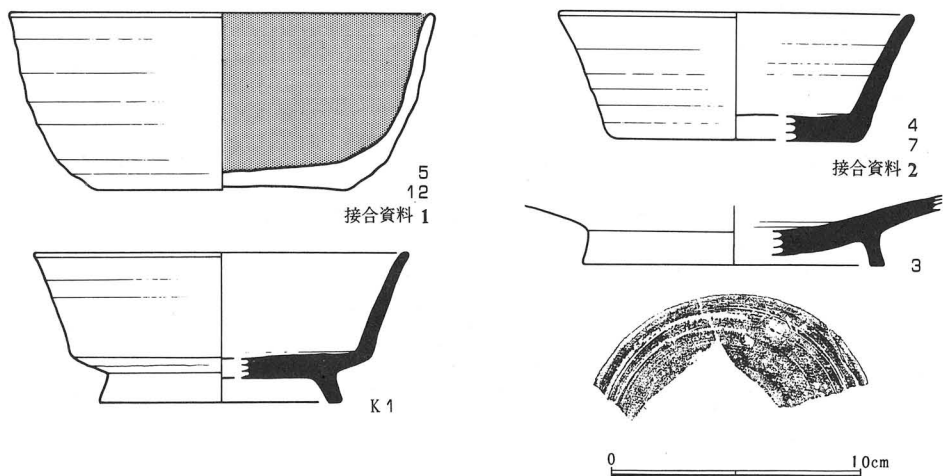
柱 穴 第四号住居址の場合と同様に、各コーナー近くの壁外に4本発見された。P₃の位置が僅かに片寄っているけれども、本址に付随した主柱穴であろう。各柱穴の直径は30cm前後、深さは25cm程度である。

カ マ ド 北壁の中央より東側に構築され、両袖部は砂質粘土を用いている。全長140cm、焚口幅35cm、煙道は壁外にあって、燃焼部付近の天井部が残存していた。

埋 没 土 土砂は2層に区分できる。床面上に黒褐色土、その上部に黒色土が堆積する。



第一三图 第五号住居址实测图



第一四图 第五号住居址出土土器实测图

遺物の種類・出土状態 廃絶時の遺物は、カマド内に須恵器の坏形土器、高台付盤形土器、壺形土器などの破片9個、右袖部の外側床面上に土師器と須恵器の坏形土器、高台付盤形土器の破片が3個出土し、このうちの2個は相互に接合する。接合資料は2例存在する。

時期 8世紀の第3～4四半期を中心としたころであろう。

第六号住居址(第一五・一六図、図版第一〇)

遺存状態 比較的良好な住居址である。

規模・形態 各壁の辺長が2.9～3.0mのほぼ方形を呈する。面積は約9㎡である。壁高は地点によって若干相違するが35～40cmを測る。壁面はほとんど垂直に近く掘り下げている。

床面 全体に平坦であって硬度は3に比定できる。P₁の付近から東壁のカマド左袖にかけては、なぜか周溝が認められない。周溝は幅10～15cm、深さは10cm程度である。Xコーナーに直径約30cm、深さ20cmの浅いピットが存在する。

柱穴 床面上に柱穴らしいピットはなく、壁外に接してP₁～P₄が存在し、深さ30cmを測るので、本址に属する支柱穴と見做される。

カマド 東壁のほぼ中央に存在し、両袖は砂質粘土と凝灰岩を使って構築している。奥壁～焚口間の長さは約1.1m、焚口幅約30cm、燃焼部幅40cmである。

埋没土 北西壁寄りにローム粒子の多い黄褐色土、中央部に黒褐色土、その上部に黒色土が堆積する。周囲から流入した土砂の埋没状態と明らかに相違するセクションである。

遺物の種類・出土状態 土師器が大部分で甕形土器、坏形土器、高台付坏形土器の破片96個、須恵器坏形土器の破片2個と自然石14個である。土器破片の表裏関係は、表44個(45%)、裏39個(40%)、立ち16個(16%)になる。

ドット・マップの平面分布は、北壁側約80cmの範囲に遺物が散在せず、それより南壁方向にまとまって出土している。特に多く認められるのは中央付近の空間である。垂直分布はA-Bセクションからも窺われるように、南東壁方向より床面にドット群が傾斜し、この方向から遺物がまとめて投棄された状態を示している。接合資料は3例抽出できたが、本址の場合、接合方向が廃棄の方向と直接結びつかないように思われる。これは投棄実験例からも同じことがいえる。

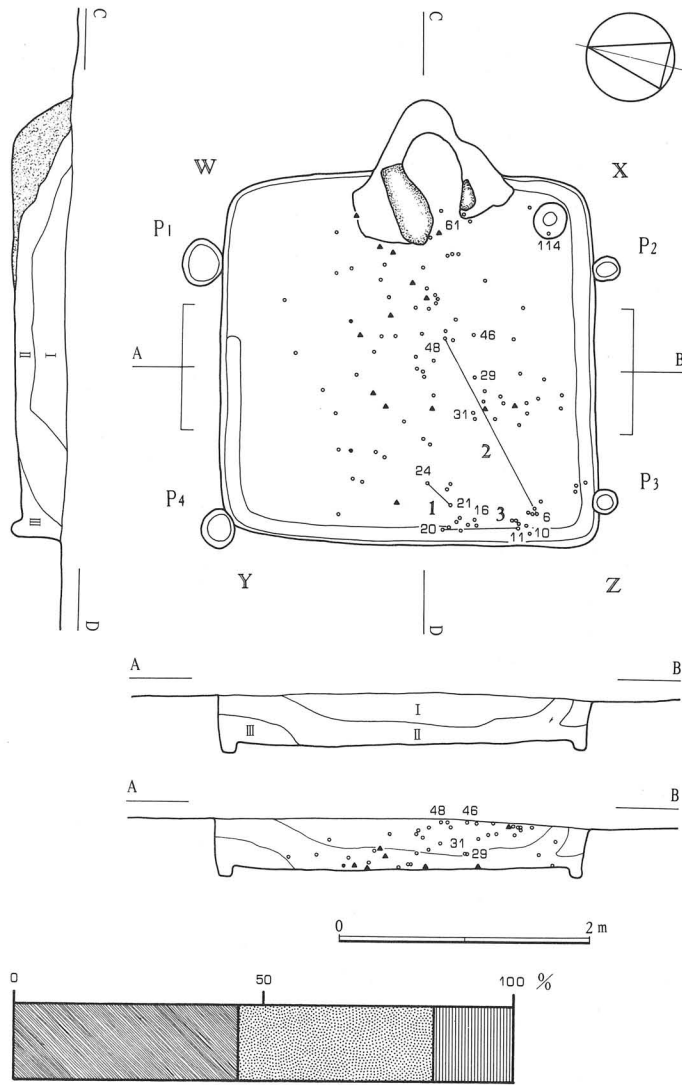
接合資料 土師器に3例発見された。

接合資料1< 甕形土器 >24△4・21▽10

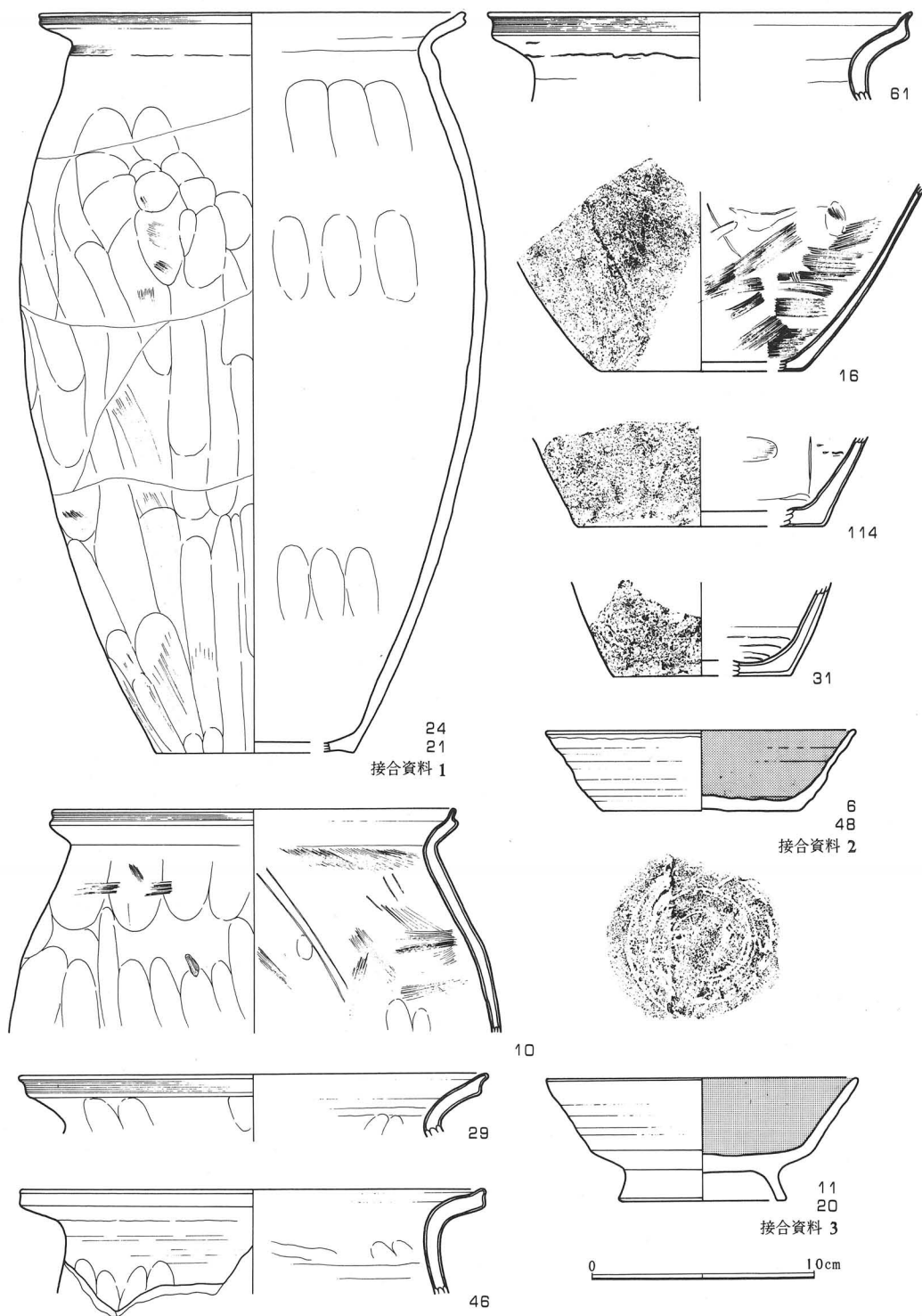
接合資料2< 坏形土器 >6▽8・48△37

接合資料3<高台付坏形土器>11▽12・20△30

時期 歴史時代の国分式に該当する土器で、年代は9世紀第1～2四半期と考えられる。



第一五图 第六号住居址实测图



第一六図 第六号住居址出土土器実測図

第七号住居址(第一九・二〇図、図版第一一)

遺存状態 全体に良好である。

規模・形状 主軸方向をほぼ南北にとる住居址で、W-X・Y-Zの南北両壁間の長さ3.5m、W-Yの西壁3.6m、X-Zの東壁は若干短くなって3.4mを測る。ほぼ方形に近いけれども、カマドを壁外に構築しているために、長方形の感じを受ける。面積約12㎡、壁高は50~60cmを有する。

床面 ほぼ平坦であり硬度3に比定できる。周壁に沿って幅約10cm、深さ7cm前後の溝がめぐっている。全面に貼床が施され、厚いところで約30cmに達する。

柱穴 床面上には存在しないので、壁外のローム面を精査中、西側に3本、東側に3本の直径約35cm、深さ約45cmのピットが発見できた。若干不規則ではあるが、ほぼ対称的な位置にあり、本址に付随した柱穴とみられる。

カマド 北壁のほぼ中央に位置し、壁外に張出して構築されている。奥壁~焚口間約1.5m、両袖部はロームの壁内側に砂質粘土を用いており、床面上に構築する袖部より幅が若干せまくなる。底面は、僅かに掘りくぼめ、焼土、両袖部と天井部の砂質粘土が崩落して堆積し、また焚口から床面上にまで流出していた。

埋没土 東西のA-B断面は、黒色土Ⅲ、褐色土Ⅱ、黒色土Ⅰの順序で堆積するが、南北C-D断面では、この褐色土Ⅱが中央に約1.5mの長さで介在し、堅穴全面にまで堆積していない。ロームを主体とした土砂であり、住居址内に廃棄したものである。

遺物の種類・出土状態 土師器では甕形土器、坏形土器、須恵器では甕形土器、坏形土器と紡錘車、自然石などが合計180個出土している。内訳は、土師器破片164個、須恵器破片5個、紡錘車破片2個、鉄器1個、自然石8個である。土器破片164個の表裏関係は、表67個(41%)、裏76個(46%)、立ち21個(13%)の割合となる。

遺物の散在状況は、中央からWコーナー寄りの空間に少なく、その他はほぼ平均的にみられるが、部分的に集中しているところもある。A-Bセクションを中心に幅1mの範囲内に存在する遺物を断面図に投影してみると、ほとんどの遺物は、床面上から確認面までの間に散在するけれども、廃棄に関する特別な傾向は指摘できない。

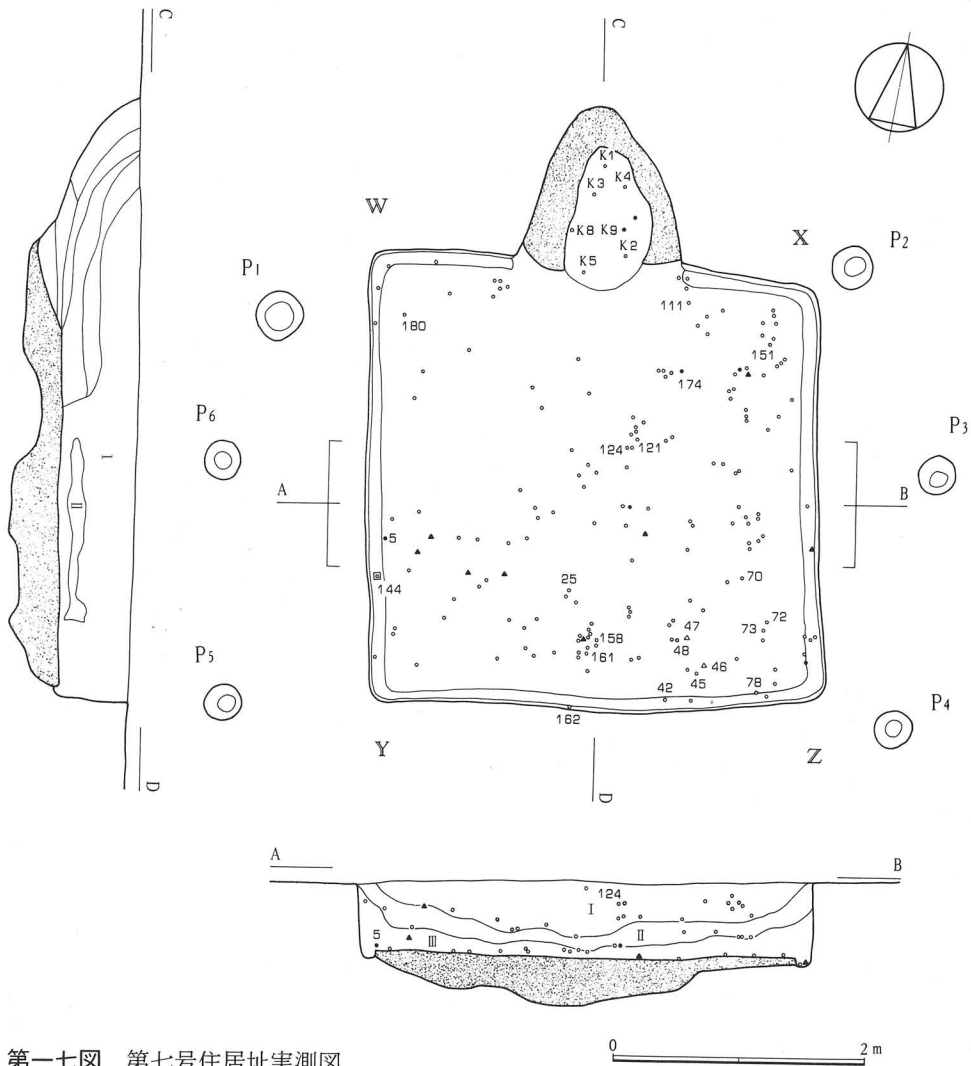
接合資料は、全体的に南壁中央からZコーナー寄りに多く、資料2は約3.7mの間隔でカマド内の遺物と接合する。資料7・8もカマド内の遺物との接合である。資料6の東西方向の1例を除くと、接合間隔に長短はあるがほぼ南北に接合する事例が多い。おそらく廃棄の方向と関係があるように思われる。

接合資料 土師器に6例、須恵器に2例、紡錘車1例の合計9例が確認できた。

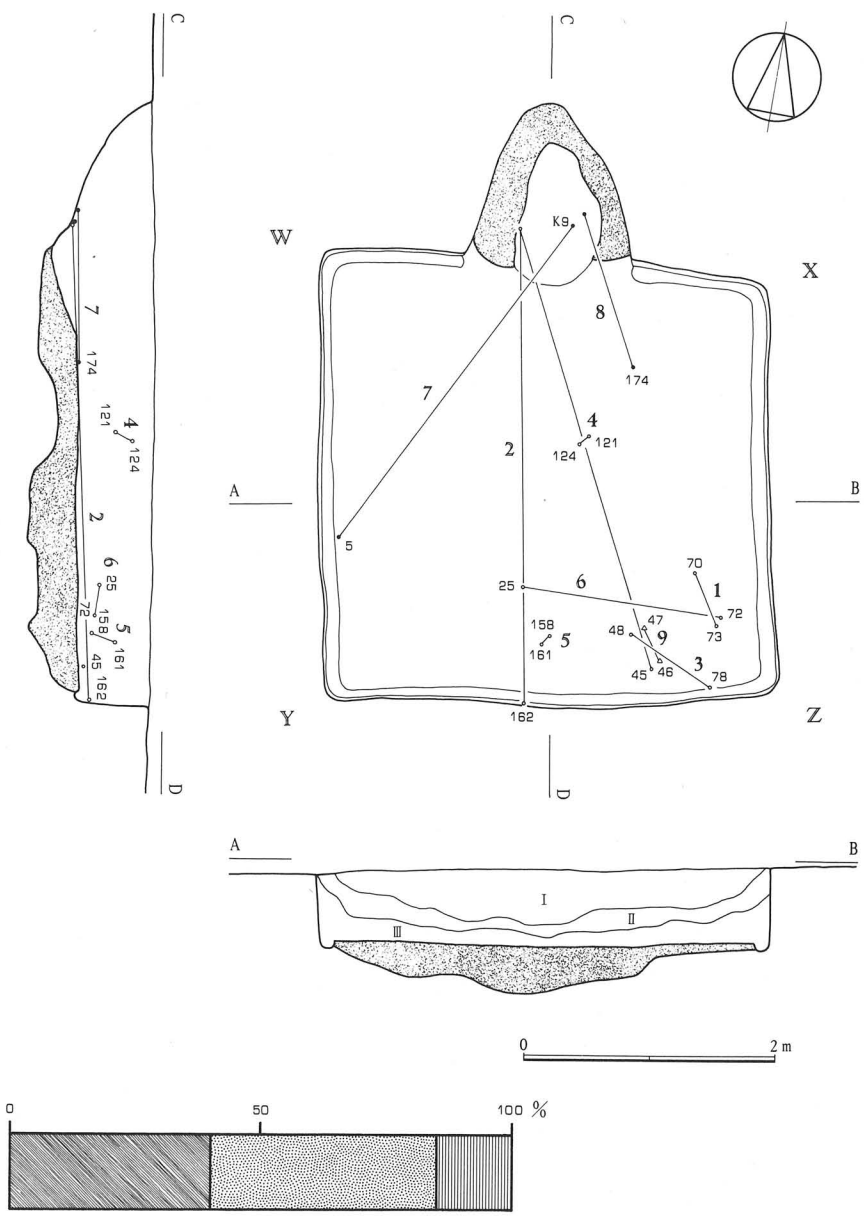
接合資料1< 土師器甕形土器 >73▽13・70▽9

- 接合資料 2 < 同 > 162▷0・カマド内・45△4
 接合資料 3 < 同 > 78△38・48△41
 接合資料 4 < 同 > 121△29・124△43
 接合資料 5 < 土師器坏形土器 > 161▽30・158▽12
 接合資料 6 < 土師器高台付坏形土器 > 25▽16・72▽14
 接合資料 7 < 須恵器甕形土器 > 5▽4・カマド内
 接合資料 8 < 須恵器坏形土器 > 174△0・カマド内
 接合資料 9 < 紡錘車 > 46・47

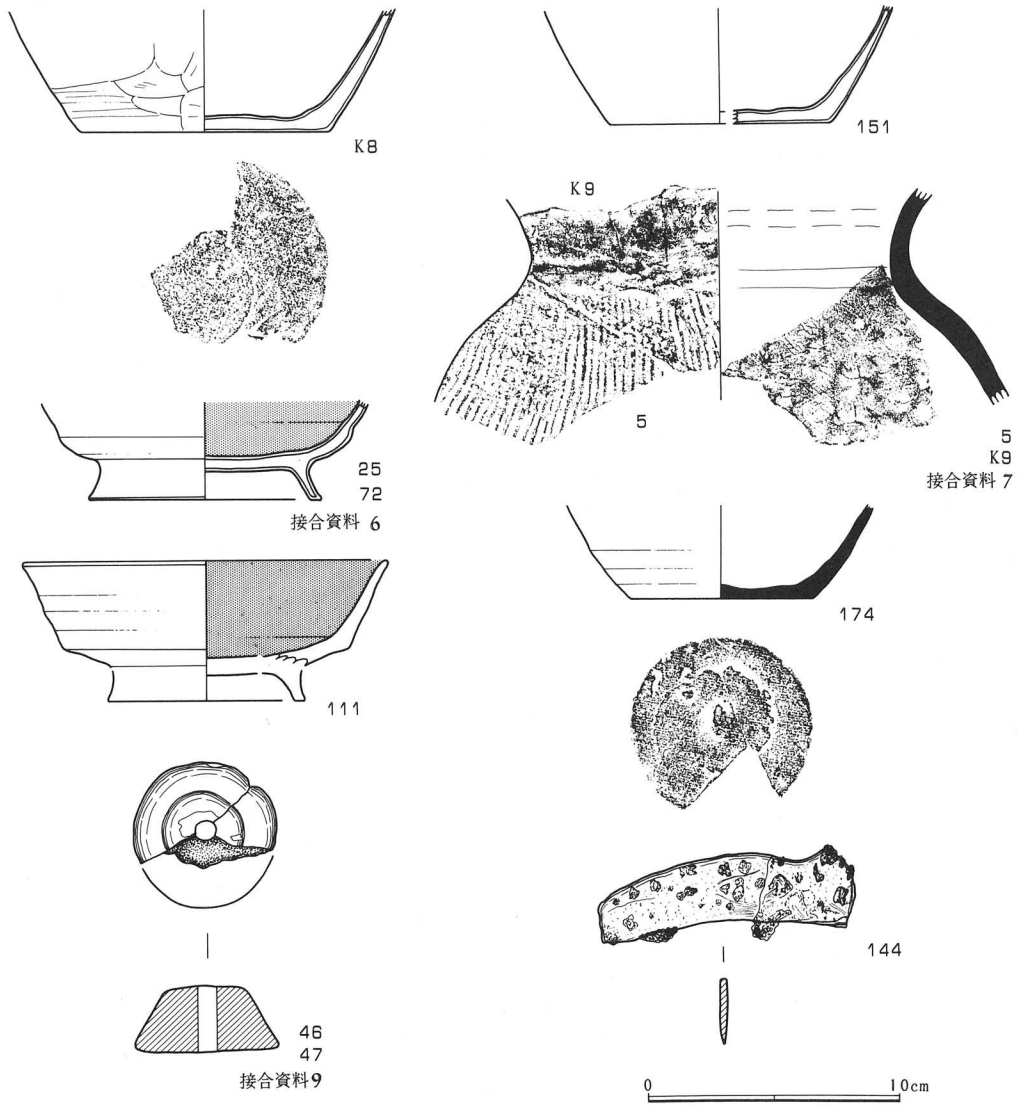
時 期 第六号住居址の年代より若干新しくなるであろう。



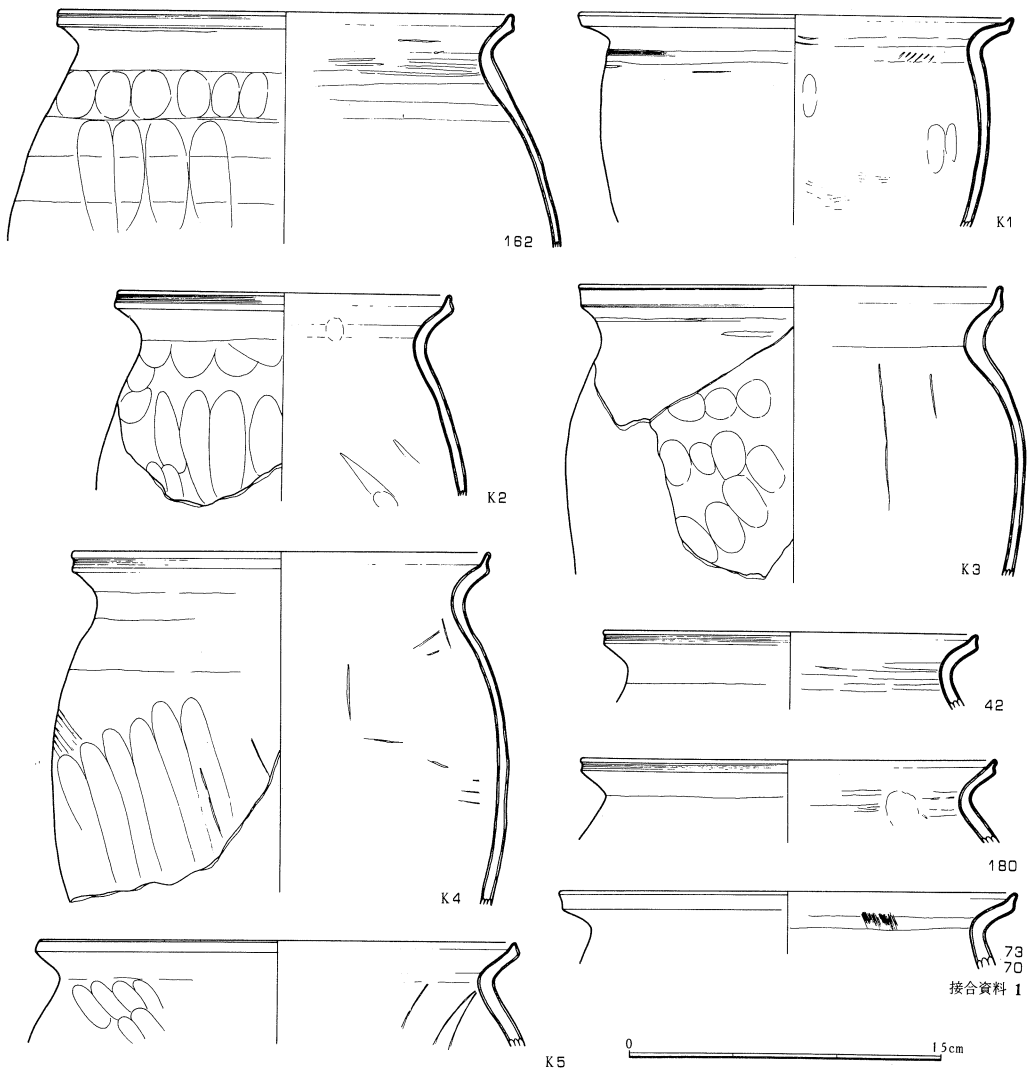
第一七図 第七号住居址実測図



第一八图 第七号住居址接合関係図



第一九図 第七号住居址出土土器・紡錘車・鉄鎌実測図(1)



第二〇図 第七号住居址出土土器実測図(2)

第八号住居址(第二一・二二・二三図、図版第一二・一三)

遺存状態 良好な状態で残存している。

規模・形態 東西壁間は5.1～5.2m、南北壁間は5.0～5.1mの規模を有し、ほぼ方形に近い形状である。壁の掘り下げはほぼ垂直で45～50cmの深さを測る。面積約26㎡。

床面 ほとんど平坦であって、硬度は3に相当する。貼床は、東西両壁の中央付近にだけ認められ、厚さは15cm程度である。周溝は存在しない。

柱穴 各コーナーの対角線上に位置し、壁面より約1.5～1.7m内側の床面に存在する。4本のピットは、位置関係から主柱穴と考えてよい。各柱穴の深さは、P₁73cm、P₂79cm、P₃72cm、P₄60cmを測る。

カマド 北壁の中央から僅かに東に片寄った位置にある。つくりは堅固で右袖部の焚口付近と天井部が崩落しているだけである。奥壁～焚口間約160cm、左袖部幅約60cm、右袖部も同様であったと思われる。焚口幅約30cm、燃焼部約40cmである。底面は若干掘りくぼめ、燃焼部から奥壁に向かって緩くカーブしながら立ち上がる。

埋没土 床面上にロームの廃棄土Ⅲがあり、その上にローム粒子を多量に混入した黒褐色土Ⅱ、黒色土Ⅰが堆積する。竪穴を埋め戻す際に投棄した土砂であることはいうまでもない。

遺物の種類・出土状態 土師器の器種は、甕形土器がすべてである。須恵器の器種は、甕形土器、壺形土器、坏形土器、高台付盤形土器、蓋形土器などで破片が主体となる。出土遺物の内訳は、土師器破片96個、須恵器破片34個、自然石46個(26%)である。土師器は甕形土器破片、須恵器は坏形土器破片が多い。出土土器130個に対する表裏関係の比率を調べると、表75個(58%)、裏50個(38%)、立ち5個(4%)になる。この比率は住居址出土土器の一般的なありかたとして理解できるものである。

遺物は、平面分布図を観察すると、カマド右袖部～P₂～P₄方向へかけての中央付近に比較的多く散在し、その他の空間はまばらである。周壁の近くにはほとんどみられない。レベル的には、床直の破片は9%程度で、大部分の土器破片や自然石はⅠ・Ⅱ層中に散在し、後述する接合資料3、4からも窺われるように上下の遺物が相互に接合する。

接合資料は、カマド前面からYコーナー方向に存在し、接合線の方法もカマドを指向する例が多い。遺物の廃棄は、北壁側より行われたと考えて大過ないであろう。

接合資料 土師器に6例、須恵器に3例の合計9例が抽出された。

接合資料1<土師器甕形土器>176△10・カマド内

接合資料2< 同 >6▽0・7▽0・カマド内

接合資料3< 同 >144▽22・140△7・107▽6・75△34・106△7

接合資料4< 同 >143△2・154△26

接合資料5< 同 >28△32・166△22

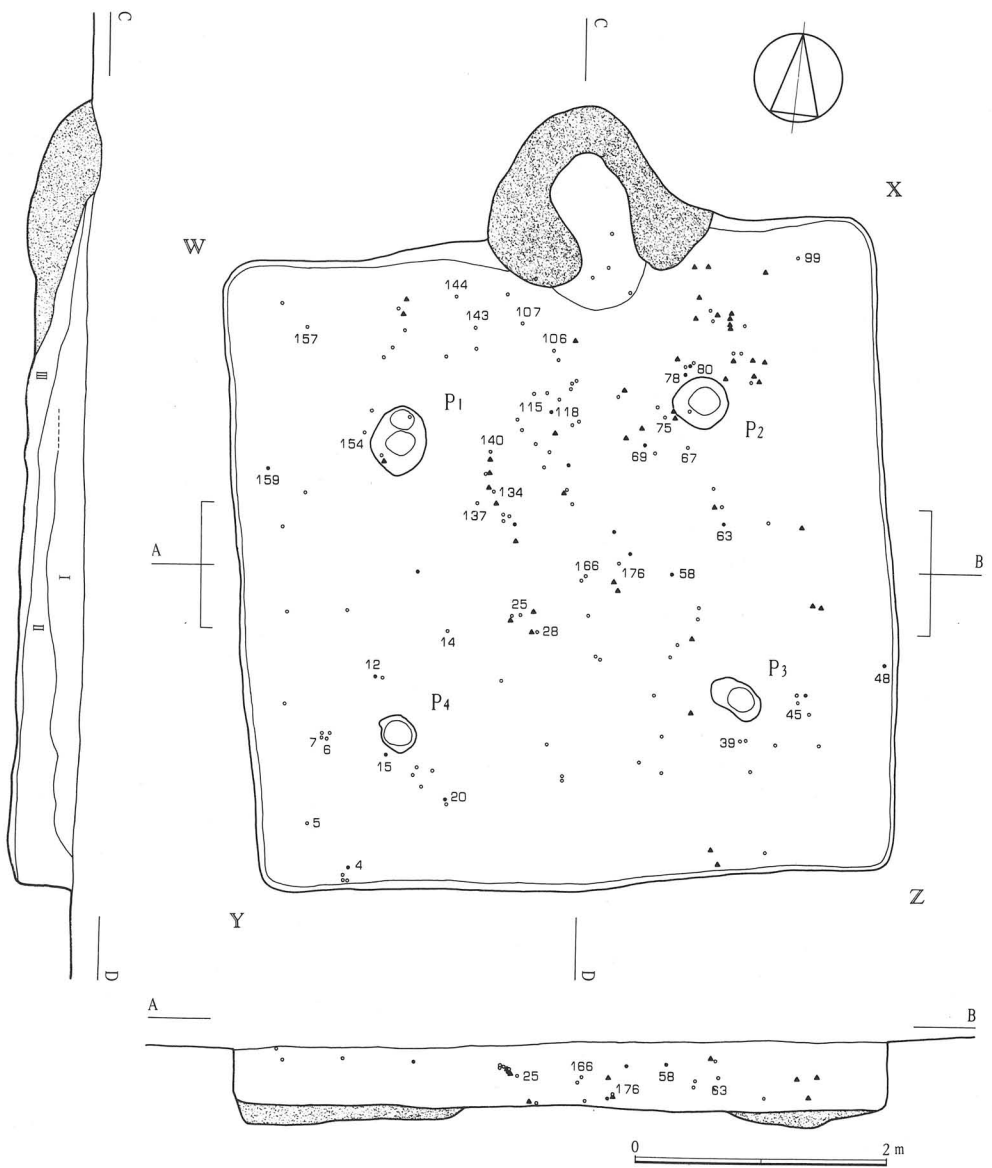
接合資料6< 同 >99▽4・カマド内

接合資料7<須恵器甕形土器>78△35・80△38

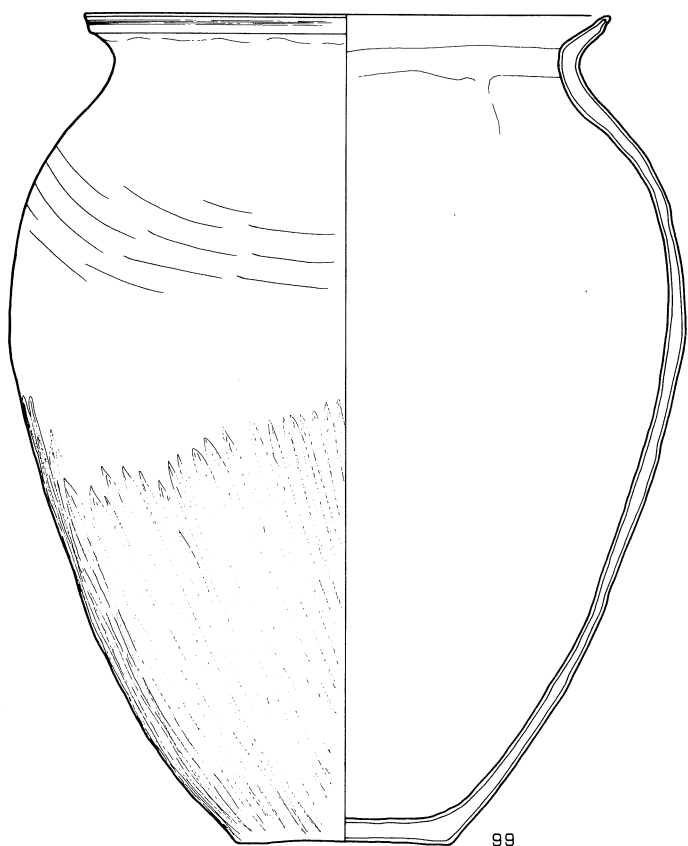
接合資料8<須恵器壺形土器>20△9・69▽18

接合資料9<須恵器坏形土器>12△25・159△13・15△18

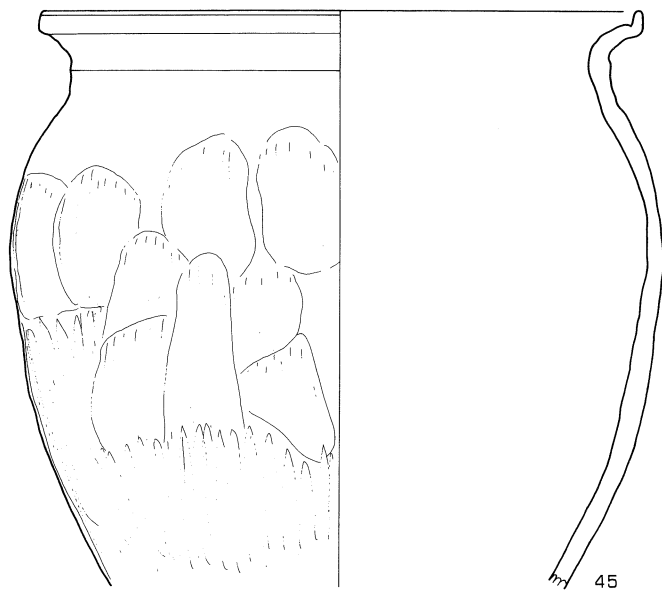
時 期 第五号住居址と同じく、8世紀第3～4四半期のころと思われる。



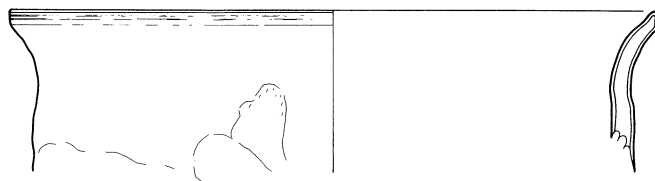
第二一図 第八号住居址実測図



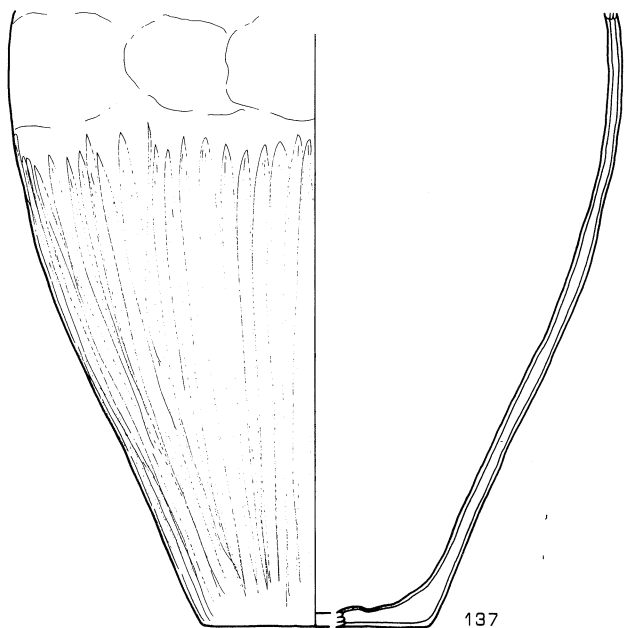
99



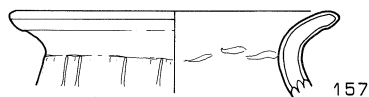
45



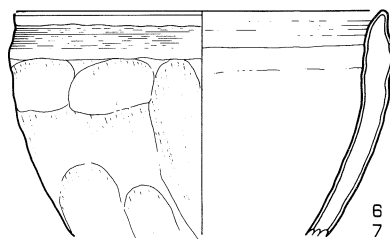
5



137

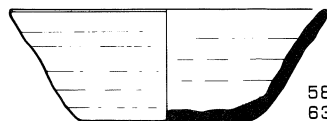


157



6
7

接合資料2



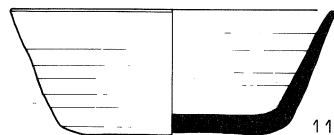
58

63

接合資料9



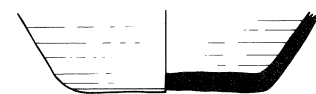
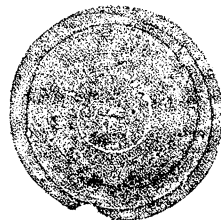
115



118



4

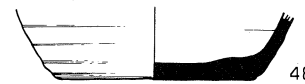


12

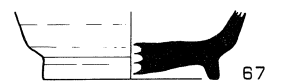
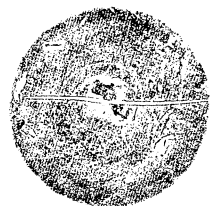
15

159

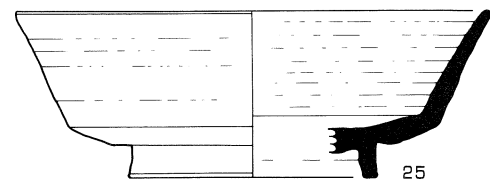
接合資料8



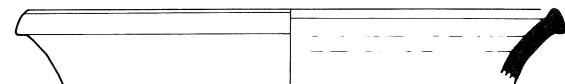
48



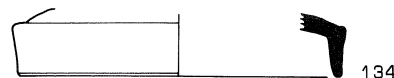
67



25



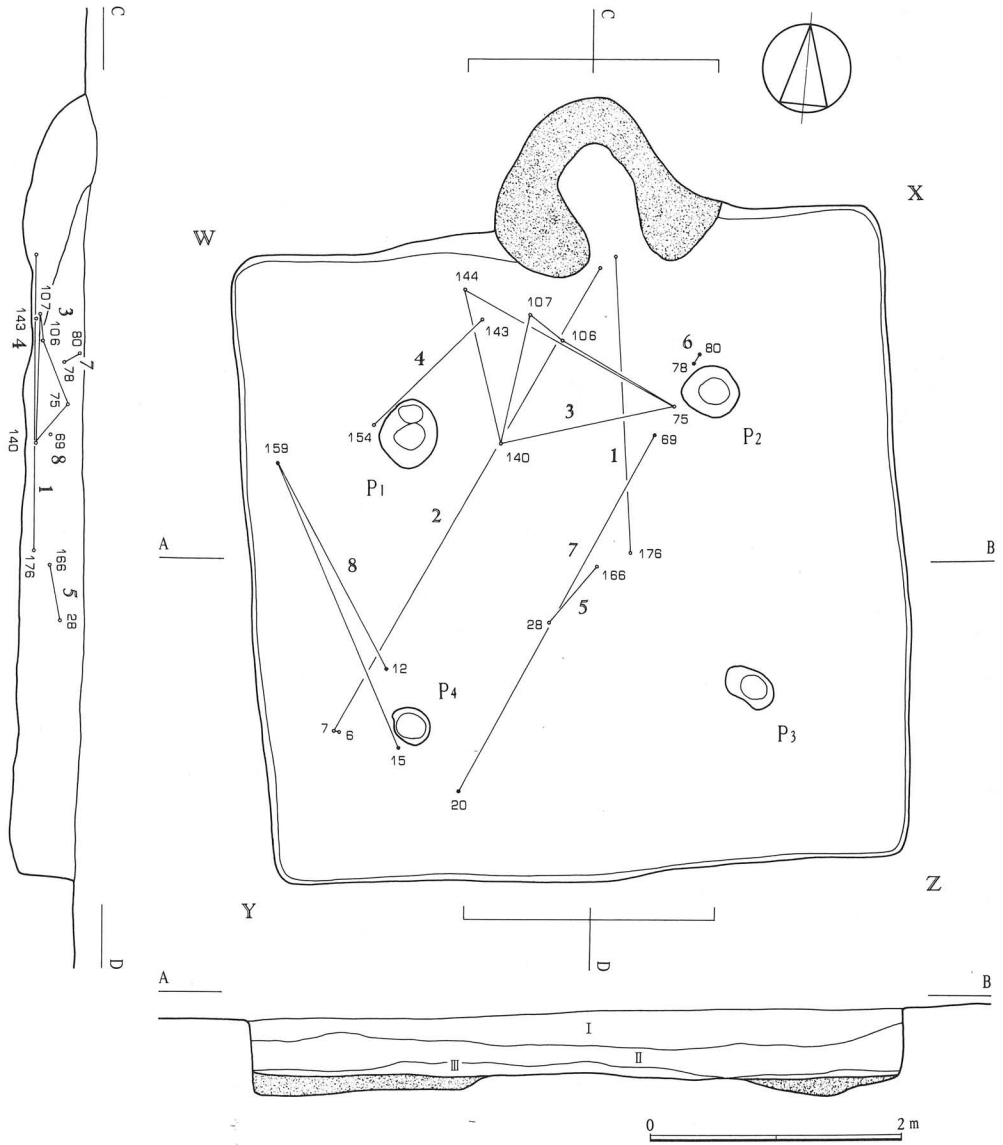
39



134



第二二图 第八号住居址出土土器実测图



第二三図 第八号住居址接合関係図

第九号住居址(第二四・二五図、図版第一四)

遺存状態 カマドの残りが悪いけれども、その他はほぼ良好である。

規模・形態 東側のW-X壁間約3.1m、南側のY-Z壁間約3.0m、東西のW-Y・X-Z両壁間約3.3mを測る。プランは、全体として長方形を呈するが、かなり隅丸の不整な住居址である。周壁は斜めに掘り下げてあり、確認ルーム面より約10cmの深さを有する。

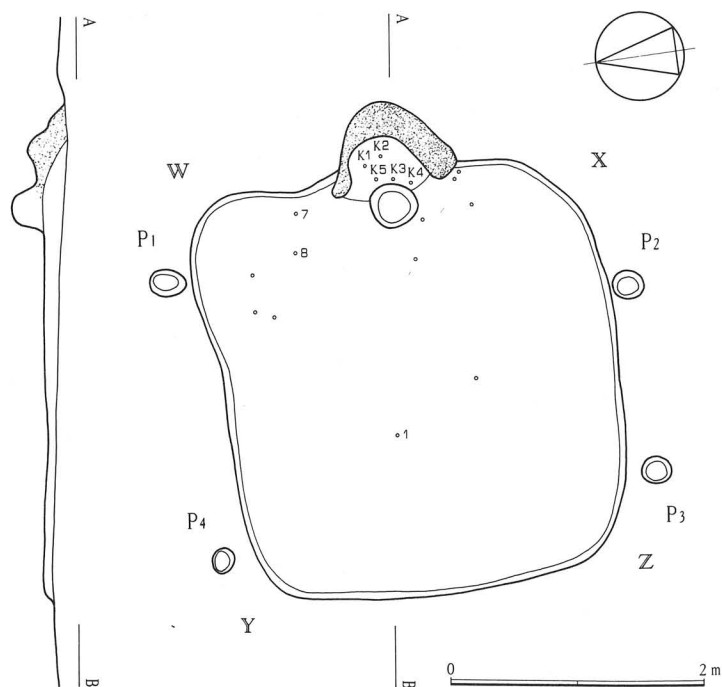
床 面 平坦であって硬度は2に相当し、全体に軟らかい。貼床と周溝は認められない。

柱 穴 竪穴内部の床面には検出できず、壁外のルーム面を精査したところ、W・Y・Zのコーナー近くと南壁中央から僅かに東に寄った地点に、4本のピットが確認できた。やや不規則な配置であるが主柱穴と考えられる。深さは27~32cmである。またカマドの焚口近くに直径35cm、深さ約50cmの円形ピットが存在する。

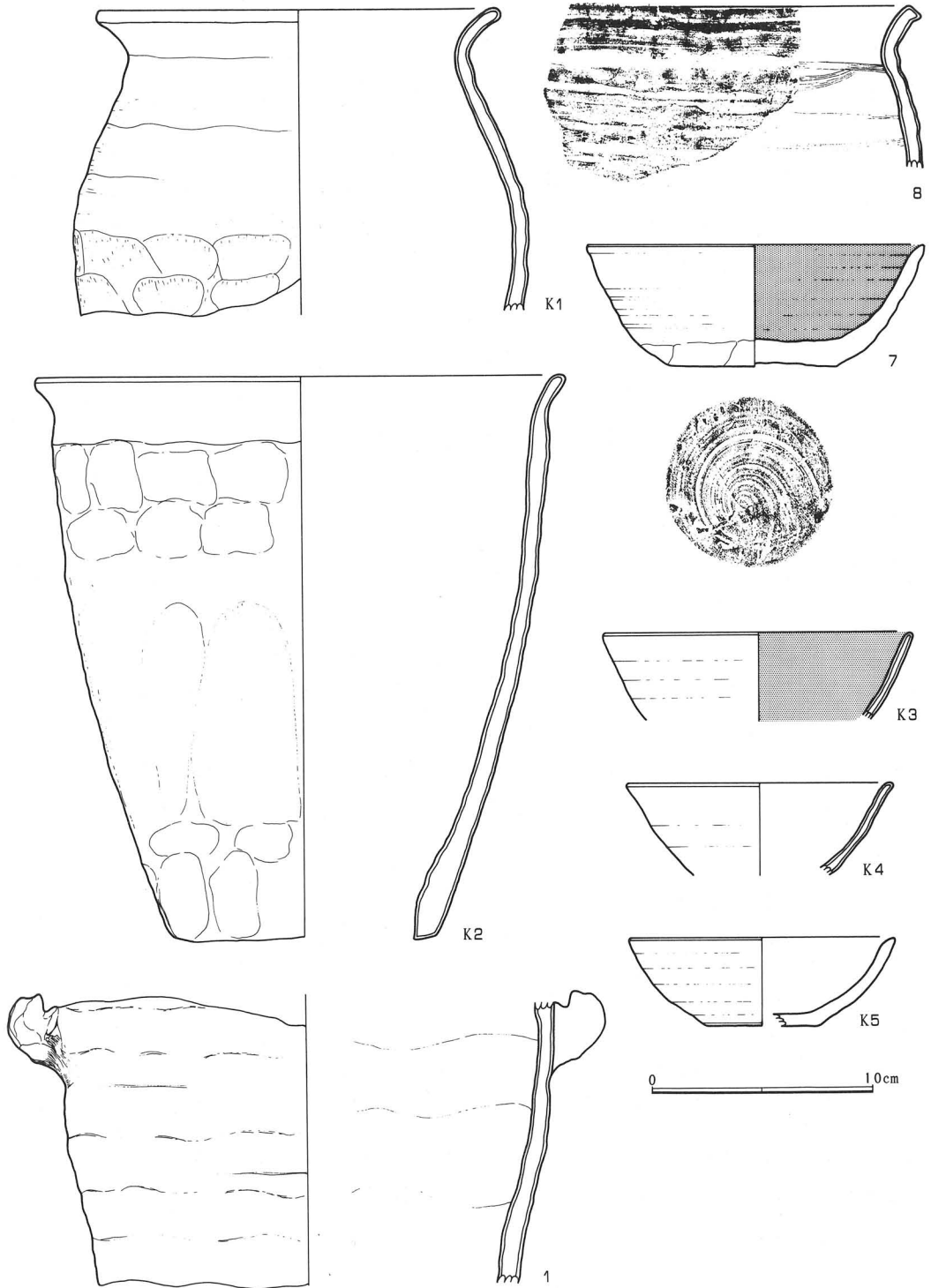
カマド 構築位置は、一般の住居と相違して東壁中央に存在する。全体に残存状態は悪い。特に両袖部の灰白色粘土はほとんど流失し残っていない。奥壁~焚口間は約80cm、両袖間約100cm、焚口幅約30cmである。

遺物は、カマドの前面と中央の近くに僅かに12個散在し、1個の須恵器小破片を除き、すべて土師器の破片である。接合資料も存在しない。器種は甕形土器、コシキ形土器、坏形土器である。

時期 9世紀第3~4四半期のころであろう。



第二四図 第九号住居址実測図



第二五図 第九号住居址出土土器実測図

第一〇号住居址(第二六・二七図、図版第一四)

遺存状態 ほぼ良好な状態で残存している。

規模・形態 隅丸の不整形な住居址である。北壁のW-X間が長く約3.7m、南壁のY-Z間は短く約3.4m、南北のW-YとX-Z間はいずれも約3.3mである。中央部の計測値は、南北3.4m、東西3.7mを測り、一応長方形の竪穴と考えられる。面積は約12㎡になる。周壁は斜めに掘り下げ、深さは35~40cm、壁面には崩落した痕跡が認められない。

床面 ほぼ平坦に固められてあり、硬度は特に柔らかい部分がなく、全体に3程度と思われる。貼床は、カマドの前面を除き、ほとんどすべての床面に認められる。厚さは一定せず厚いところで30cm、薄いところで10cm前後を測る。

柱穴 床面上には全然検出されず、壁外に接して3本、僅かに離れて3本が確認された。平面上から観察すると、P₁とP₂は不規則な位置にあり、P₃とP₄は規則的な配置である。おそらくこの4本が支柱穴の役割りを担い、P₅は補助的なものであろう。またP₆とP₁にかわる役目を果たしていたかも知れない。いずれも本址に関係するピットと考えてよいだろう。

埋没土 ローム粒子の混入の少ない黒色土Ⅰとロームを多量に含んだ暗褐色土Ⅱに区別できる。区分線の識別は容易である。人為埋没による土砂と考えられる。

カマド 北壁中央からXコーナー寄りに位置する。奥壁~焚口間は約100cmを有し、両袖部の内側と天井部は崩落している。右袖部と焚口上部に凝灰岩を利用した構築である。燃焼部の中央に直径10cmの支柱が残っていた。構築法に工夫が認められるカマドの一例であろう。

遺物の種類・出土状態 土師器の甕形土器と坏形土器の破片が大部分で、須恵器は僅かに甕形土器の破片1個、布目瓦、紡錘車などの他に自然石がある。総数は116個であり、その内訳をみると土師器破片110個、須恵器破片1個、布目瓦1個、紡錘車1個、自然石3個となる。

土器破片の表裏関係は、表75個(67%)、裏31個(28%)、立ち5個(5%)の割合で、裏の状態で出土した破片が少なすぎる。

平面分布は、カマド上面から前面に多く、南壁に移行するに従い少なくなる。中央付近から西壁よりの空間には数片が散在する程度である。垂直分布を観察すると、カマド右袖(P₂付近)方向からのドット群の流れが看取できる。

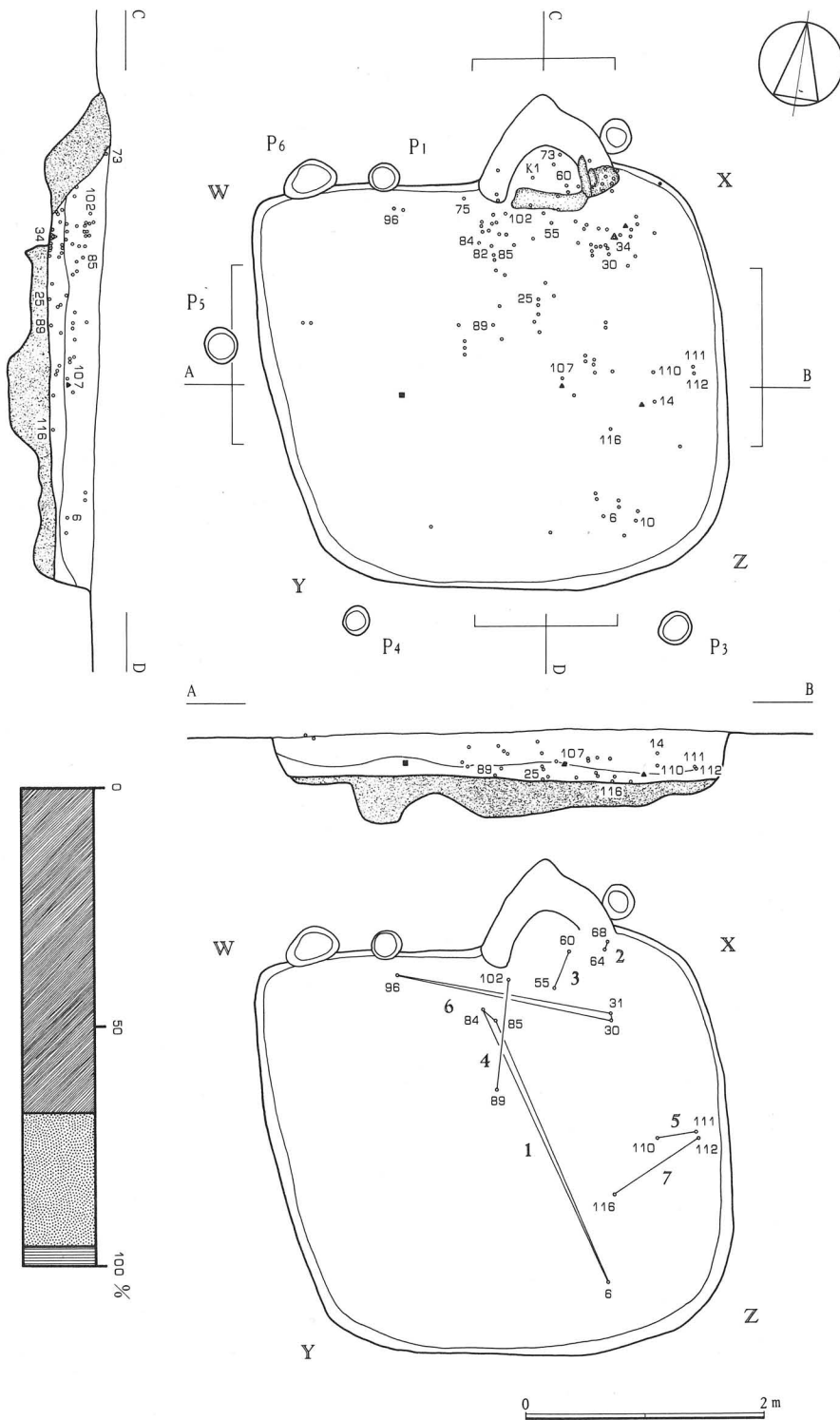
接合資料は、南北方向を指すものが4例、東西を指向するものが3例で、これらはレベル的にみても廃棄の方向と関係するらしい。おそらく北側のP₂の周辺から投棄されたものと思われる。

接合資料 土師器の甕形土器と坏形土器であって7例の資料が抽出できた。

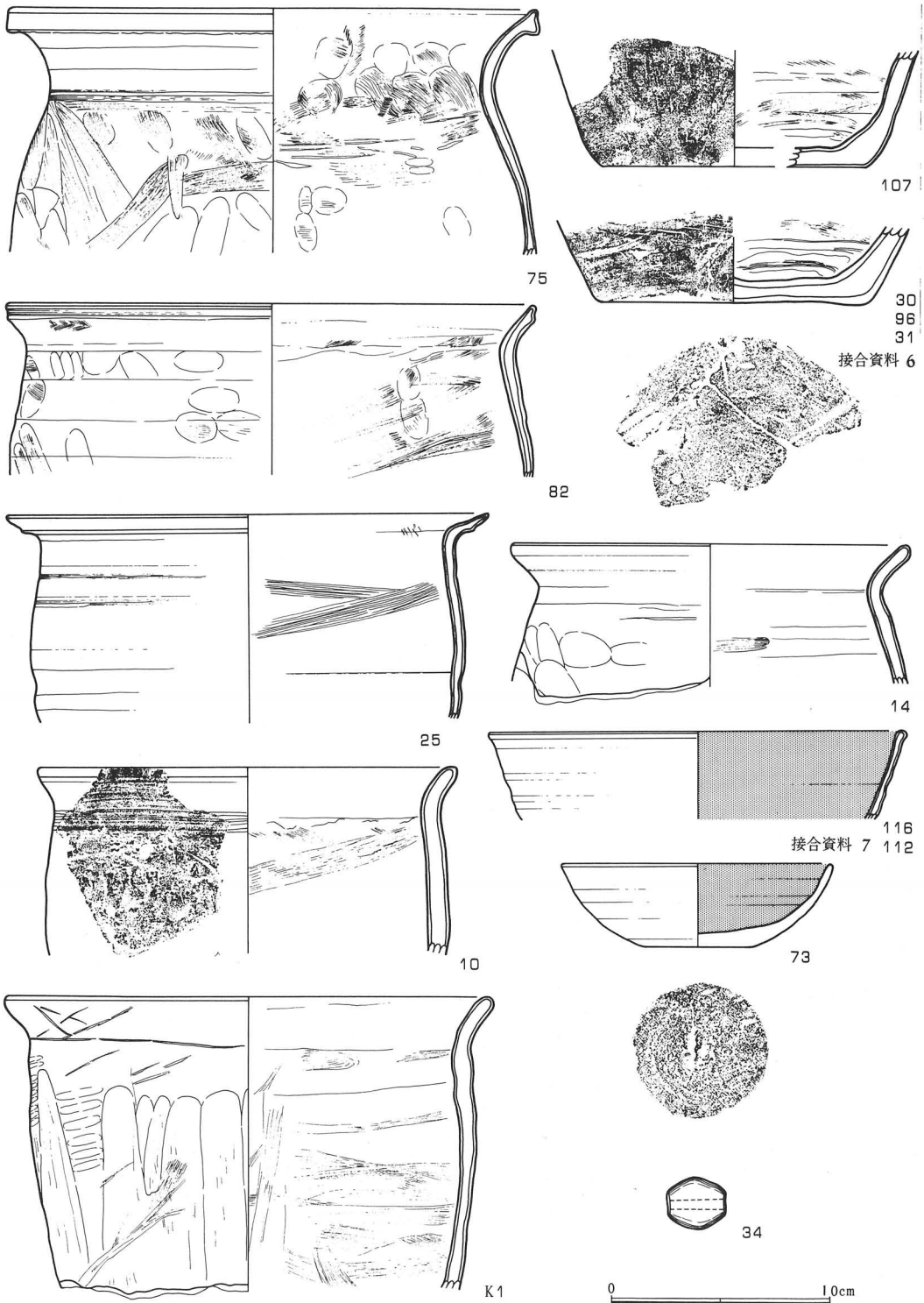
接合資料1<甕形土器> 6△0・84▽20・85△30

接合資料2< 同 >64▽25・68△30

接合資料3< 同 >55▽13・60△11



第二六図 第一〇号住居址実測図



第二七図 第一〇号住居址出土土器・土錘実測図

接合資料4〈 同 〉89△0・102△32

接合資料5〈 同 〉110△12・111△13

接合資料6〈 同 〉30△0・31△0・96△14

接合資料7〈坏形土器〉112▽10・116△14

時 期 第九号住居址とほぼ同様の年代が考えられる。

第一一号住居址(第二八・二九図)

遺存状態 良好である。

規模・形態 W-X壁間約3.7m、Y-Z壁間約3.6m、西壁のW-Y間約3.8m、東壁のX-Z間は4mに近い。やや長方形に近いプランの整った竪穴である。面積は約14㎡になる。周壁は斜めに掘り下げてあり、深さ35～40cmを測る。

床 面 おおむね平坦である。床面の下は全面的に貼床が施され、厚さは10cm前後を普通とするが、部分的に20cmを越えるところも認められる。貼床の硬度は3に比定できる。

柱 穴 本址も床面上に柱穴と思われるピットが存在しない。壁外のローム面を調査した結果、東側に3本、西側に4本のピットを検出した。いずれも直径は30～35cm、深さ40cm程度である。対角線上に位置するP₁・P₂・P₄・P₅の4本が支柱穴的役割を果たすものであろうか。

カ マ ド 北壁中央に構築され、奥壁～焚口間150cm、両袖部の灰白色粘土は若干崩れているが、幅30cm程度残存する。天井部は崩落しているものの良好なつくりのカマドであったと思う。

埋 没 土 黒色土や暗褐色土が3層に堆積する。ⅡとⅢ層は南壁方向から北側に床面の約2%を覆っている。この土砂は、おそらく南側から棄てられたものであろう。

遺物の種類・出土状態 出土遺物は土師器に甕形土器と高台付坏形土器、須恵器に甕形土器、坏形土器、高台付坏形土器、蓋形土器の破片がみられ、他に紡錘車と自然石がある。

遺物の数量は、土師器破片24個、須恵器破片11個、紡錘車1個、自然石2個、カマド内から5個の破片が出土し、合わせて43個である。ドットで記録した土器破片35個の表裏関係は、表21個(60%)、裏14個(40%)という割合になる。

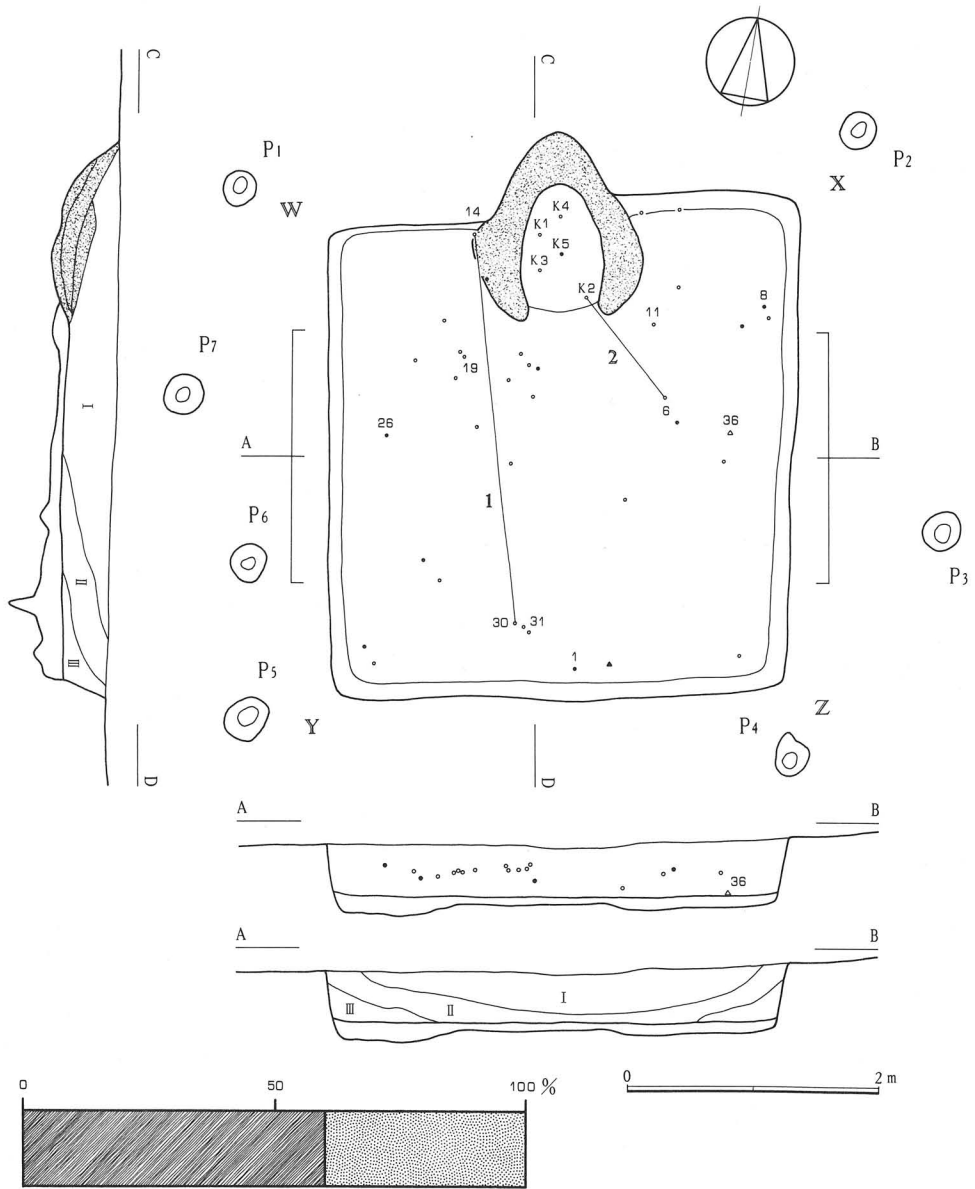
竪穴の面積(約14㎡)に比べると極めて僅かの遺物が散在し、1㎡あたり2.5個である。床直出土の遺物は稀で大部分床上20～30cmの間に存在している。竪穴廃絶時のものでなく、埋め戻す際に土砂と一緒に棄てたものと考えられる。

接合資料 土師器と須恵器に各1例存在する。

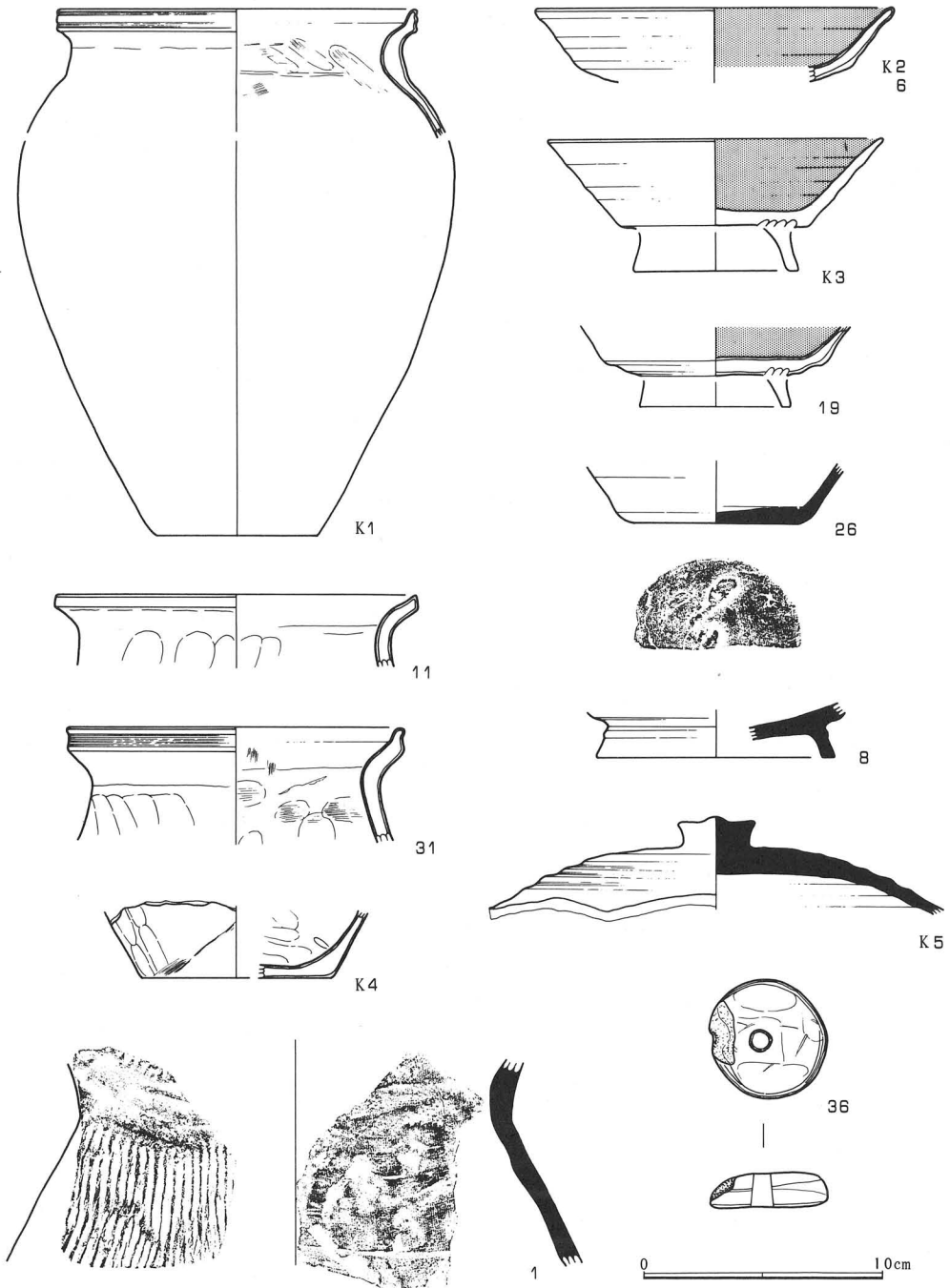
接合資料1〈土師器高台付坏形土器〉6△0・カマド

接合資料2〈須恵器甕形土器〉14▽6・30▽10

時 期 接合資料1、K₃、19などのロクロ使用の土師器高台付坏形土器には、内面黒色処理が施されており、おそらく9世紀第2四半期ころに該当する土器であろう。



第二八图 第一一号住居址实测图



第二九図 第一一号住居址出土土器・紡錘車実測図

第一二号住居址(第三〇・三一・三二図、図版第一五)

遺存状態 カマドの残存状態が悪く、プランも不明瞭であった。

規模・形態 Wコーナー付近の壁が一部崩れているが、W-X・Y-Z壁間は約3.3m、W-Y壁間約2.5m、X-Z壁間は僅かに長く約2.6mを測り、不整長方形を呈する。面積は約8.5㎡である。壁は斜めに掘り下げ、深さ約17cmを有する。この数字は、プランが不明瞭なためにローム面を若干削平しているの、実際は20cm程度であったと思われる。

床面 平坦ではあるが全体に軟らかく、硬度は2に相当する。中央付近から東、西、南壁の近くまで一面に貼床が施されている。厚さは深い部分で15cmに達する。Xコーナーには、100×70cm、深さ約40cmの不整円形のピットが存在するが、これは貯蔵穴用に掘られたものであろう。

柱穴 床面上に柱穴と思われるピットがなく、壁外の各コーナー付近に4本発見された。各ピットは直径約25cm、深さ30～40cmである。本址に付随した柱穴と考えられよう。

カマド 構築位置は北壁中央である。残存状態は悪く、両袖部の砂質粘土は、かなり崩落し僅かに15cmの幅を残すだけである。奥壁～焚口間は約80cmを有する。

埋没土 黒色土Ⅰと黒色土Ⅱに区別できる。

遺物の種類・出土状態 須恵器甕形土器の破片(4個)以外は、すべて土師器の甕形土器である。遺物総数118個のうち土師器破片106個、須恵器破片4個、自然石8個に分けられる。土器の表裏関係は、表57個(52%)、裏41個(37%)、立ち12個(11%)という割合になる。

ドット・マップを観察すると、Xコーナーの貯蔵穴上面、カマドの前面から南壁にかけての空間に多く散在し、それ以外はまばらになる。YとZのコーナー付近には全く存在しない。この状態をA-Bセクションに投影してみると、大部分のドットは床面上に散在する。ちなみに床直出土の遺物を計算すると61%になる。接合資料も床直のものが圧倒的に多数を占める。6例の資料は、カマド前面、WとYコーナー付近に集中し、東西間に接合する破片が多い。

接合資料 すべて土師器の甕形土器であって他の器種は抽出されていない。胴部破片の接合事例が多く、6例の資料が検出された。

接合資料1〈甕形土器〉21△0・41▽0・カマド内

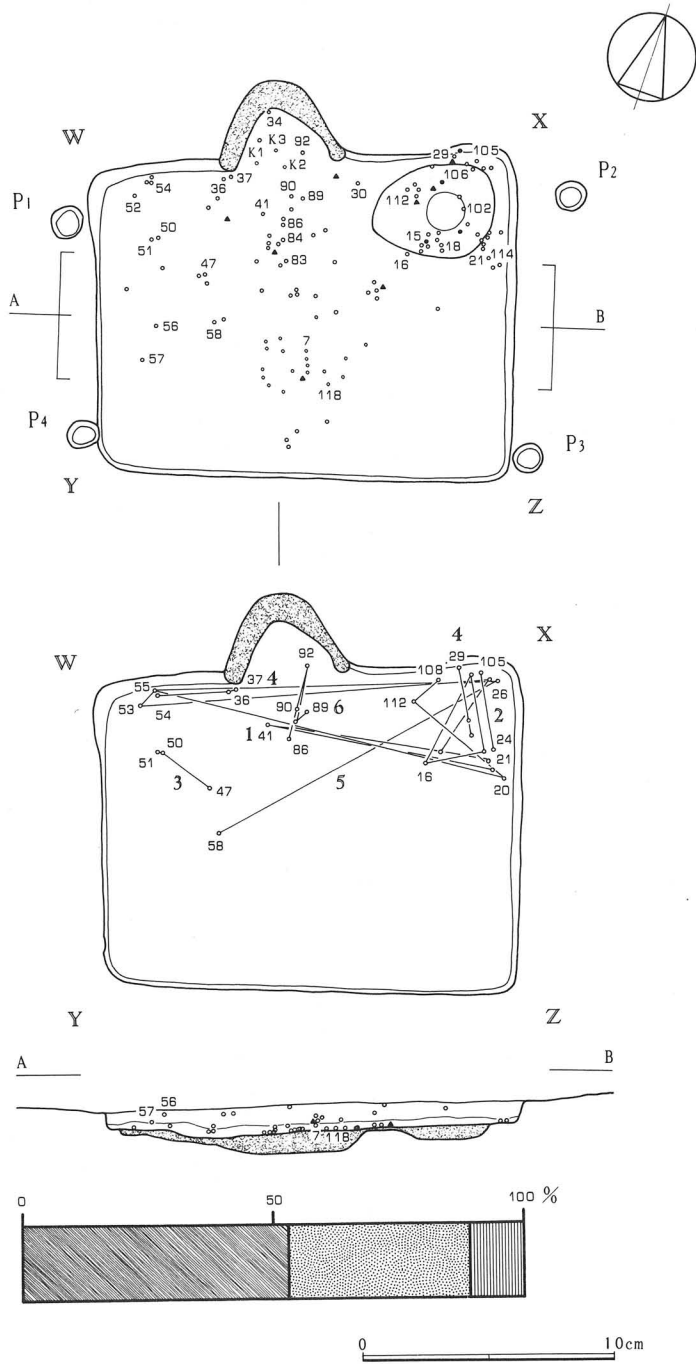
接合資料2〈同〉24△0・105▽0・カマド内・23▽0・16▽16・106△0

接合資料3〈同〉カマド内・47△5・50△3・51△3

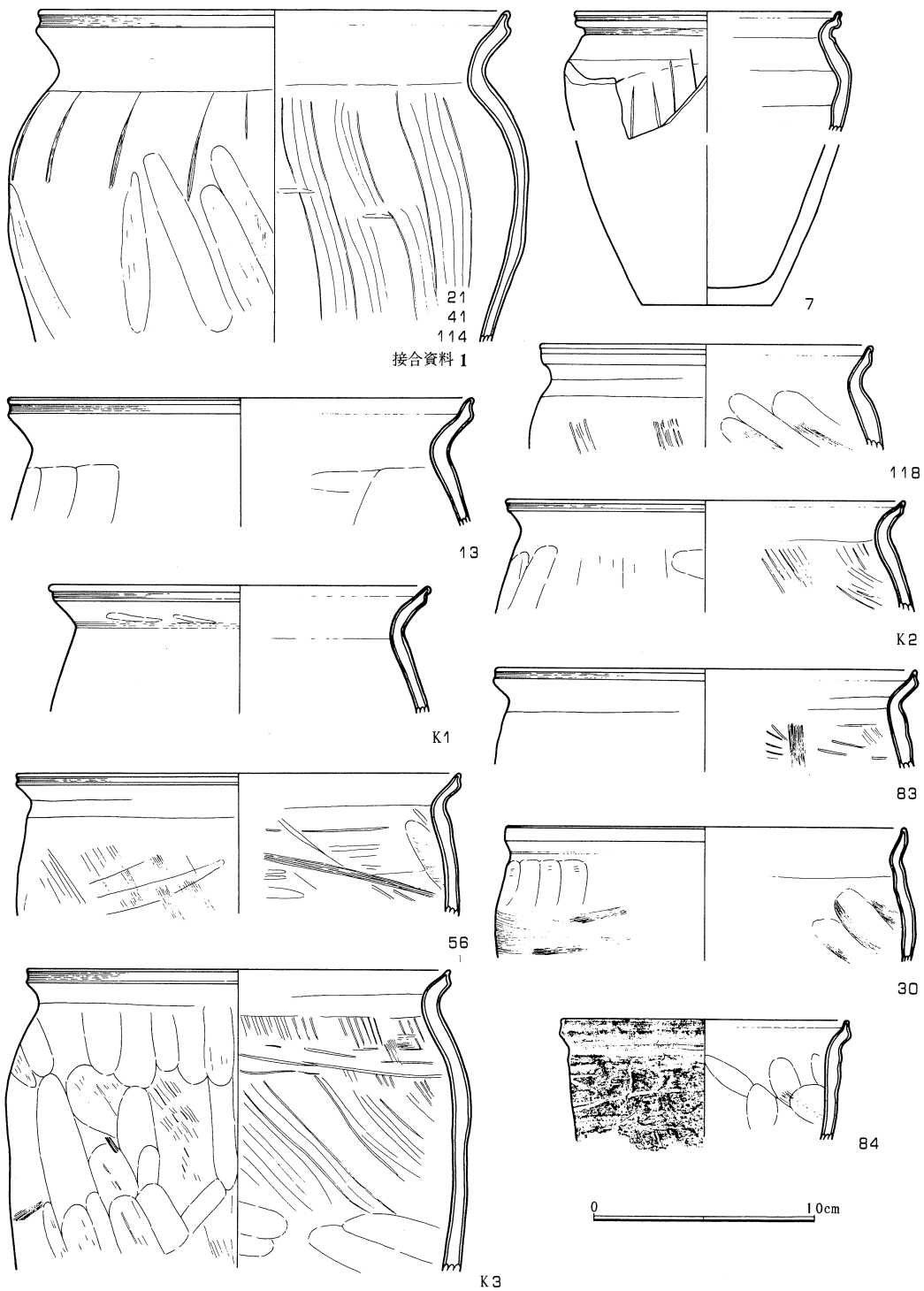
接合資料4〈同〉102▷0・29△0・101▽0・36▽0・37△0・54△3・114△0

接合資料5〈同〉98△0・27▽0・53△4・112▽0・108▽0・20▽0・55▽3・26△6・58△19

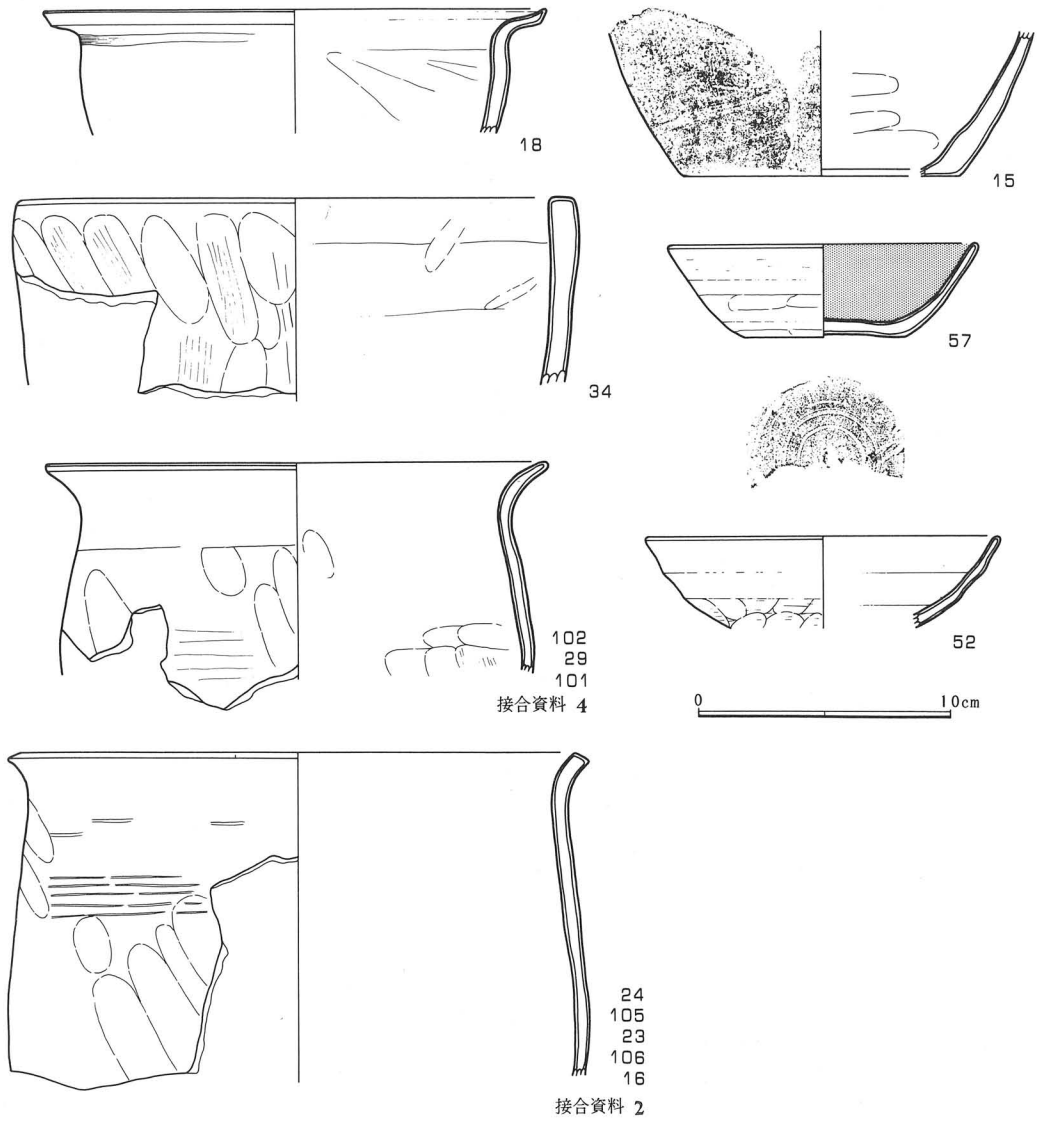
接合資料6〈同〉89△0・88▽0・92▽0・90▽0・86▽0・カマド内



第三〇図 第一二号住居址実測図



第三一図 第一二号住居址出土土器実測図(1)



第三二図 第一二号住居址出土土器実測図(2)

時 期 第一一号住居址より若干新しく、9世紀第3～4四半期と思われる。

第一三号住居址(第三三・三四図、図版第一五)

遺存状態 ほぼ良好である。

規模・形態 北壁(W-X)と南壁(Y-Z)間は約3.4m、西壁(W-Y)と東壁(X-Z)間は幾分短く約3.3mを測り、不整形なプランであるが方形といってよい。面積は約11㎡である。周壁は、ほとんど垂直に近く掘り下げ、深さ約25～30cmを有する。ルーム面が南北に傾斜しているために、南壁の深さが若干浅くなる。

床 面 おおむね平坦であって、硬度は全体に3に比定できる。厚さ5～20cmの貼床が前面に認められる。周壁の直下には溝が存在しない。

柱 穴 ピットは床面上に発見されないで、東壁と西壁に接して5本検出し、各ピットは深さ約40cmである。他に柱穴と考えられるピットが確認できないので、P₁～P₄を本址に伴う柱穴と見做してもよいだろう。

カ マ ド 北壁の中央より東側に片寄っている。天井部は崩落しているが、灰白色砂質粘土を使用して構築した両袖部は、比較的良好な状態で残っている。奥壁～焚口間は約120cmを測る。

埋 没 土 ロームの廃棄土Ⅲ、黒褐色土Ⅱ、黒色土Ⅰの順で堆積し、層序の区分は明瞭である。

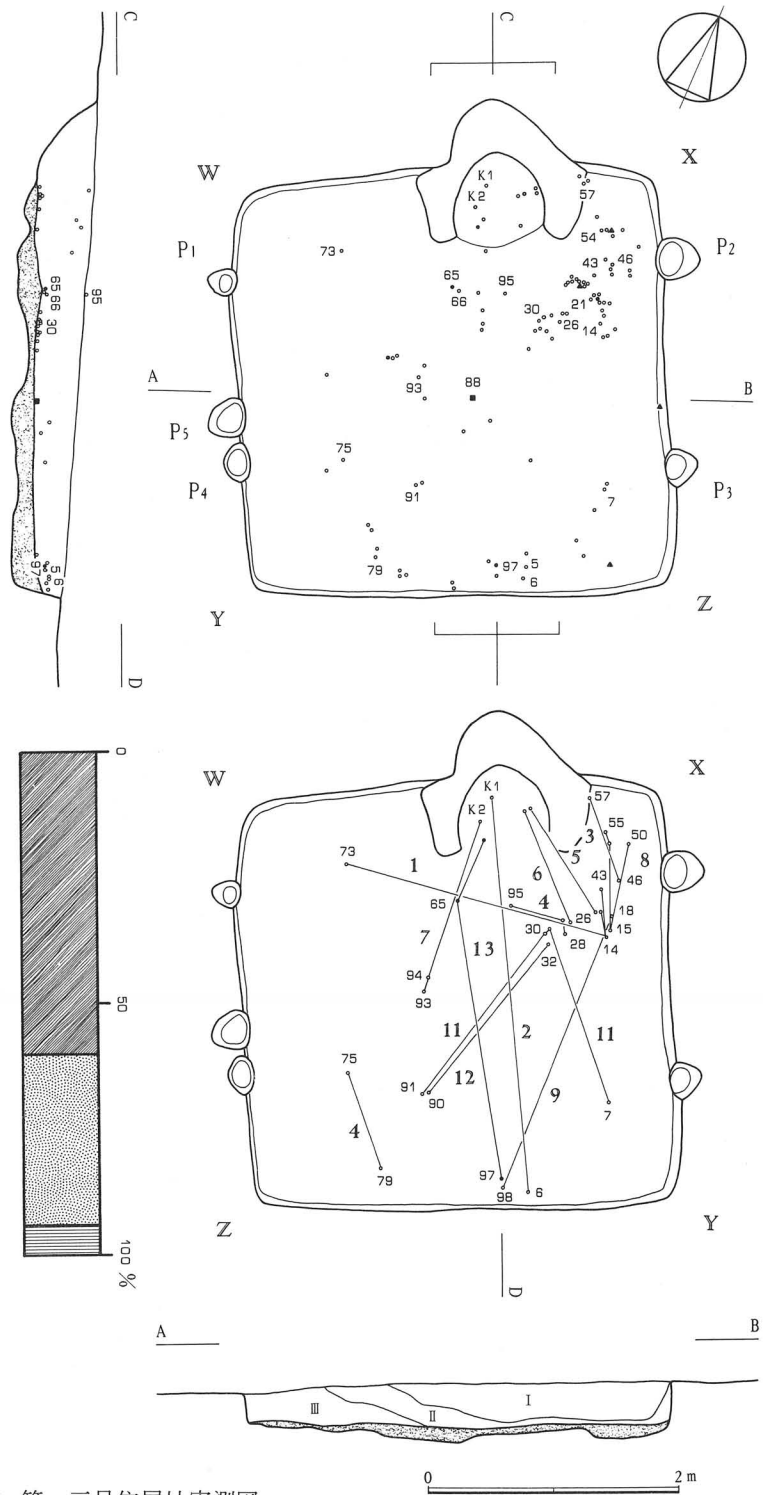
遺物の種類・出土状態 確認できる器種は、土師器甕形土器、坏形土器、須恵器甕形土器、坏形土器、蓋形土器などである。内訳は、土師器破片60個、須恵器破片5個、布目瓦破片1個、自然石4個の合計105個となる。土器破片の表裏関係は、表60個(60%)、裏34個(34%)、立ち6個(6%)の比率を示す。

遺物の平面分布は、西壁に沿った床面上に皆無で、中央付近からカマド・Xコーナーにかけての空間にまとまって散在する。大部分の遺物は、床直または中間付近に認められ、確認面近くに存在するものは少ない。C-Dセクションに投影したドットの散在状態から容易に理解できよう。

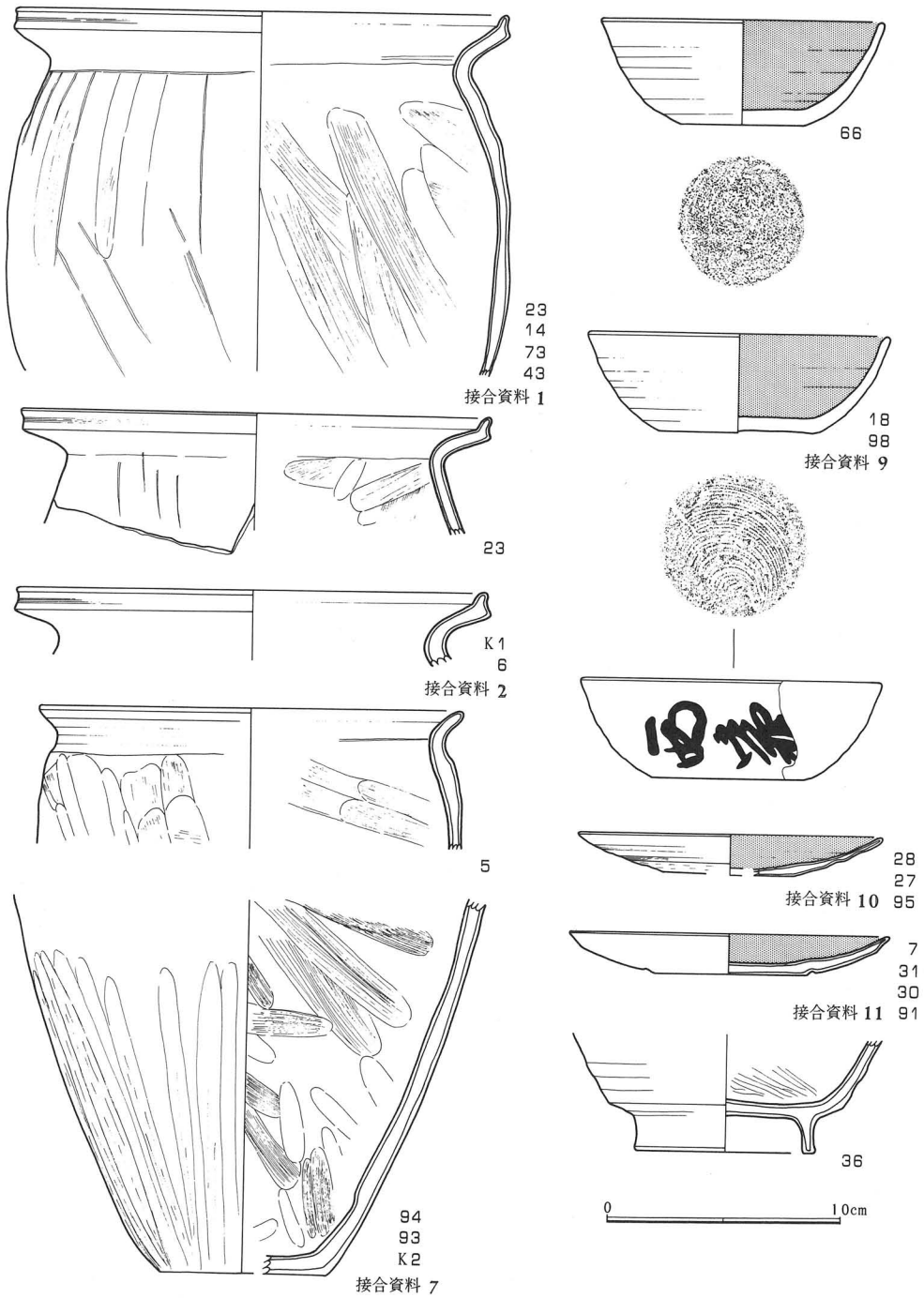
接合資料の抽出例も多く、資料1と4を除いて大部分カマドまたはその近くから、南北方向に接合する資料が目立つ。この接合線の走行状態は、カマド付近から住居址に遺物を投棄した好例である。

接合資料 土師器甕形土器8例、同坏形土器4例、須恵器甕形土器1例の合わせて13例が抽出できた。その状態は接合関係図に示したようになる。

時 期 9世紀の終末から10世紀にかけての年代が考えられる。



第三三図 第一三号住居址実測図



第三四图 第一三号住居址出土土器実测图

第一四号住居址(第三五・三六・三七図、図版第一六)

遺存状態 良好な住居址である。

規模・形態 主軸方向は第一三号住居址とほぼ同様である。大きさは、北壁(W-X)が4.2m、南壁(Y-Z)が僅かに短く4.1m、西壁(W-Y)が4.1m、東壁(X-Z)も同じ長さで、ほぼ方形プランの住居址である。面積は約17㎡になる。周壁は若干斜めに掘り下げ、確認面から30~40cmの深さを測る。壁面は崩落していない。

床面 平坦であり硬度3の硬さを有する。周溝および貼床の痕跡は認められない。Wコーナーの近くに直径約90cm、深さ28cmの円形ピットが掘られているが、これは本址に付随した貯蔵穴であろうと考えられる。これに反し床面中央に存在する円形ピット(直径約100cm、深さ53cm)は、C-Dセクションからも窺われるように、上面が床面同様に踏み固められており本址構築以前の土壌であることは間違いないが、内部から決め手になる遺物は出土しなかった。

柱穴 床面上に柱穴と思われるピットが発見できず、壁外のローム面を精査して辛うじて5本のピットを確認した。西壁に接して3本、東壁に接して2本掘られているが、直径はいずれも20cm程度で深さが30~40cmである。本址に付随するピットはこの5本だけで他に存在しない。

カマド 北壁の中央に付設され、天井部は崩落しているけれども、良好な残存状態を保っていた。左右の両袖部に灰白色の砂質粘土を芯として構築している。袖部の幅は約40cm、奥壁~焚口間約150cm、燃焼部幅45cmを有する。内部には焼土、赤褐色土、砂質粘土などが充満し、若干の土器破片も出土している。

埋没土 2層に区別できて、ローム粒子を多く含んだ黒褐色土II、黒色土Iの順で堆積し、層序区分線からは自然流入の土砂という説明が困難である。

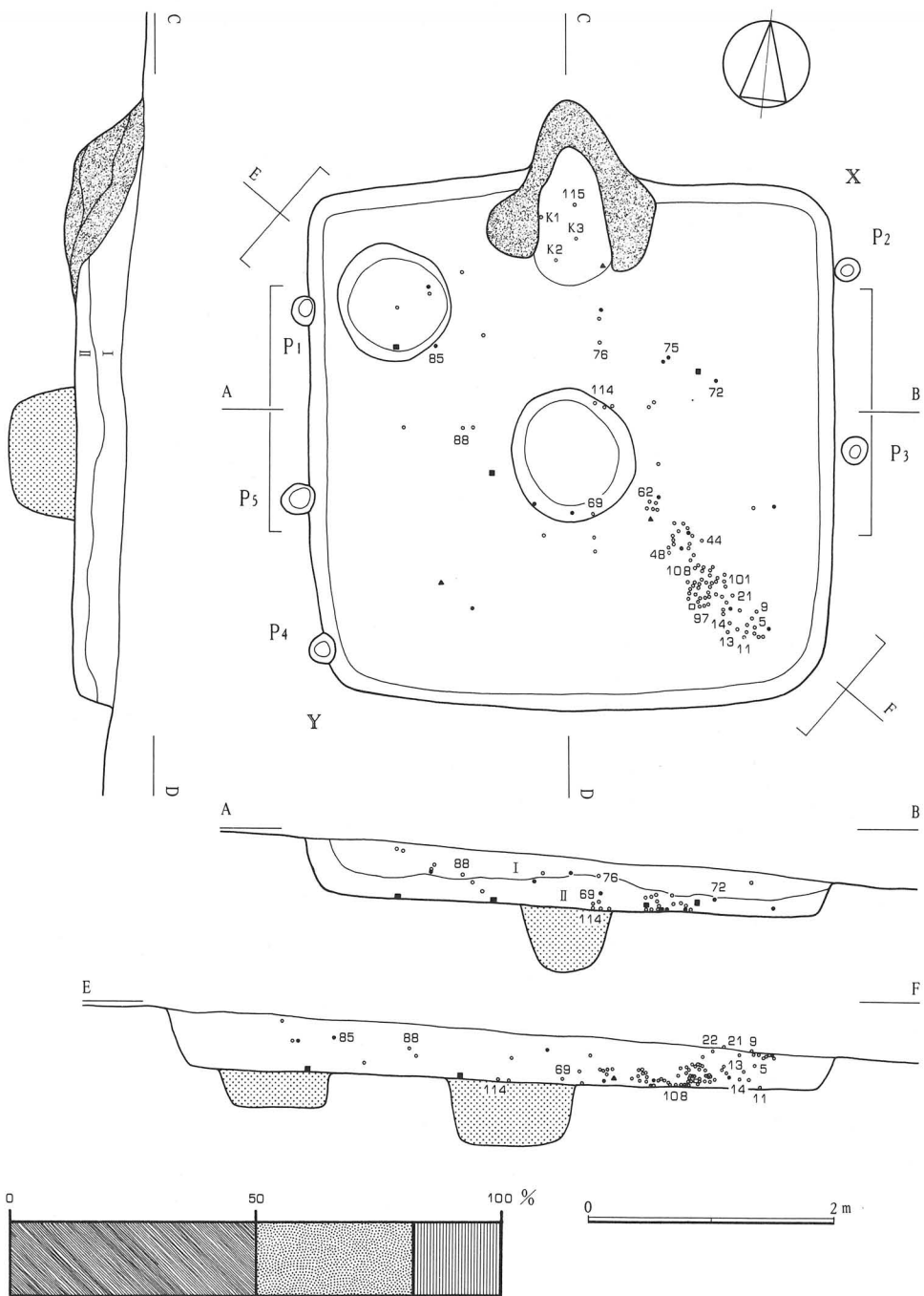
遺物の種類・出土状態 土師器では甕形土器、坏形土器、須恵器では甕形土器、坏形土器、高台付坏形土器、蓋形土器、長頸壺形土器などの器種で破片が多い。遺物の数量は、土師器破片93個、須恵器破片18個、布目瓦破片3個、鉄滓1個、自然石3個である。土器破片108個の表裏関係は、表53個(49%)、裏34個(32%)、立ち21個(19%)という比率になる。

ドットで記録した平面分布の状態は、W-Zコーナーを結ぶ線の両側に散在しているが、特にZコーナー寄りに長さ1.5m、幅30~40cmの範囲に密集する。この状態を断面図に投影してみると、E-Fセクションに示すようなありかたとなる。これは土器破片を壁外から投棄した状態を物語る好例である。接合資料もすべてW-Z方向で接合できる。

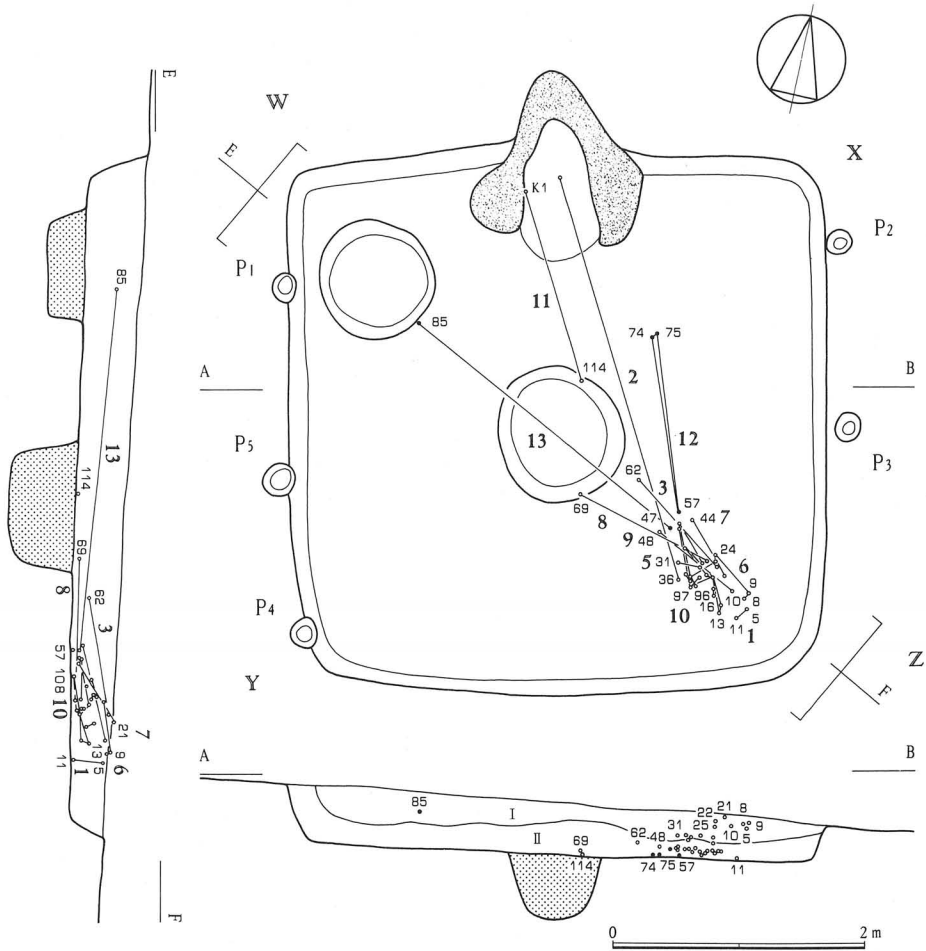
接合資料 土師器に11例(1~11)、須恵器に2例(12・13)の合わせて13例が抽出された。

接合資料1< 甕形土器 >17△17・16△12・11▷0・5△25

接合資料2< 同 >36△8・カマド

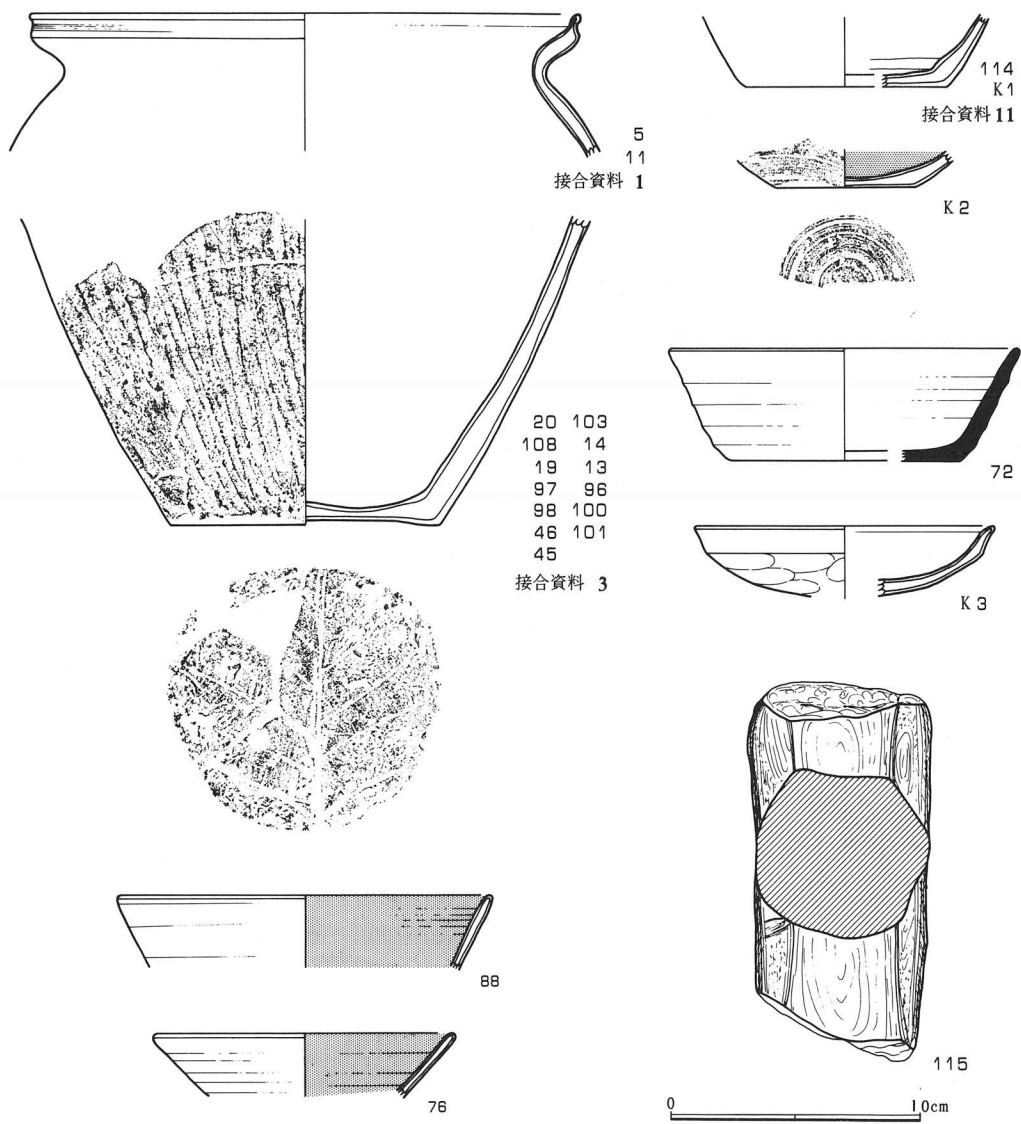


第三五图 第一四号住居址実测图



第三六図 第一四号住居址接合関係図

- 接合資料 3 < 同 > 22△29 · 62△11
 接合資料 4 < 甕形土器 > 34△17 · 35▽15
 接合資料 5 < 同 > 34△18 · 31△15
 接合資料 6 < 同 > 24△25 · 9△29 · 8 △28
 接合資料 7 < 甕形土器 > 44▽4 · 21△33 ·
 接合資料 8 < 同 > 102▽5 · 69▷3
 接合資料 9 < 同 > 10▽27 · 48△7
 接合資料 10 < 同 > 20▽4 · 108△6 · 19▽6 · 13▽6 · 14△7 · 101▽5 · 100▽6 ·
 96▽8 · 45△5 · 46▽6 · 97▷13 · 98▽5 · 103▽2
 接合資料 11 < 同 > 114▽0 · カマド



第三七图 第一四号住居址出土土器・支柱実測图

接合資料12<長頸壺形土器>57▷0・75▷0・74△0 } 同一固体?
 接合資料13< 同 >47△5・85△29 }

時 期 出土土器の中には、須恵器の長頸壺形土器破片も存在するので、9世紀第3～4四半期ごろに比定できよう。

第一五号住居址(第三八・三九図、図版第一六)

規模・形態 北壁(W-X)間約4.0m、南壁(Y-Z)間約3.8m、西壁(W-Y)間約3.0m、東壁(X-Z)間約3.1mを測り、面積は約12㎡である。プランは、東西に長い長方形を呈する。周壁は斜めに掘り下げ、深さは確認面から20cm前後を測る。

床 面 硬度は2～3に相当し平坦である。壁の直下には周溝が掘られていない。なお床面の下には厚さ7～15cmの貼床が認められる。

柱 穴 各コーナーの対角線上には柱穴としてのピットは存在しない。壁の内側で確認できたピットは、西壁中央に接した床面、カマドの西側、東壁中央の壁外、南壁中央に接した床面に4本である。柱穴とするには変則的な配置である。各ピットは直径約25cm、深さ40～50cmを測る。

カ マ ド 北壁中央より僅かに東に片寄った位置にあり、奥壁～焚口間約110cm、左袖部幅40cm、右袖部30cm、焚口幅40cm、燃焼部幅約50cmの大きさを有する。天井部は崩落している。

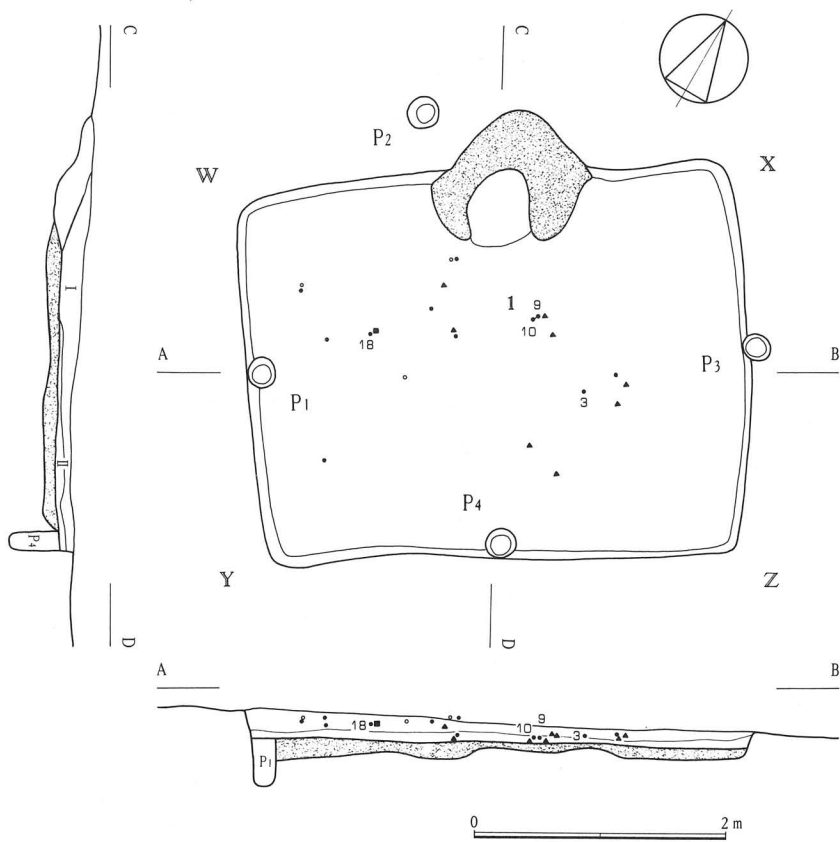
埋 没 土 床面上にローム粒子を多く混入した黒褐色土Ⅱがほぼ全面に存在し、その上に黒色土Ⅰが堆積する。

遺物の種類・出土状態 総数23個の遺物が出土し、土師器では甕形土器、須恵器では甕形土器、高台付坏形土器、蓋形土器などの器種が認められる。遺物の内訳は、土師器破片3個、須恵器破片11個、布目瓦破片1個、自然石8個である。

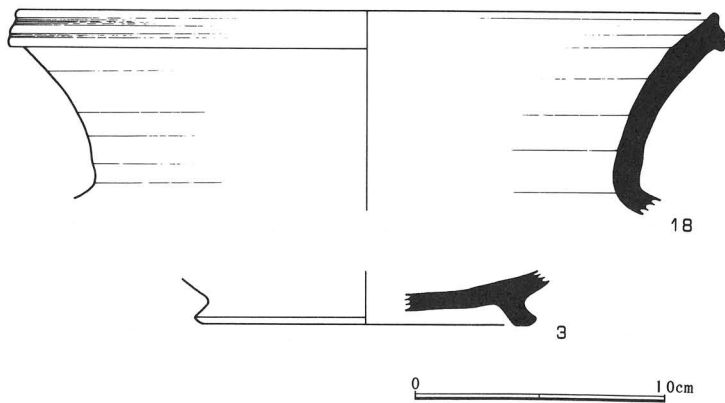
遺物の散在状態は、ドット・マップに示したようなありかたで、レベル的には埋没土の上半に多い。接合資料は須恵器に1例発見された。

接合資料1<甕形土器>9▽4・10▽4

時 期 9世紀の終末ころに廃絶した住居址であろう。



第三八图 第一五号住居址实测图



第三九图 第一五号住居址出土土器实测图

第一六号住居址(第四〇・四一図)

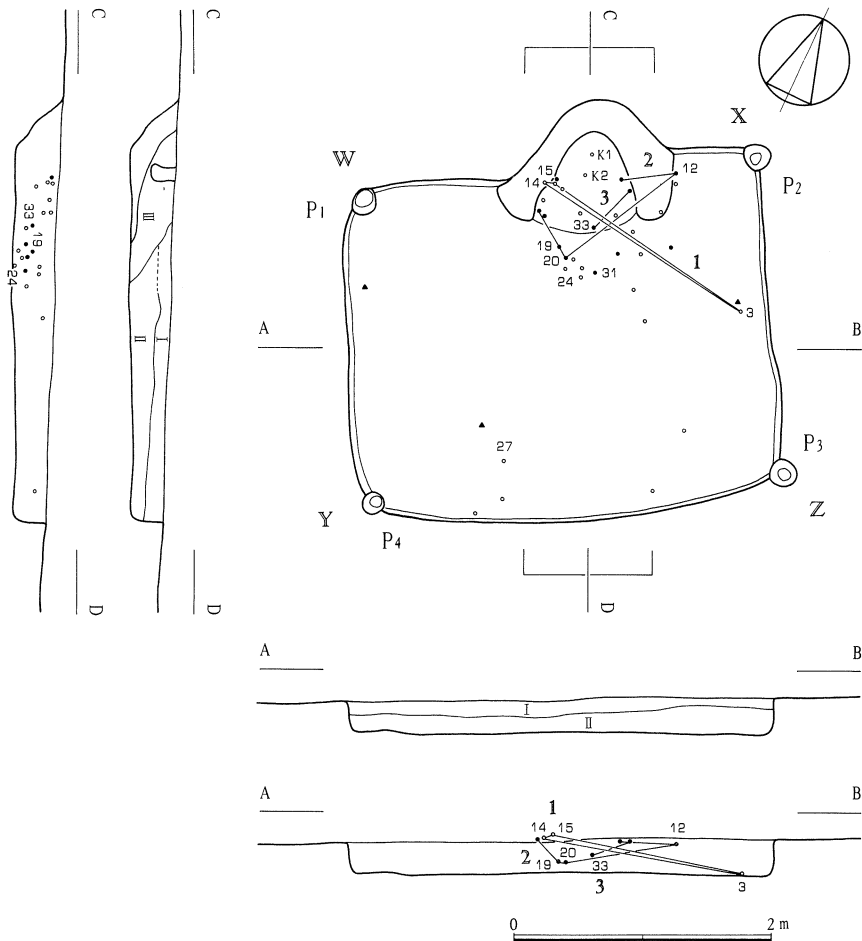
規模・形態 北壁(W-X)間約3.2m、南壁(Y-Z)間約3.3m、東西壁の両壁間は約2.6mの大きさで、面積は約9㎡である。長方形の住居址であるがプランは整っていない。周壁はおおむね垂直に掘り下げ、深さ25~30cmを測る。

床 面 硬度3に相当する床面で平坦に踏み固められている。周溝と貼床は認められない。

柱 穴 床面上に発見できず、各コーナーに直径約20cm、深さ35~45cmのピットが存在する。4本のピットは位置関係から本址の主柱穴と見做される。

カ マ ド 北壁中央より僅かに東に片寄った位置にある。奥壁~焚口間約110cm、両袖部幅約130cmの大きさである。両袖部に灰白色粘土を使った構築法は他のカマドと変りない。

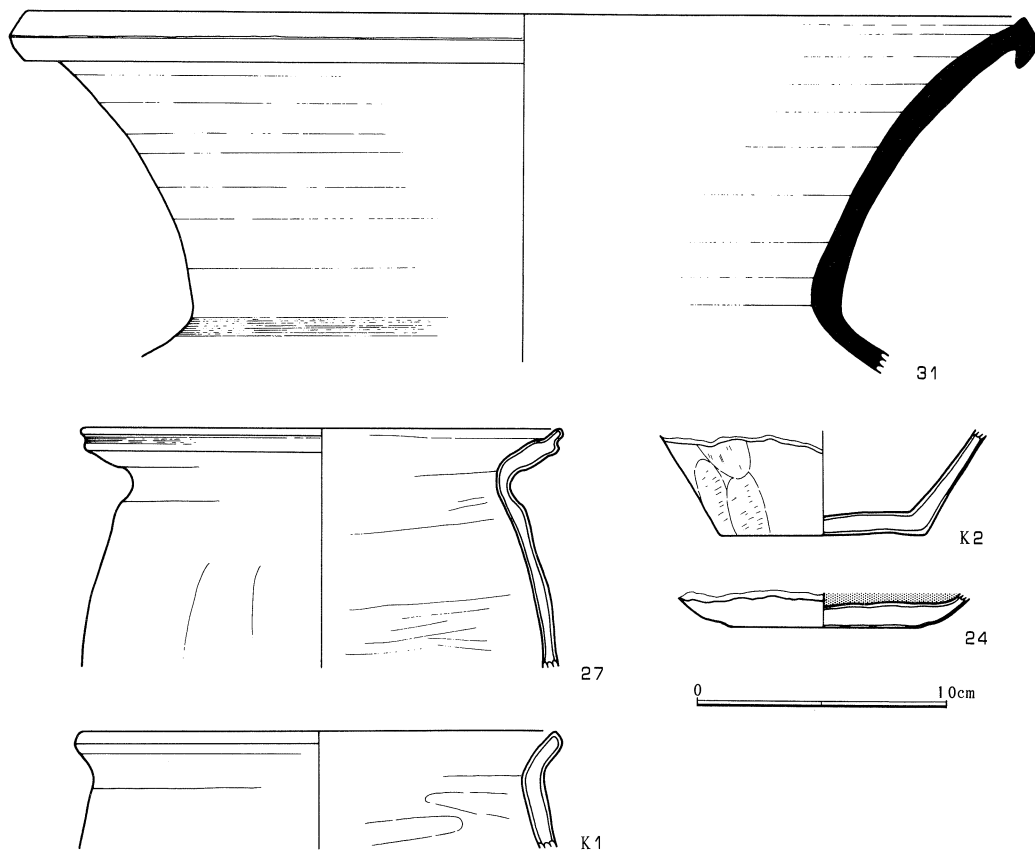
埋 没 土 黒色土I、黒褐色土IIの堆積状態は、第一五号住居址の層相と類似する。



第四〇図 第一六号住居址実測図

遺物の種類・出土状態 確認できた器種は、土師器甕形土器、坏形土器、須恵器甕形土器である。遺物は、カマド内から前面にややまとまって散在し、南壁寄りにも数片みられる。このありかたは垂直分布を検討するまでもなく、カマド側から遺物を投棄した結果の事象である。

時 期 本址の廃絶も第一五号住居址と同様に考えられる。



第四一図 第一六号住居址出土土器実測図

第一七号住居址(第四二・四三図)

規模・形態 北壁(W-X)間約3.1m、南壁(Y-Z)間約2.9m、西壁(W-Y)と東壁(X-Z)間約2.7mを測り、長方形の住居址である。面積は9㎡に満たない。周壁は幾分斜めに掘り下げ、深さは50~55cmを測る。壁面は崩落することなく良好な状態で残っている。

床面 硬度3に相当し平坦である。周溝と貼床は存在しない。

柱穴 床面に柱穴が検出できないので、壁外を精査したところ西壁に3本、東壁に2本のピットが発見された。P₁~P₄がほぼ対称的な位置にある。いずれも30~40cmの深さを有するので、本址の柱穴と考えてよいと思う。

カマド 北壁の中央に位置し、壁外に大きく張り出して構築され、奥壁~焚口間120cm、両袖幅100cmを有する。底面は僅かに掘りくぼめ、奥壁に向かってカーブしながら立ち上がる。

埋没土 ロームを混入した黒褐色土Ⅱの上に黒色土Ⅰが堆積する。C-Dセクションの区分線から土砂廃棄の状態が窺われる。

遺物の種類・出土状態 土師器では甕形土器、坏形土器、高台付坏形土器、須恵器では蓋形土器などの器種が確認でき、最も破片が多いのは土師器甕形土器である。総数102個の内訳は、土師器破片94個、須恵器破片3個、布目瓦破片1個、自然石4個に分れる。土器破片(97個)の表裏関係は、表49個(51%)、裏33個(34%)、立ち15個(15%)になる。

平面分布図からみた出土状態は、Yコーナーの東側からカマド右袖部にかけて帯状にまとまって散在し、仔細に観察すれば中央より南側のグループと北側のグループに分離できる。さらにこの事象を断面に投影すると、E-Fセクションのようなありかたを示し、Yコーナー付近から分割的に投棄した状態を理解することができよう。接合資料の接合方向もおおむね投棄の方向と一致する。これと似たような遺物廃棄のケースは第一四号住居址でも認められた。

接合資料 すべて土師器だけにみられ、甕形土器11例、坏形土器1例、高台付坏形土器1例の13例である。このうち甕形土器の胴部破片が多く接合する。

接合資料1< 甕形土器 >1△3・18△24・83△32

接合資料2< 同 >95▷10・96▷15

接合資料3< 同 >38▽23・24△40・10▷46

接合資料4< 同 >27△33・23▽26

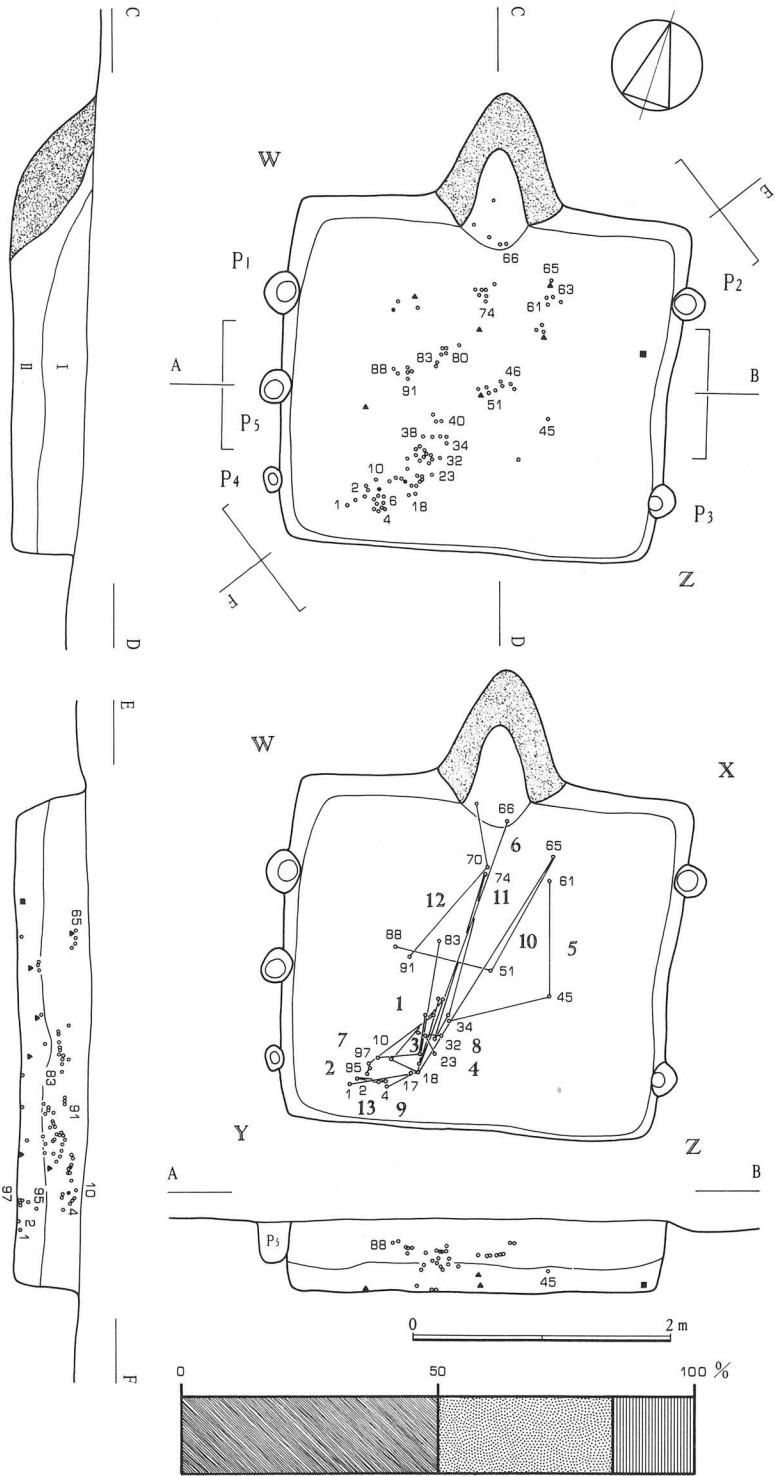
接合資料5< 同 >34▽26・45▽18・61△45

接合資料6< 同 >39▽22・19△30・66▽45

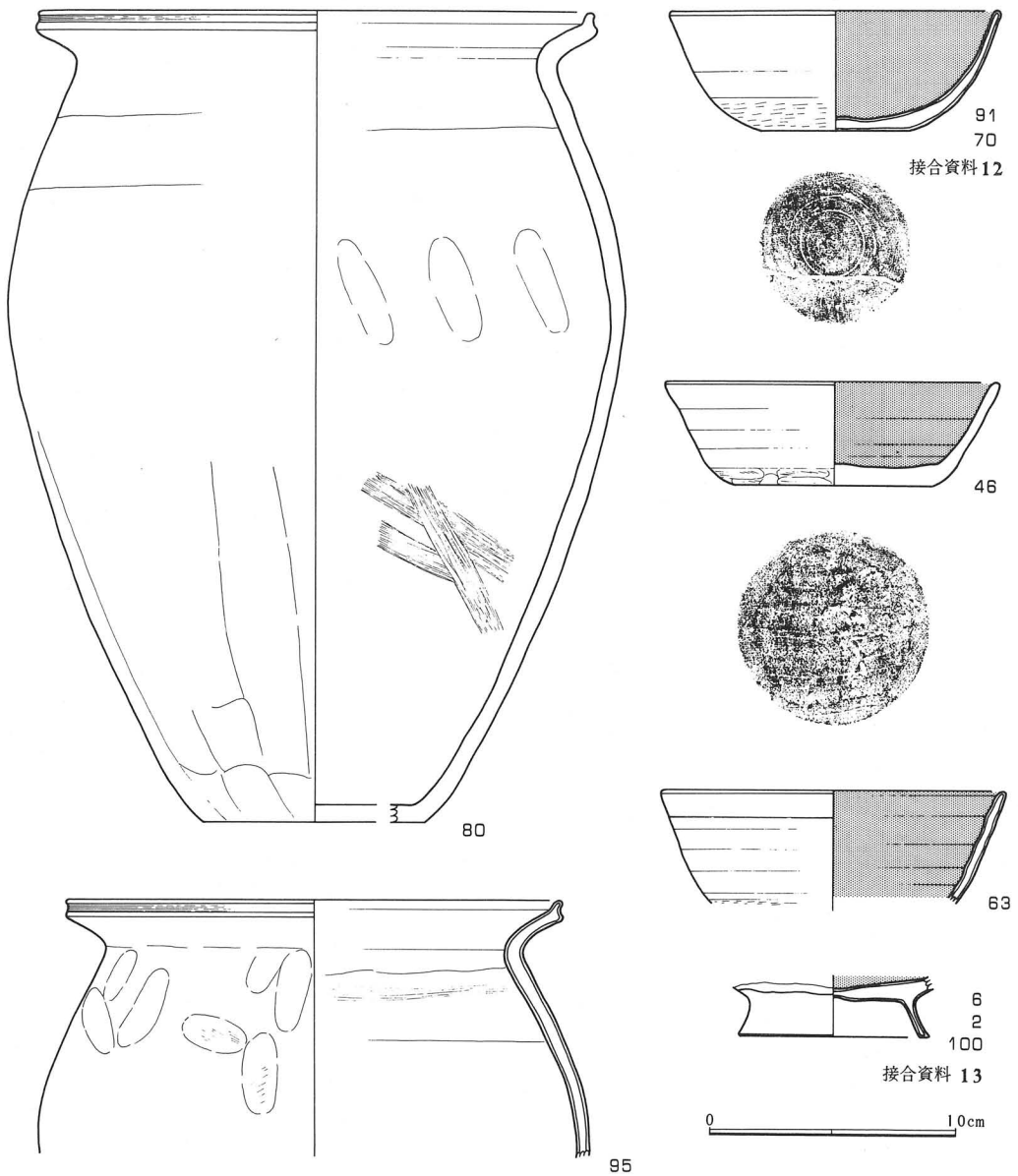
接合資料7< 同 >37▽25・97△0

接合資料8< 同 >41△20・32△27

接合資料9< 同 >4△43・17▽42



第四二图 第一七号住居址实测图



第四三図 第一七号住居址出土土器実測図

接合資料10< 甕形土器 >40▽18・11△43・31▽31・65▽45・51▽30・88▽39

接合資料11< 同 >35△22・28△30・74△31

接合資料12< 坏形土器 >91△35・70▽52・カマド

接合資料13<高台付坏形土器>6▽45・100▽2・2▽2

時 期 出土土器の特徴から大略9世紀第3～4四半期と考えられる。

第一八号住居址(第四四・四五・四六・四七・四八図、図版第一七・一八)

遺存状態 住居址の中央より僅かに南側を幅15cm、深さ20cmの細い溝がほぼ東西方向に走り、この部分にだけ攪乱が認められる。

規模・形態 本址は大形の部類に属する竪穴で、北壁(W-X)間約6.0m、南壁(Y-Z)間約6.2m、東西の両壁(X-Z・W-Y)間5.9~6.0mを測る。方形の住居址であって、面積は36㎡である。壁はほとんど垂直であり、深さは南壁中央が20cm、東壁中央から南側が25cm、その他は30~35cmを有する。

床面 多少の凹凸があるけれどもほぼ平坦であって支柱間の内側(内区)は硬度4、支柱と壁の間(外区)は硬度3に近い。周溝は存在しない。また断面図から窺われるように部分的に貼床が施され、厚いところでは40~45cmにも達する。

柱穴 各コーナーの対角線上にP₁~P₄の4本、P₃とP₄の間にP₅、P₄の南側と壁の中間にP₅の6本のピットが存在する。前者のピットは位置関係、深さ(90~100cm)から考えて支柱穴の役割を果たす。P₅・P₆は深さ40~48cmである。支柱穴については土層の埋没状態を観察するために半截発掘を実施した。

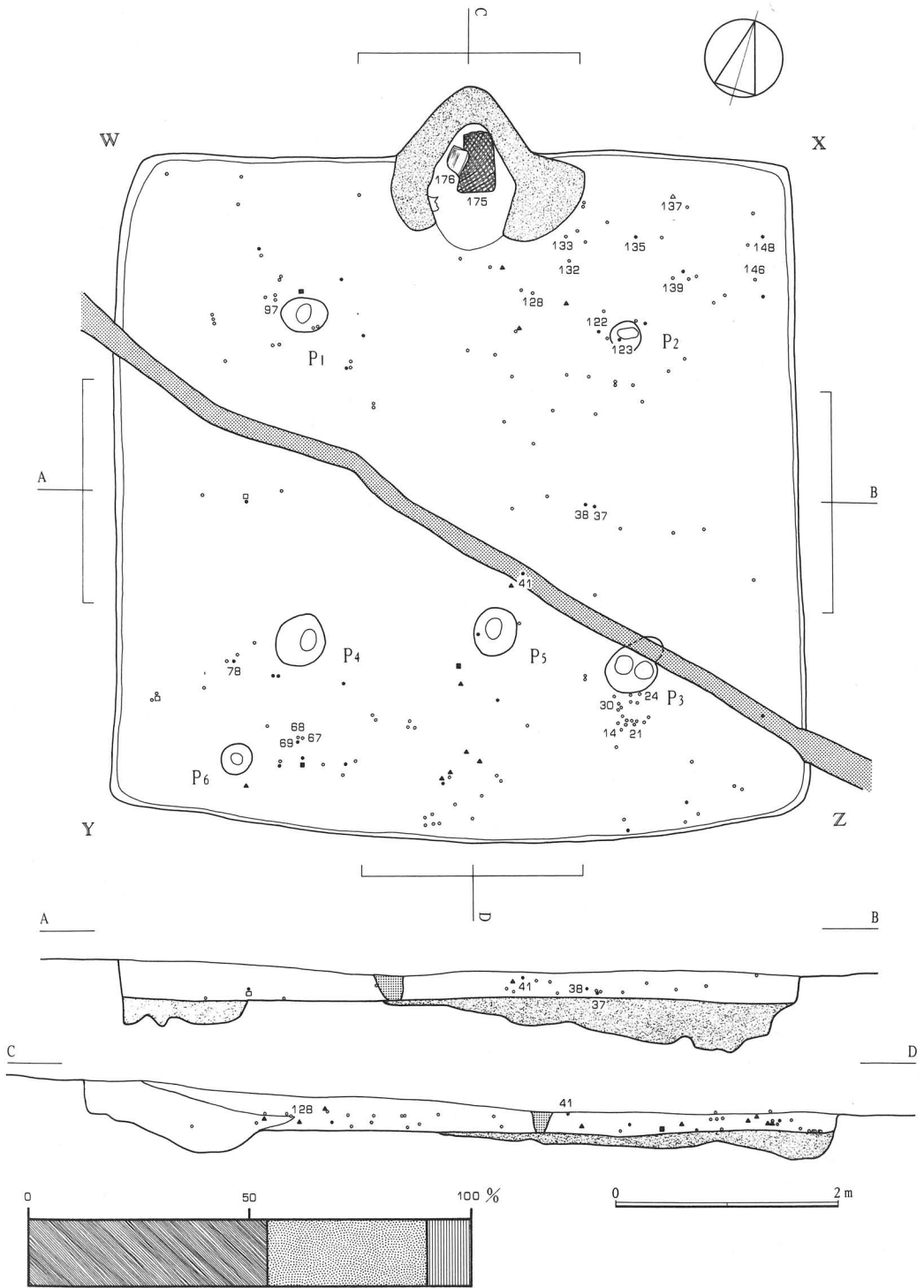
カマド 北壁中央に位置する。両袖部は床面上に灰白色砂質粘土を使用して構築している。左袖部の粘土は若干崩落流出し、30cmの幅が残っている。右袖部はほぼ原形に近いかも知れない。奥壁~焚口間150cm、焚口幅約50cm、燃焼部はそれより若干ひろくなる。土層の断面は、A-B、C-Dセクションに図示したとおりである。なお内部の天井部が崩落した灰白色粘土層中から布目瓦が出土している。

埋没土 床面下には、全面ではないが貼床が存在し、その上にロームと黒色土が混合した黒褐色土II、黒色土Iが堆積する。人為の廃棄土砂であることはいうまでもない。

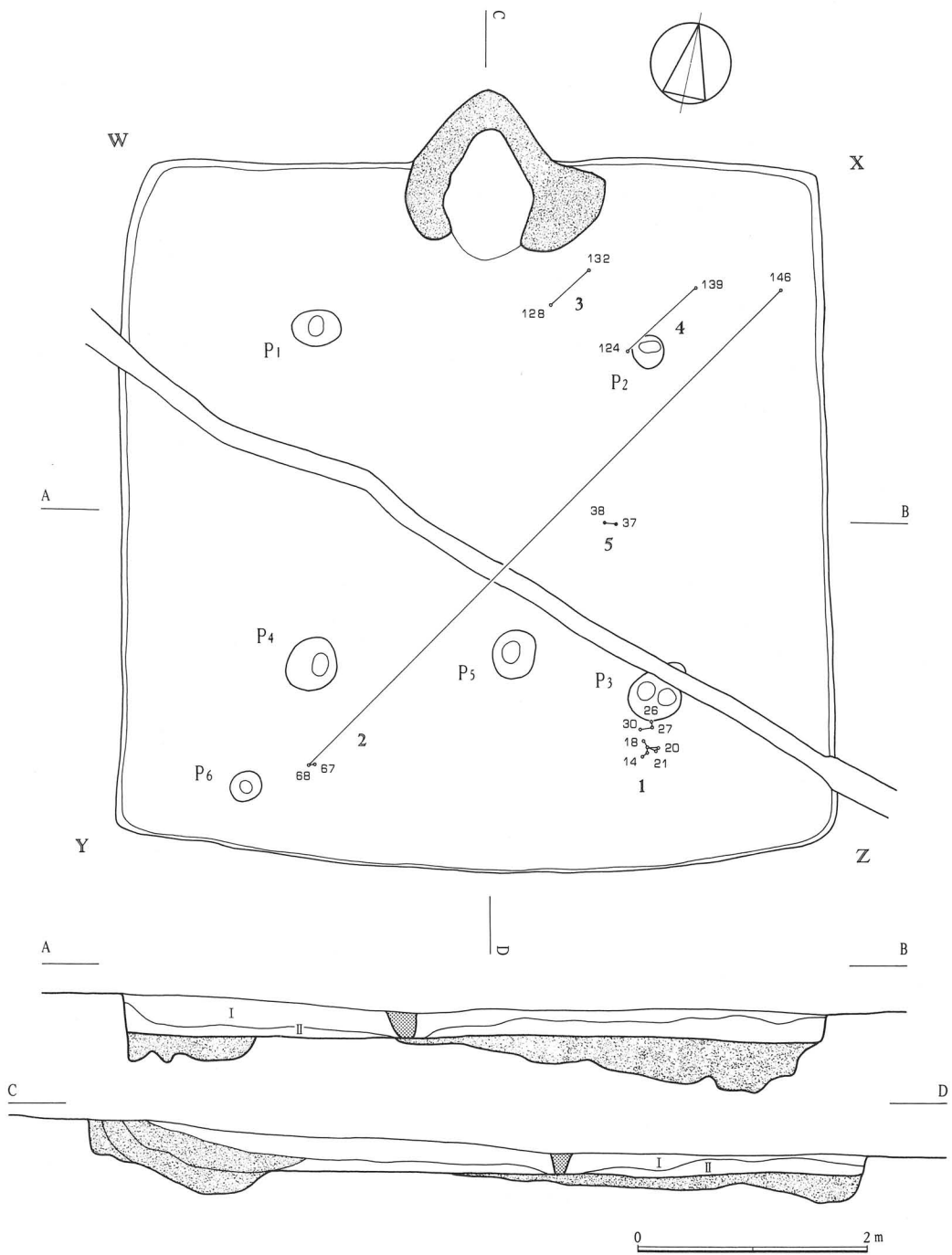
遺物の種類・出土状態 器種として土師器では甕形土器、須恵器では甕形土器、坏形土器、蓋形土器、コシキ形土器などが確認されている。遺物176個の内訳は、土師器破片131個、須恵器28個、紡錘車1個、布目瓦5個、自然石9個である。土器破片159個の表裏関係は、表85個(54%)、裏59個(37%)、立ち15個(9%)という比率で、投棄実験例と近似した数字である。

ドット・マップ上で観察すると、しいて区別すれば①P₁の付近、②右袖部からP₂の周辺、③P₃の南側、④P₄~P₅から南壁の間に散在またはかたまつて認められる。垂直分布は、床面から中間付近に多く存在し、上層~確認面の遺物は僅少である。

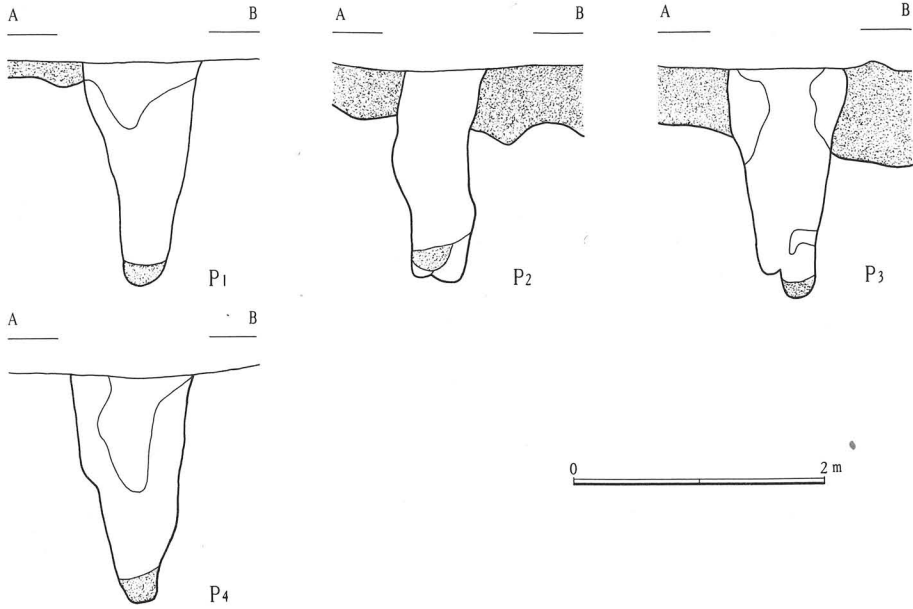
遺物の中に3個の環状鈕があって、②グループ内に2個(123、165)、③グループ内に1個(5)出土し、これに接合すると思われる蓋の破片が④グループ内から数例(65、71、69、75)発見されている。また、下記の5例の接合資料のうち、土師器甕形土器の資料1、須恵器甕形土器の資料5を除くと、3例すべてがほぼ南北方向に接合し、就中資料2は②と④のグループ間で5.8mの間



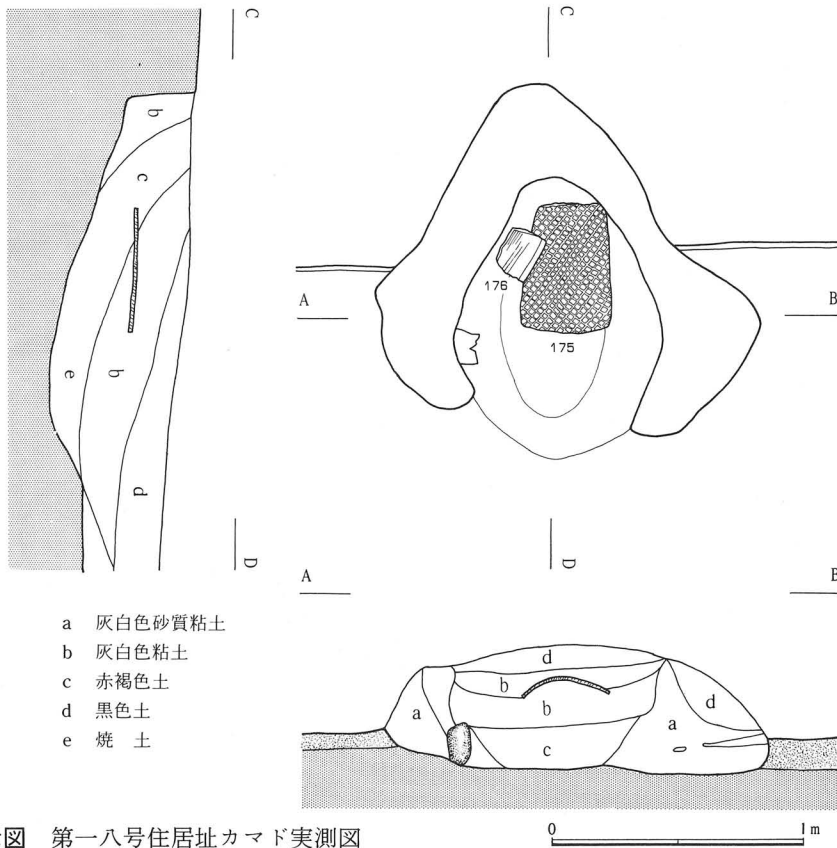
第四四図 第一八号住居址実測図



第四五図 第一八号住居址接合関係図

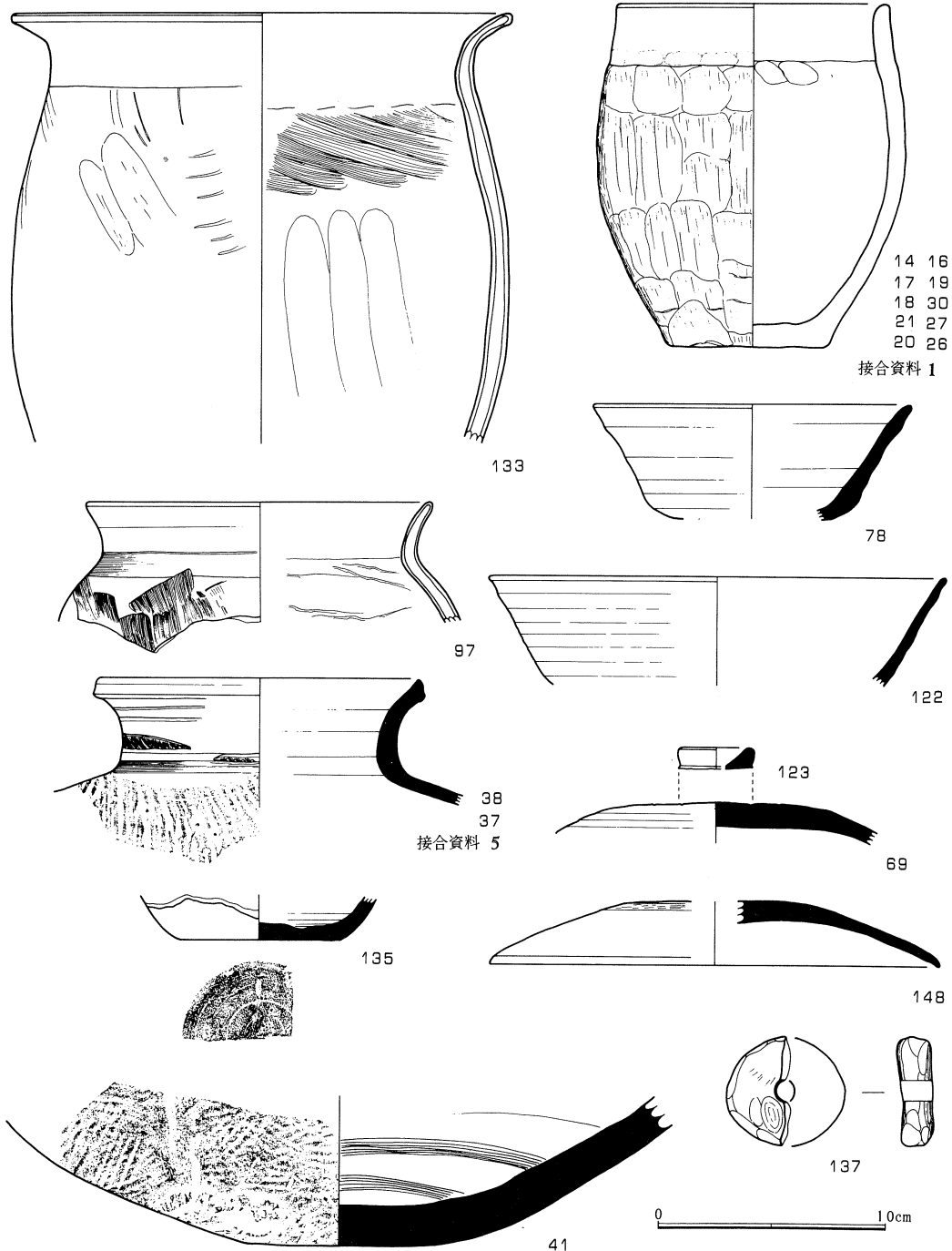


第四六図 第一八号住居址柱穴断面図



- a 灰白色砂質粘土
- b 灰白色粘土
- c 赤褐色土
- d 黒色土
- e 焼土

第四七図 第一八号住居址カマド実測図



第四八図 第一八号住居址出土土器・紡錘車実測図

隔で接合できる。このような単独資料と接合資料のありかたをみると、本址の遺物は、ほとんど同時に壁外の数地点から同一破片を廃棄したように思われる。

接合資料 土師器に4例と須恵器に1例発見された。

接合資料1〈甕形土器〉20▽0・21▽0・18▽0・17△0・14△0・16△3・30▽0・27▽0・
26▽0

接合資料2〈 同 〉67▽21・68▽21・146▽12

接合資料3〈 同 〉132▽20・128△12

接合資料4〈 同 〉139△0・124△4

接合資料5〈 同 〉38▽7・37▷3(須恵器)

時 期 環状鈕を伴う蓋形土器の一群をメルクマールとすれば、本址の遺物は8世紀第2～3四半期ころに比定できよう。

第一九号住居址(第四九図、図版第一九)

遺存状態 良好な堅穴であるが中央付近に直径25cmの攪乱穴がある。

規模・形態 北壁(W-X)間約3.2m、南壁(Y-Z)間約3.1m、西壁(W-Y)間約3.1m、東壁(X-Z)間約3.2mを測り、ほぼ方形に近いプランである。面積は約10㎡になる。周壁は僅かに傾斜し、深さは各壁とも40cmを測る。壁面は崩落せず良好な状態である。

床面 全体に硬度3に相当する。貼床は認められないが、周壁に沿って幅約10cm、深さ約5cmの溝をめぐるしている。

柱穴 床面上に柱穴と思われるピットが全く発見されず、東西の両壁に接して、または壁と周溝にまたがって6本のピットを検出した。P₁の位置が不規則である他はおおむね等間隔に並んでいる。深さが30~60cmあるので本址に伴う柱穴と考えてよいだろう。

カマド 北壁の中央から僅かに東に寄っている。奥壁~焚口間130cm、両袖部幅100cmの大きさである。両袖部の砂質粘土の残存状態は悪い方であろう。

埋没土 A-Bセクションでは、床面上の壁際に黒色土Ⅲ、その上部にローム粒子を少量混入した黒褐色土Ⅱ、最上部にローム粒子やロームのブロックを多量に混在した黄褐色土Ⅰが堆積する。南壁付近の層相は若干相違するが、いずれも人為による廃棄土砂である。

遺物の種類・出土状態 遺物の種類は、土師器甕形土器、須恵器甕形土器、高台付盤形土器、布目瓦などである。総数75個の内訳をみると、最も多いものは布目瓦の破片で42個、土師器破片18個、自然石12個、須恵器破片3個となる。瓦の出土数は全遺物の56%を占めており、分布図の状態は瓦破片の廃棄場の感を深くする。瓦の破片は、堅穴内の全面にわたってみられ、接合資料も3例抽出できた。土器破片の接合資料が皆無であるということも珍しい。

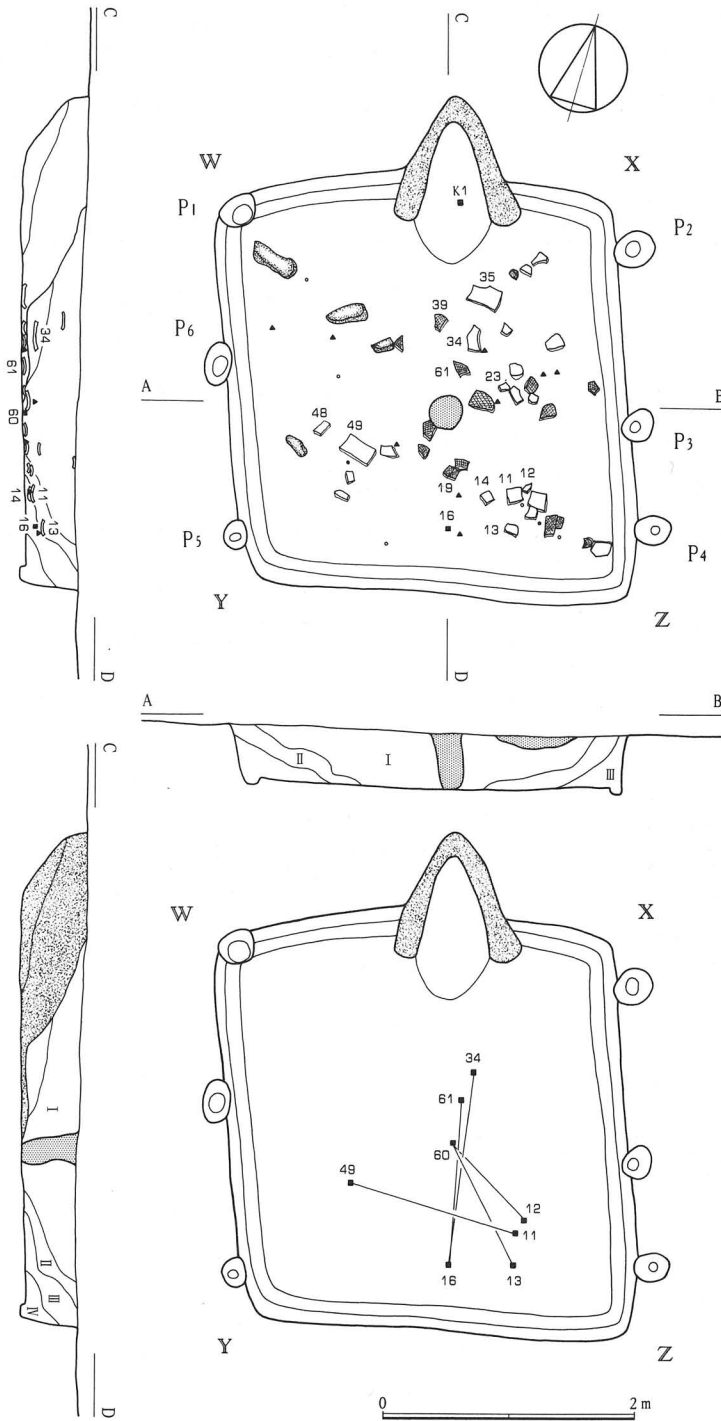
接合資料 下記の布目瓦破片が3例接合する。

接合資料1〈布目瓦〉60△0・13▽13

接合資料2〈同〉61△0・16△7・34△10

接合資料3〈同〉11▽5・49▽20

時期 出土土器の中に高台付盤形土器も存在し、遺物の年代は8世紀の第3~4四半期ころに比定できるであろう。



第四九図 第一九号住居址実測図

第二〇号住居址(第五図、図版第二〇)

規模・形態 北壁(W-X)と南壁(Y-Z)間は約2.6m、西壁(W-Y)と東壁(X-Z)間は約2.6～2.7mを測り、面積約7㎡の小形の竪穴である。壁はほとんど垂直に掘られ、深さは平均45cmほどあり、壁面は良好な状態で残っている。

床 面 硬度3に相当し平坦である。周溝、貼床は認められない。

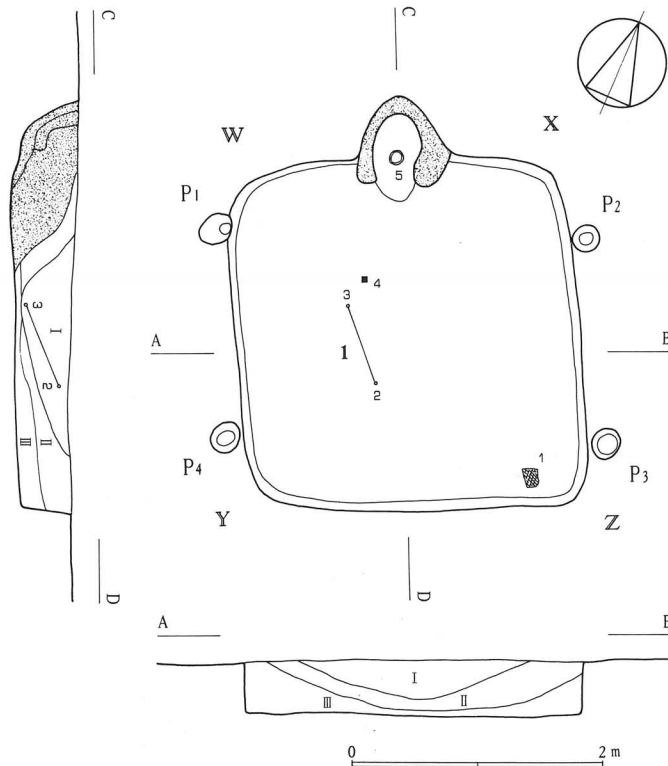
柱 穴 床面上に柱穴と思われるピットがなく、東西の両壁に接し、各コーナーより若干離れて2本ずつ存在する。各ピットとも直径25cm程度で深さ30cm前後を測る。本址に付随するピットは、この4本だけであるから柱穴と見做してもよいだろう。

カ マ ド 北壁中央にあり、奥壁～焚口間約80cmで、左袖部の残りが悪い。

埋 没 土 床面上にロームの廃棄土Ⅲ、その上に黒色土Ⅱ、上部にローム粒子を少量混在した黒褐色土Ⅰが堆積する。いずれも人為的な廃棄土砂である。

遺物の種類・出土状態 土師器甕形土器、坏形土器、須恵器蓋形土器、布目瓦の破片が5個出土しただけである。接合資料は、坏形土器(2・3)に認められる。

時 期 9世紀第4四半期から10世紀第1四半期に廃絶した住居址であろう。



第五〇図 第二〇号住居址実測図

第二一号住居址(第五一図)

規模・形態 第二〇号住居址とほぼ同一方向に構築され、北壁(W-X)間約3.3m、南北(Y-Z)間約3.0m、西壁(W-Y)と東壁(X-Z)間はほぼ等しく約3.0mを測り、面積約9㎡余の小形の住居址である。周壁は斜めに掘り下げて、深さ15cm前後である。

床面 硬度2～3に相当しほぼ平坦である。床面の下部には、貼床が全面に施され、薄いところで5cm、厚いところで15cmを測る。

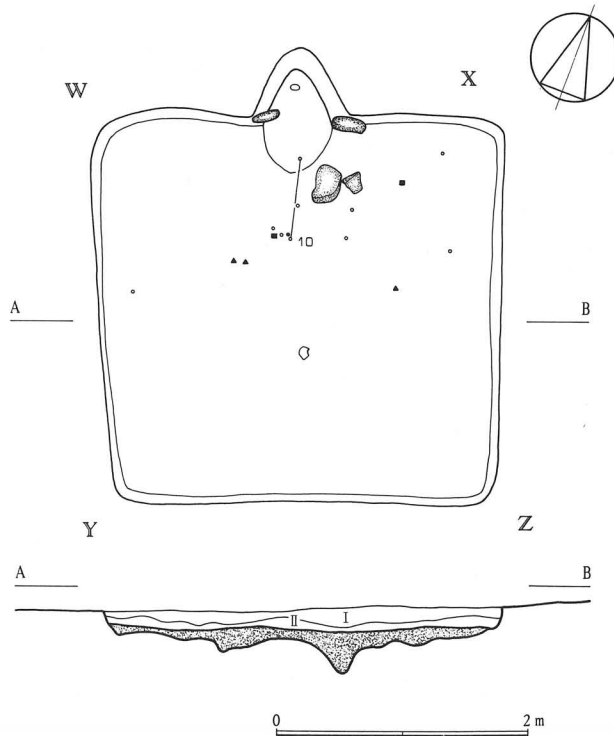
柱穴 竪穴の内外面に柱穴と考えられるピットは1本も検出できなかった。

カマド 奥壁～焚口間は約190cmを有し、北壁に接し両袖部に自然石を2個並べている。壁面より床面上に張りだして袖部を構築するのが普通であるが、なぜか袖部が残っていない。

埋没土 ローム粒子を混入した黒褐色土Ⅱと黒色土Ⅰに区別される。

遺物の種類・出土状態 土師器と須恵器の甕形土器破片が15個、布目瓦破片2個、自然石4個が出土している。これらの遺物は大部分Ⅰ層中に含まれ、カマドの前面付近に散在する。

時期 本址の廃絶は、第二〇郷住居址とほぼ同じころであろう。



第五一図 第二一号住居址実測図

第二二号住居址(第五二・五三・五四図、図版第二一)

規模・形態 東壁(W-X)と西壁(Y-Z)間約3.4m、北壁(W-Y)間約3.1m、南壁(X-Z)間約3.2mを測り、面積は約11㎡に近い長方形の住居址である。周壁は斜めに掘り下げ、深さは30～35cmを有する。壁面は崩落していない。

床 面 周壁に近い部分が硬度2、中央付近の空間は硬度3に相当する。床面は全体に貼床となっており、厚さ10cm前後である。

柱 穴 床面上にはピットが発見できず、壁外のローム面に8本のピットが存在する。このうち各コーナーの外側にあるP₁、P₂、P₃、P₄は、深さが35cm程度あり、位置関係から支柱穴であろう。その他のピットもP₇を除き同じ程度の深さがあるので、柱穴に関係するかも知れない。

カ マ ド 本址は東壁の南側Xコーナーに接している。奥壁～焚口間約110cm、両袖部幅100cmの大きさである。袖部は、砂質粘土を積み上げ、一部に凝灰岩も使用している。燃焼部内に崩落した石面は炭化物の付着がみられる。

埋 没 土 土砂は他の住居址と同様に黒色土Iと黒褐色土IIに区別できる。

遺物の種類・出土状態 土師器と須恵器の器種には、甕形土器、坏形土器、高台付坏形土器などが認められる。総数は66個で、土師器破片30個、須恵器破片23個、布目瓦破片4個、自然石9個に分類できる。土器破片53個の表裏関係は、表28個(53%)、裏21個(40%)、立ち4個(7%)である。

こうした遺物の出土状態を観察すると、平面分布上は北壁近くにほとんどみられず、カマドの前面から西壁寄りに散在する。レベル的には、床面のものよりI層中に包含される破片が多く、その状態はA-Bセクションに示したようになる。接合資料は、資料6を除き西～西北方向に接合する資料が大部分である。接合線の走行方向と間隔は、遺物廃棄の方向性を示唆すると考えてよいだろう。

接合資料 下記の6例が抽出できた。すべて甕形土器である。

接合資料1<土師器>29▽23・66△0

接合資料2<同>20△17・21▽17

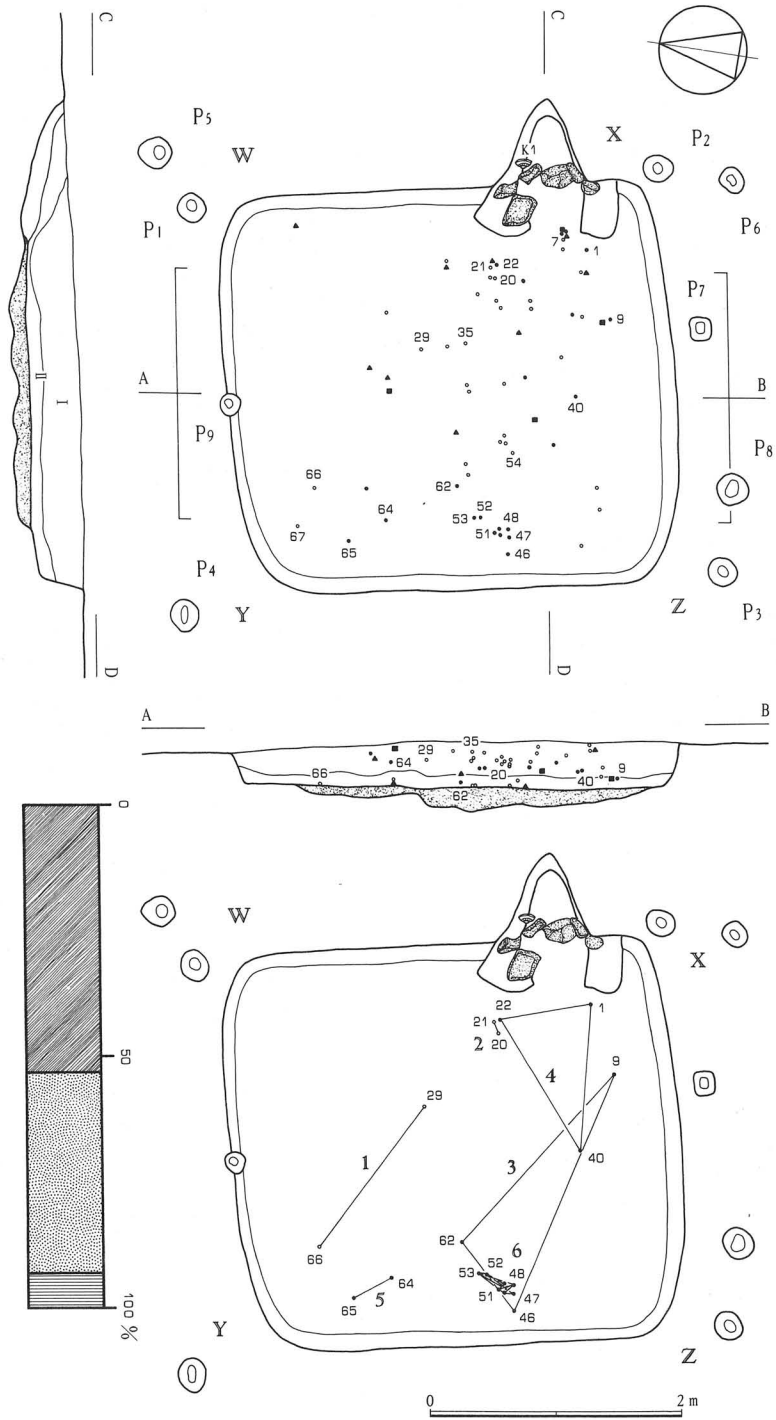
接合資料3<須恵器>46▽0・9△8・62▽3

接合資料4<同>1▽32・40▽15・22▽18

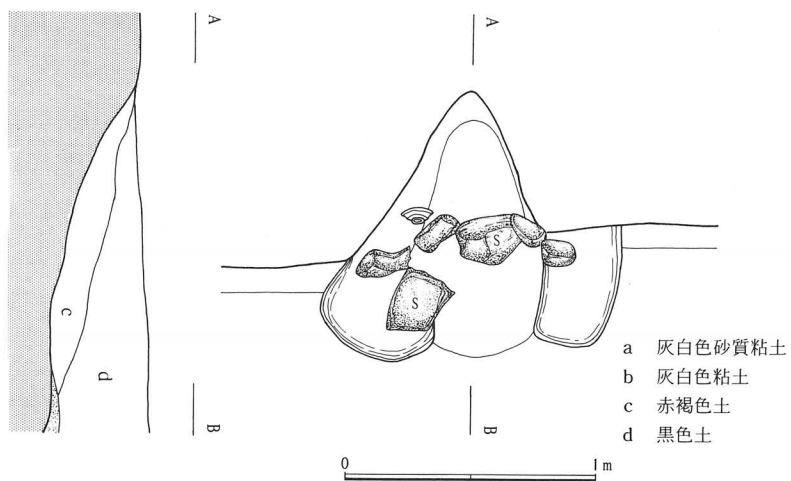
接合資料5<同>65△34・64△18

接合資料6<同>49△0・51▽0・52△14・47▽0・53△14・50▽0・48▽0

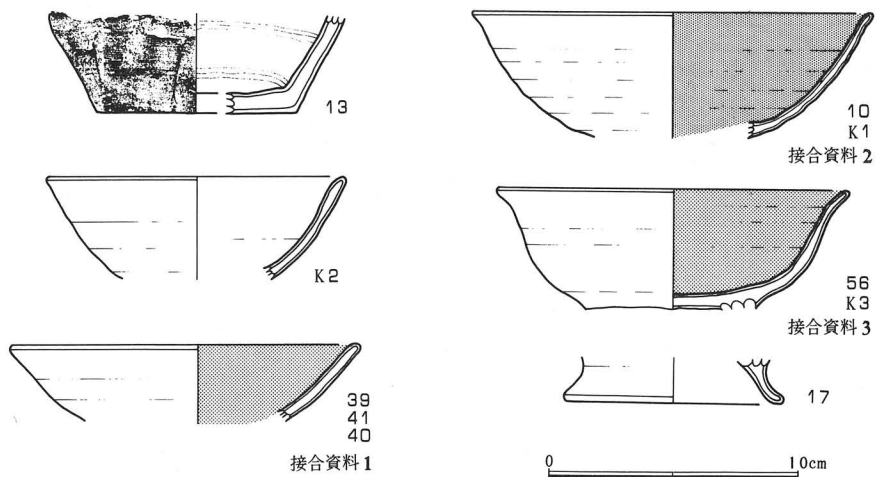
時 期 おそらく9世紀第4四半期から10世紀第1四半期のころに廃絶された住居址であろう。



第五二図 第二二号住居址実測図



第五三図 第二二号住居址カマド実測図



第五四図 第二二号住居址出土土器実測図

第二三号住居址(第五五・五六・五七・五八図、図版第二二・二三)

遺存状態 西壁側のWコーナー寄り $\frac{2}{3}$ の部分が浅い攪乱を受けている他は良好である。

規模・形態 北壁(W-X)間約4.8m、南壁(Y-Z)間は若干短く約4.6m、西壁(W-Y)と東壁(X-Z)間は4.4~4.5mで、ほぼ方形に近い竪穴である。面積約21㎡の大きさを有する。周壁は若干斜めに掘られ、25~30cmの深さを測る。壁面には崩落した跡がない。

床面 硬度は内区が3程度、外区はこれより幾分軟らかくなる。床面の下は厚さ30cm前後の貼床が施され、東壁中央近くに時代の異なる円形の土壌が存在する。周溝は掘られていない。

柱穴 各コーナーの対角線上にピットがある。Wコーナー側2本、Xコーナー側1本、Yコーナー側2本、Zコーナー側1本で、いずれも支柱穴または補助的な柱穴であったと思われる。

カマド 北壁のほぼ中央壁を外側に約60cm掘り込んで煙道と燃焼部を、床面上に両袖部を構築している。カマド前面の細長い切石(長さ97cm、幅16cm)は焚口部に使用したものであろう。一部石組の構造で奥壁~焚口間135cmを有する。故意に破壊した状態である。

埋没土 前号住居址と同様にI・II層に区別できる。

遺物の種類・出土状態 出土した器種は、土師器の甕形土器、坏形土器、須恵器の甕形土器、坏形土器、蓋形土器などである。遺物の内容は、土師器破片244個、須恵器破片18個、布目瓦破片11個、自然石6個に分れる。ドットに記録した土器破片241個の表裏関係は、表92個(38%)、裏101個(42%)、立ち48個(20%)という比率になる。

遺物の総数が261個というのは多い方である。この分布状態をドット・マップで観察すると、柱穴の外側つまり外区に少なく、カマド前面からP₄の内区に多く散在する。特に右袖部とP₂の南側、P₄の北側などの4地点に、小範囲ではあるが集積している。レベル的には、床直出土の遺物は非常に少なく、大部分のものは床上10~20cmの層中に含まれている。

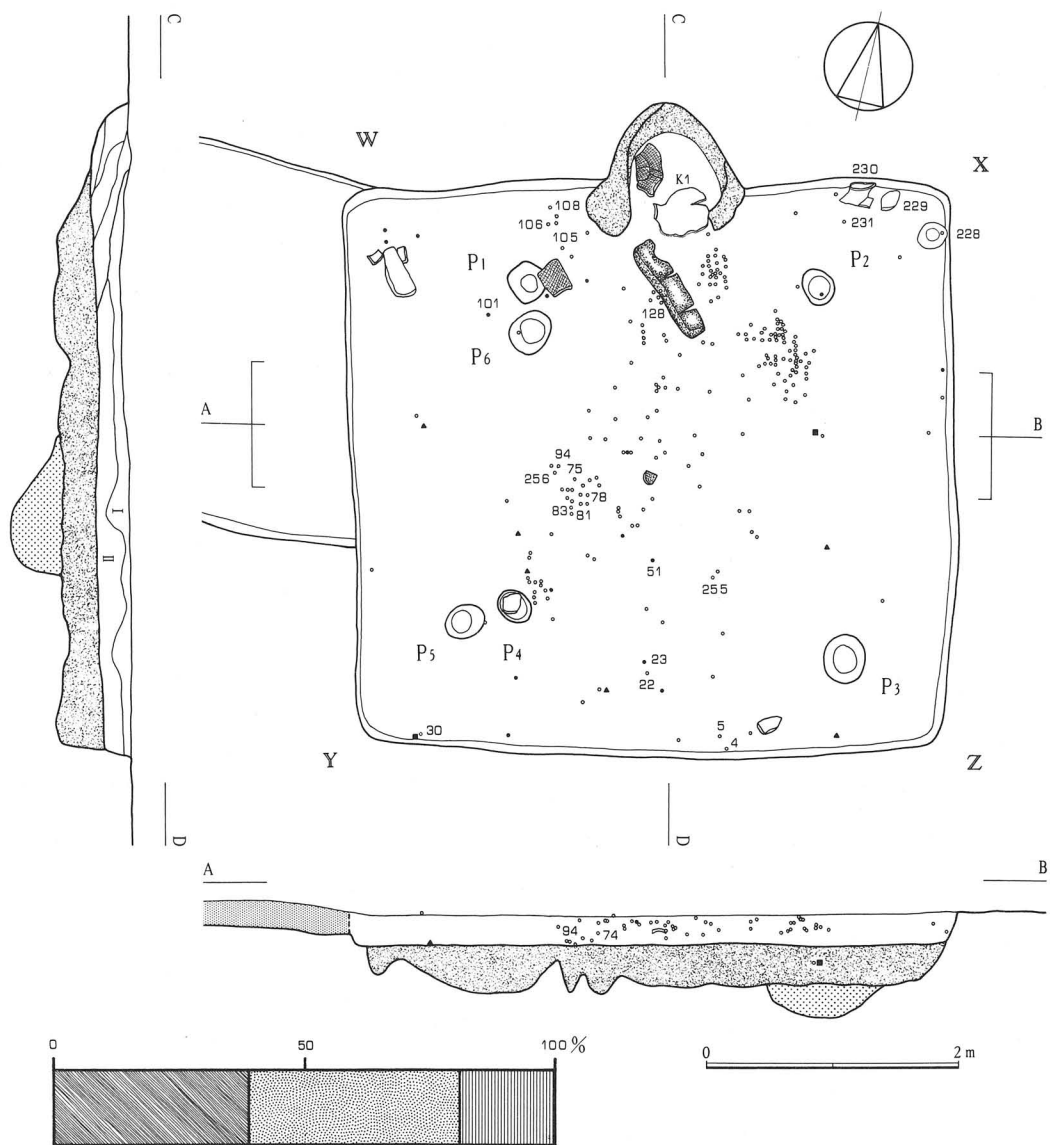
また、本址においては、竪穴の周囲の確認面に22個の平瓦、丸瓦の大小破片が散在し、床面とカマド内出土の破片を加えると33個になり、第一九号住居址について多い。

接合資料は、出土遺物の量に比例して多くなり、床面の全域に認められる。土器破片の接合線の分布は、資料2と5のように東西方向に走行する若干例を除き、大部分は南北方向を示している。これに反し布目瓦の資料16と17は、ほぼ東西方向に接合する。

接合資料 土師器甕形土器(1~12)に12例、坏形土器(13・14)に2例、須恵器甕形土器(15)に1例、布目瓦(16・17)に2例の合計17例が発見された。

接合資料1<甕形土器>230△5・229△0

接合資料2<同>105△5・128▷12・108▷10・106▷3



第五五図 第二三号住居址実測図

接合資料 3 < 同 > 83△0 · 75▽4 · 81▽0 · 94△2

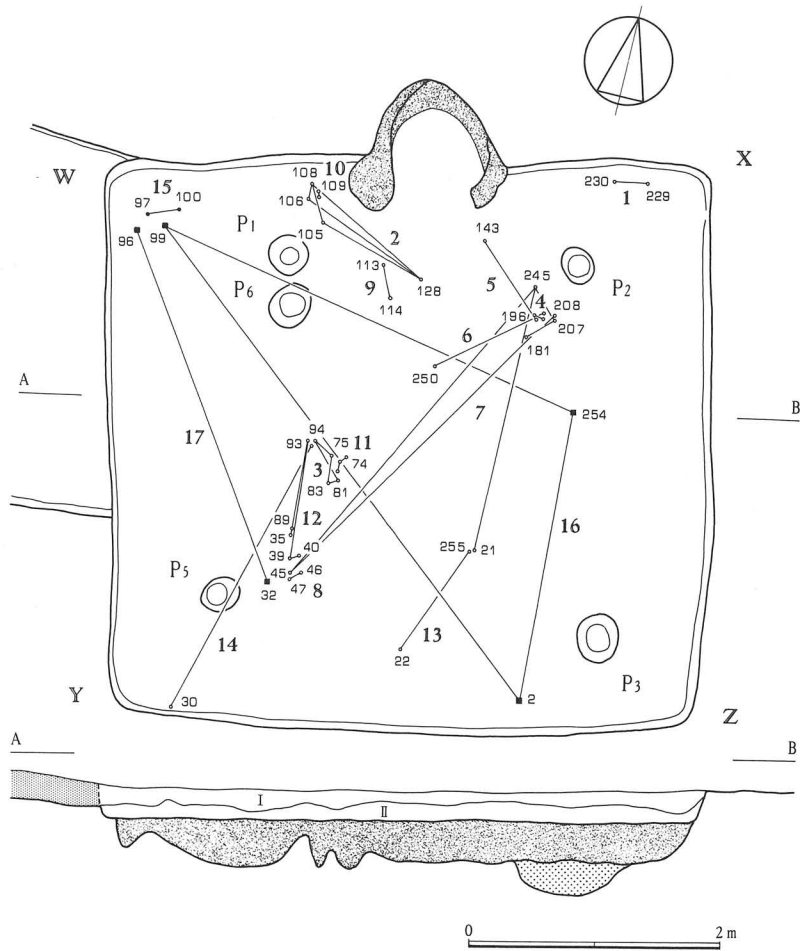
接合資料 4 < 同 > 196△14 · 195▽14

接合資料 5 < 同 > 193▽12 · 143△10

接合資料 6 < 同 > 197▽15 · 250▽8

接合資料 7 < 同 > 208▽11 · 45▽12 · 245▽14 · 21▽7 · 207△14 · 181▽11

接合資料 8 < 同 > 46▽12 · 47▽12



第五六図 第二三号住居址接合関係図

接合資料9〈同〉114▽14・113△15

接合資料10〈同〉109▽10・110△12

接合資料11〈同〉78▽2・77▽2・74▽4

接合資料12〈同〉35▷12・89▽11・93▽14・39▽13・40▽12

接合資料13〈坏形土器〉22▽7・255▽7

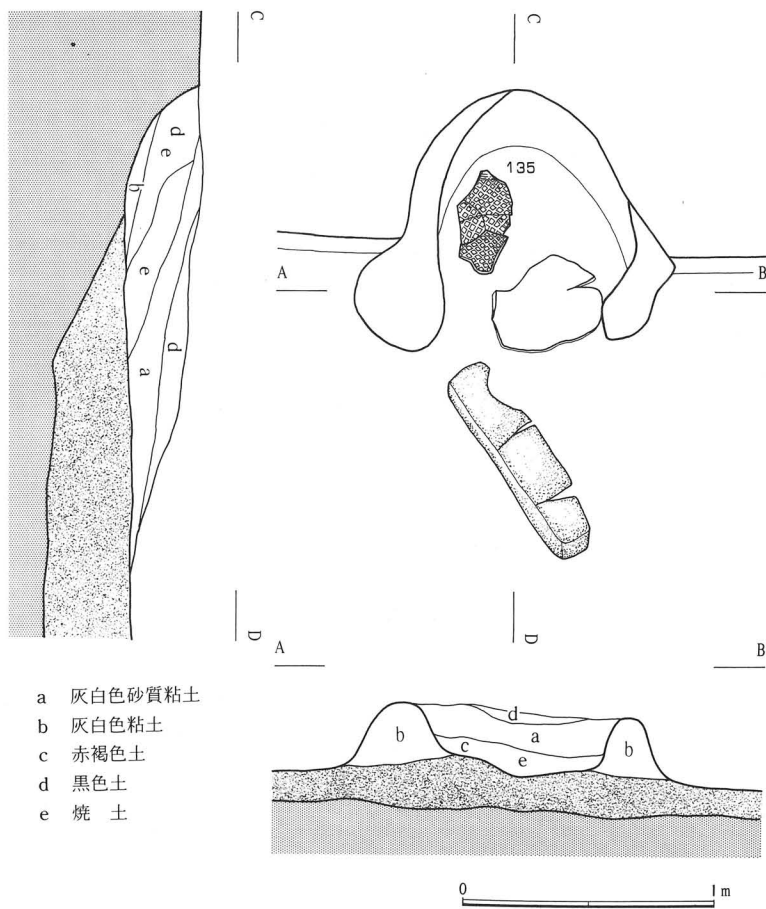
接合資料14〈同〉30▷10・256△2

接合資料15〈甕形土器〉97▽7・100▽5

接合資料16〈布目瓦〉99・254・2

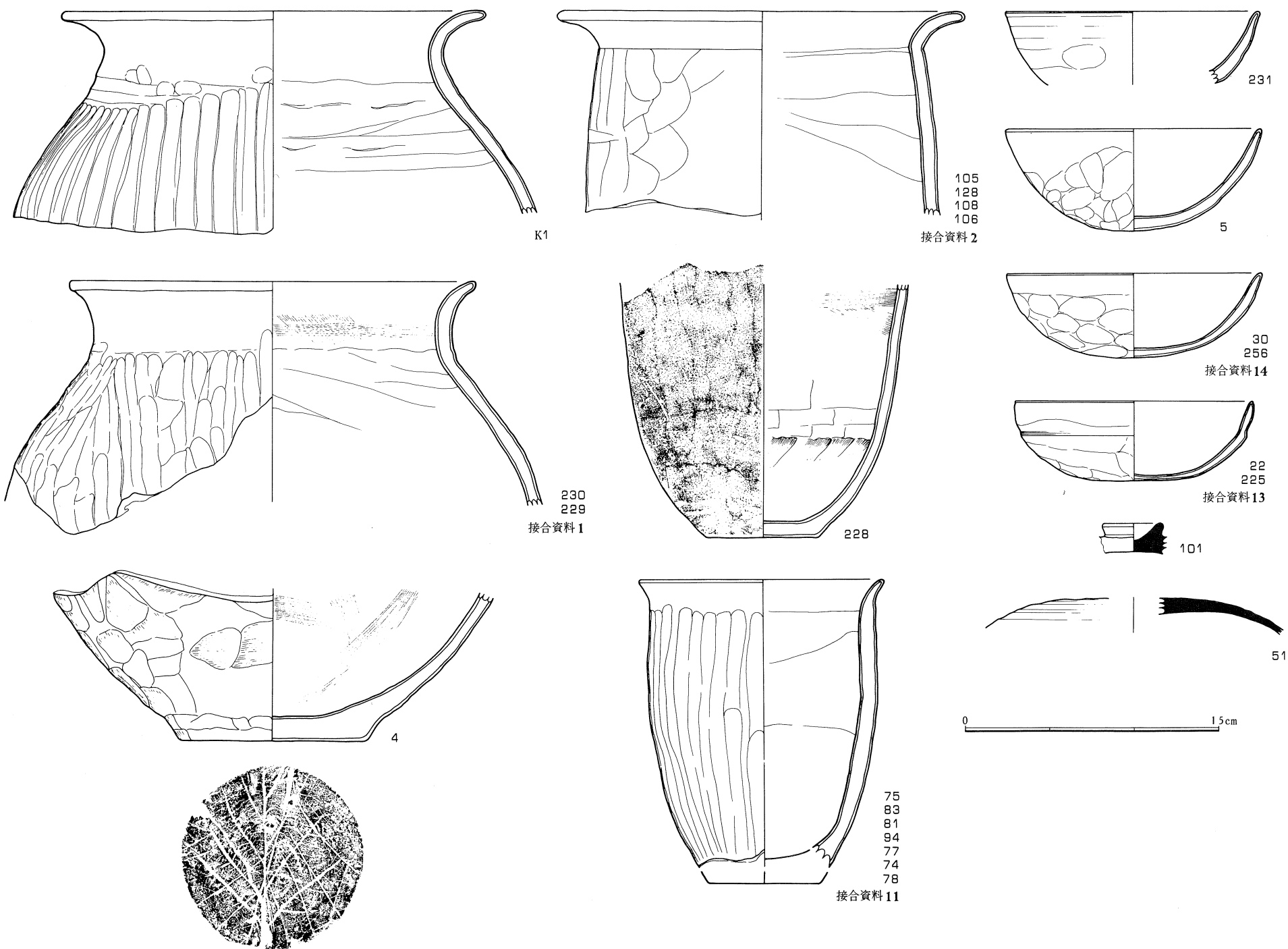
接合資料17〈同〉32・96

時期 本址の遺物は、土師器甕形土器の口頸部に鬼高式的な稜を残すものがあり、坏形

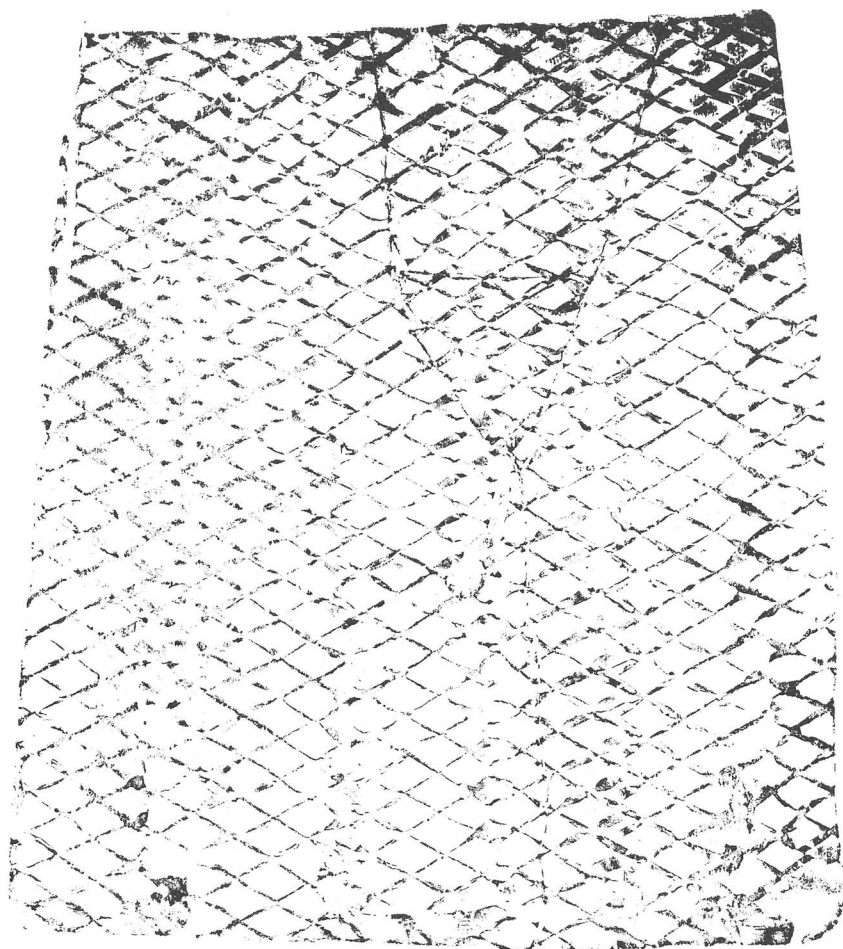


第五七図 第二三号住居址カマド実測図

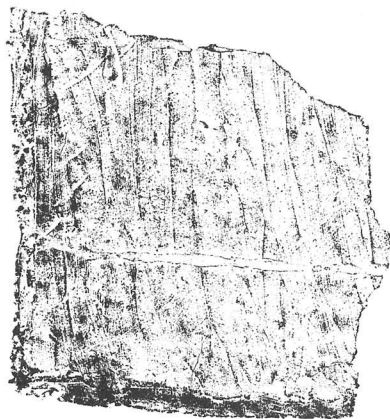
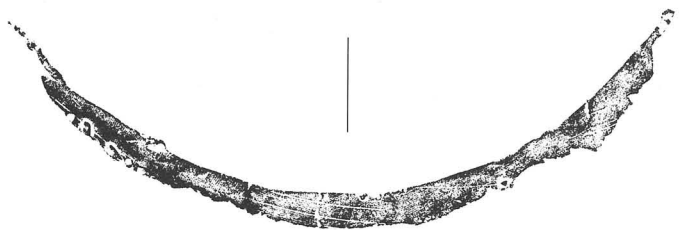
土器には塊状のものもみられ、須恵器の蓋形土器の鈕にも外周が高くなった例が存在し、8世紀の第2～3四半期ころに考えられる。



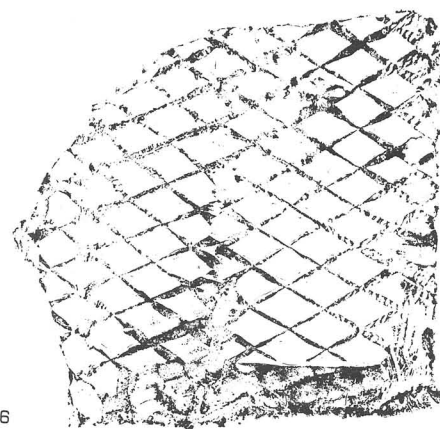
第五八图 第二三号住居址出土土器实测图



176

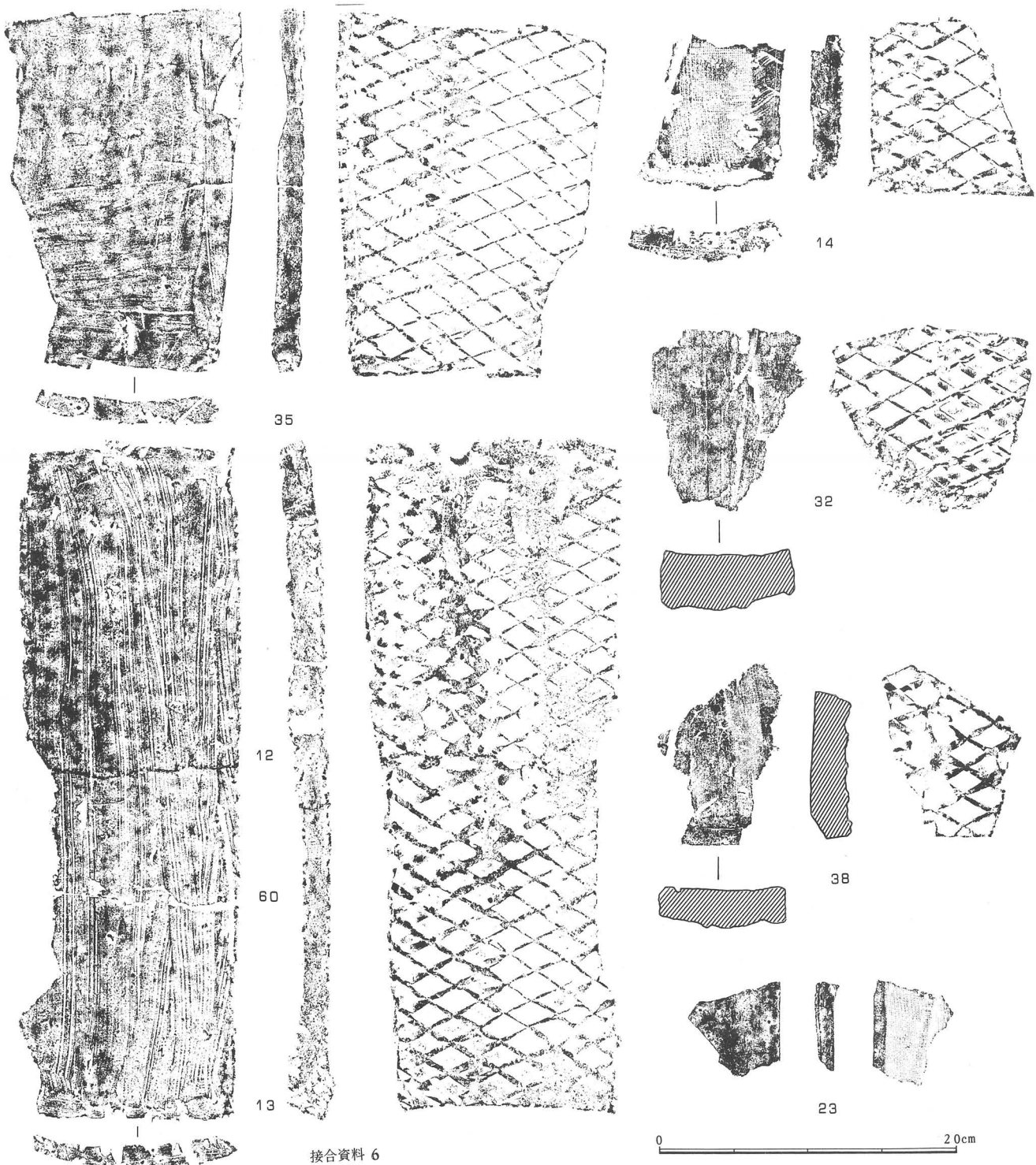


176



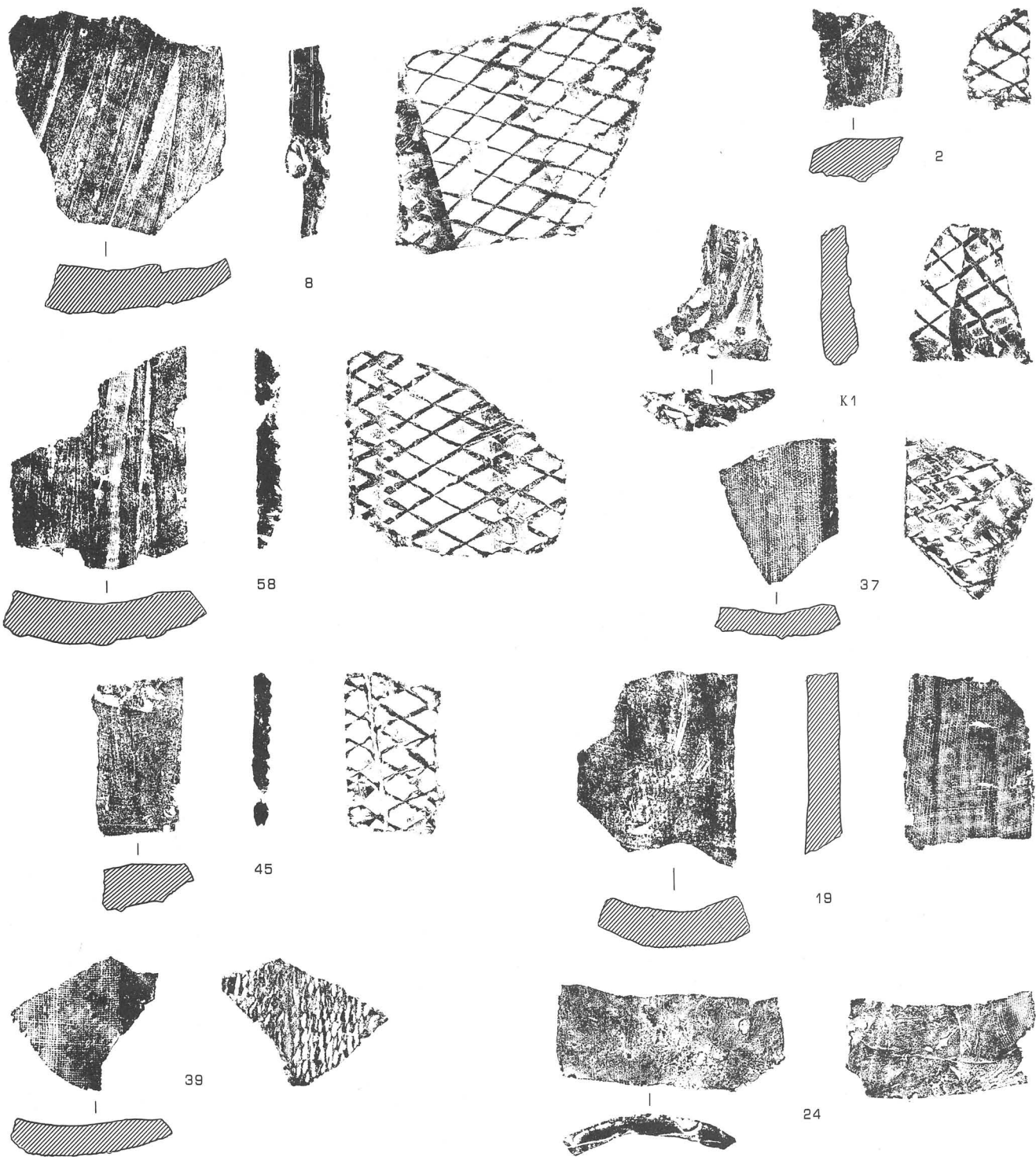
0 20cm

第五九图 第一八号住居址出土瓦実测拓影图

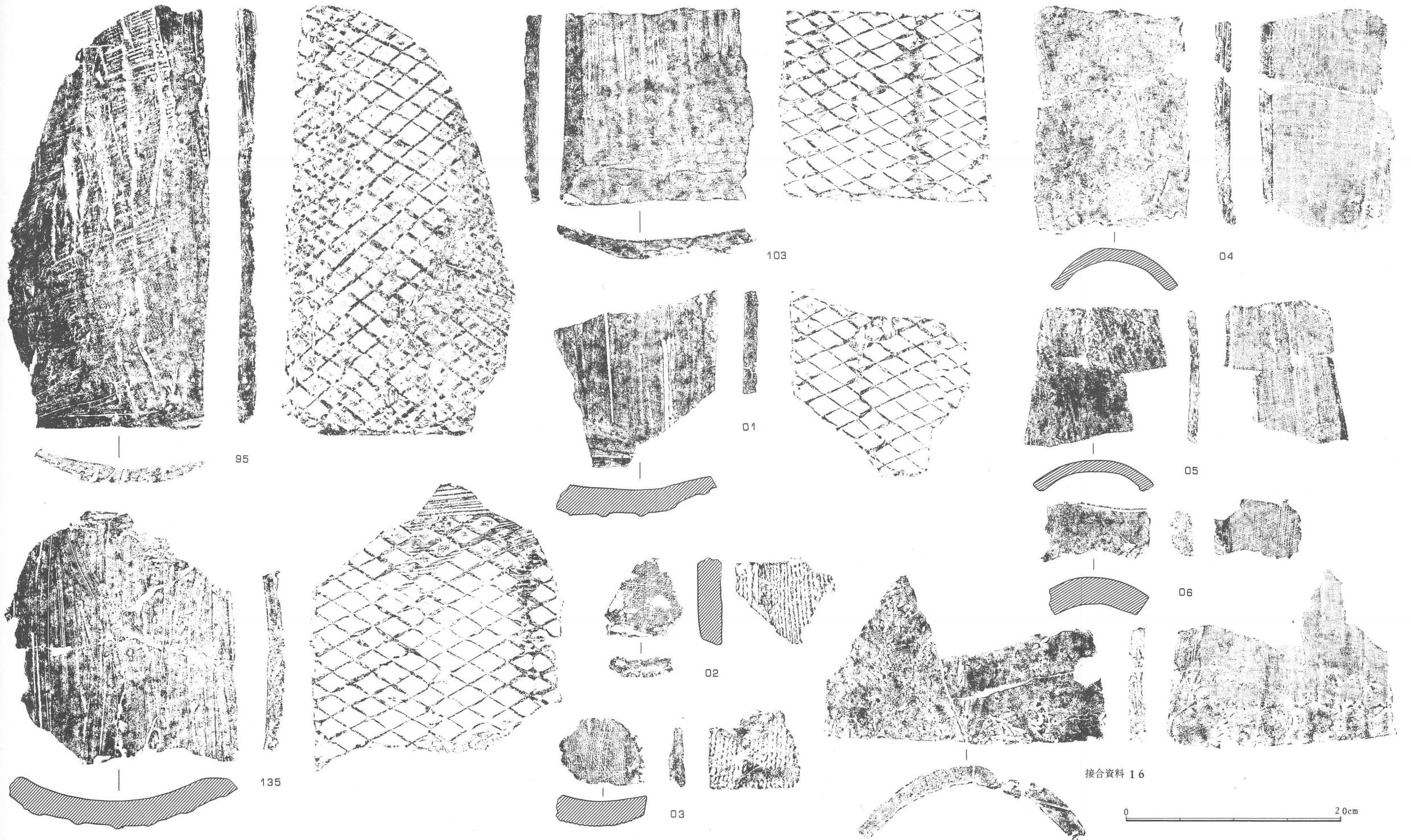


接合資料 6

第六〇圖 第一九号住居址出土瓦実測拓影図



第六一圖 第一九号住居址出土瓦実測拓影図



第六二图 第二三号住居址出土瓦実测拓影图

第七章 ま と め

鷹巣遺跡の第二次発掘調査の概要は以上に記述してきたとおりである。

本遺跡は、未発掘の東側畑地・山林、西側斜面の窯址群まで含めると、約50,000㎡の範囲が推定でき、昭和56年の第一次調査において5,000㎡、今回の第二次調査において15,000㎡を発掘した訳であるが、この面積は遺跡全体のほぼ40%に相当するようと思われる。

遺構としての竪穴住居址群のありかたについては、今回の23軒に第一次調査分を加えると、ある程度の傾向を想察できるけれども、瓦生産にかかわる明確な工房址がまだ発見されていない。これは調査区の西側に数10mの幅で畑地と山林が介在し、ここが窯址を構築した斜面の台地上に当るので、当然そこに工房址の埋没が予想される場所である。また原料の粘土採掘穴の所在も確かめていないし、個々の窯址も未発掘であり、その規模や構造自体、全く白紙の状態に等しいといつてよい。こうした現時点の状況を考慮すれば、今回の調査結果を基に遺跡の全体を律することは先ず不可能である。それ故に本遺跡の全体像を把握しようと、開発区域外の部分を早急に発掘する必要はなく、むしろ適切な保護策を講じて後世に保存すべき性格の遺跡といえよう。

第二次調査で発掘した23軒の住居址についての内容は別表に記載したとおりである。

個々の住居址は、規模の点で第八・一八・二三号の大形住居址(面積21~36㎡)を除くと、大略近似した面積10㎡前後の大きさになる。カマドを中心に考えた主軸方位も大部分磁北を指し、例外として東を向く住居址(第一・六・九・二二号)も若干存在する(第三図)。また柱穴についても、床面の対角線上に整然と位置するものがある反面、壁や壁外に構築したものがあり、これらは概して不規則な配列を示している。住居址群の中には、住居兼工房址として使用したものがあつたかも知れないが、勝田市馬渡遺跡や原の寺遺跡の工房址の事例をみると、床面上に原料の粘土塊が多量に堆積しているのである。本遺跡の住居址内には、全くそうした痕跡が認められないことを考えれば、工房址と速断するにはなお問題が残ると思う。

出土遺物については、土師器では甕形土器と坏形土器が多く、ついで高台付坏形土器、コシキ形土器、須恵器では坏形土器の他に甕形土器、高台付坏形土器、同盤形土器、同皿形土器、蓋形土器などの器種が存在する。土製品には球形土錘や紡錘車が若干あり、鉄製品には鎌と刀子が各1例発見され、鉄滓も僅かながら出土している。しかし、身分的または階級的な相違を示す遺物(たとえば銅製の帯金具の類)はまだ発見されていない。

こうした遺物の中には、環状鈕を伴う蓋形土器、高台付盤形土器、内面に黒色処理を施した坏形・皿形土器などの年代的特徴をもつた土師器・須恵器が存在するので、住居址は8世紀第3四半期ごろから営まれ、遺跡の性格上、郡衙や寺院と消長をともにしたと考えられる。

すでに述べてきたように台地西縁には、推定10基前後の瓦を焼成した窯址があり、また瓦の破

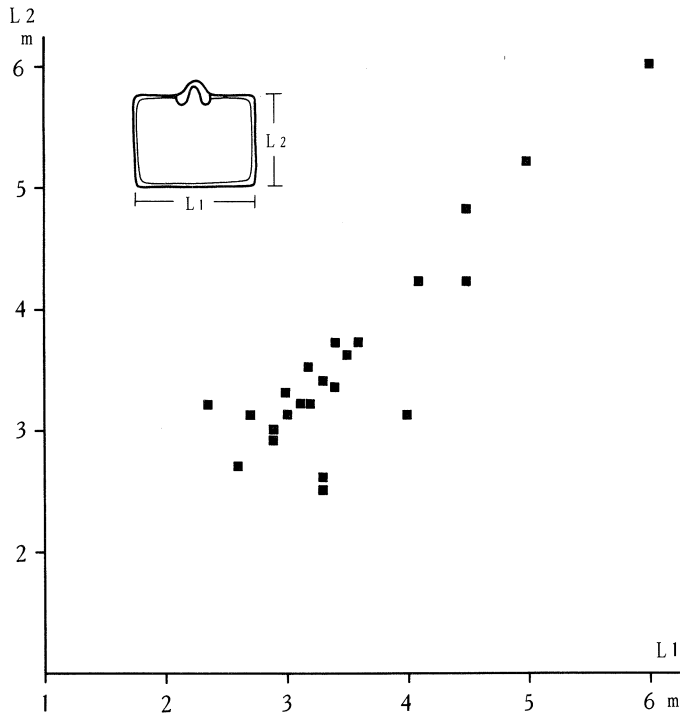
住居址一覧表

番号	住居址	規模	面積	主軸方向	カマド	壁高	時期
1	1H	3.3×3.4	11	N71°E	東壁	30~35	9C3~4
2	2H	4.2×4.5	15	N19°W	北壁	30~35	9C2~3
3	3H	3.5×3.2	12	N1°W	北壁	40	9C2~3
4	4H	2.9×2.9	9	N22°W	北壁	40	9C3~4
5	5H	3.2×2.7	9	N7°W	北壁	35~40	8C3~4
6	6H	3.0×2.9	9	N78°E	東壁	35~40	9C1~2
7	7H	3.6×3.5	12	N13°W	北壁	50~60	9C2~3
8	8H	5.2×5.0	26	N9°W	北壁	45~50	8C3~4
9	9H	3.1×3.0	9	N88°E	東壁	10	9C3~4
10	10H	3.7×3.4	12	N17°W	北壁	35~40	9C3~4
11	11H	3.7×3.6	14	N10°W	北壁	35~40	9C2~4
12	12H	2.5×3.3	9	N19°W	北壁	17	9C3~4
13	13H	3.4×3.3	11	N28°W	北壁	25~30	9C4~10C1
14	14H	4.2×4.1	17	N6°W	北壁	30~40	9C2~3
15	15H	3.1×4.0	12	N29°W	北壁	20	9C4
16	16H	2.6×3.3	9	N25°W	北壁	25~30	9C4
17	17H	3.1×2.7	9	N13°W	北壁	50~55	9C3~4
18	18H	6.0×6.0	36	N17°W	北壁	30~35	8C2~3
19	19H	3.2×3.1	10	N20°W	北壁	40	8C3~4
20	20H	2.7×2.6	7	N28°W	北壁	45	9C4~10C1
21	21H	3.3×3.0	9	N21°W	北壁	15	9C4~10C1
22	22H	3.2×3.4	11	N79°E	東壁	30~35	9C4~10C1
23	23H	4.8×4.5	21	N14°W	北壁	25~30	8C3

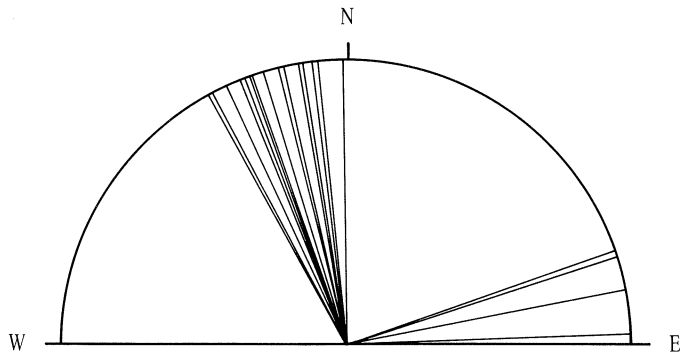
- 1) 規模は主軸×短軸の順に記載し、計測単位はmである。
- 2) 面積の表示は㎡、壁高は確認面からの平均で、計測単位はcmである。
- 3) 出土土器の時期は、四半期単位の区分を用いて目安とした。
記載例：9世紀第3～4四半期=9C3～4

片が多量に廃棄された住居址(第一九・二三号住居址)も存在している。この事実から官衙や寺院の求めに応じて、瓦の製作に従事した工人集団の住居址で、そうした集落の一部を構成していた疑いが濃いように考えられる。

今回の発掘で採集できた瓦は、平瓦と丸瓦の種類である。破片の量は前者の平瓦が圧倒的に多い。平瓦は、第一八号住居址カマド出土のものを計測すると、縦48.5cm、横(広端35.0cm、狭端30.0cm)、厚さ1.5~2.0cm、重量7.9kgの法量を有し、凹面に布目圧痕、凸面に斜格子目の圧痕が



第六三図 住居址長幅分布図



第六四図 住居址主軸方位図

みられ、また桶巻作りと思われる梓板圧痕が凹面に 2.0 ~ 4.5 cm の幅で残っている。

丸瓦は、完形品がないために詳しい法量は不明であるが、おそらく玉縁のない行基式であろう。凹面に布目痕を残し、凸面は無文となっている。破片の中には、先端部に文様をつけた軒丸瓦は未発見である。

大化 2 年 (646) の改新の詔、第二条に「郡は四十里を以て大郡と為し、三十里以下四里以上を中

郡と為し、三里を小郡と為せ」という国・郡・里の制度が定められた。その後、中央集権体制が着々と整備され、この地方は久慈郡に改まり、地方を統治する官衙として郡衙(郡役所)が設置された。『新編常陸国誌』によると、「所謂郡家ノ地ハ、正シク今ノ大里辺ニ当レリ(中略)依テ是郷中大里ノ辺ニ古郡庁ヲ置カレシコト明ナリ」とあるように、金砂郷村大里・葉谷の地を郡衙址と想定している。この想定は中山信名をはじめとする多くの研究者のほぼ一致した見解である。久慈川と山田川の合流点に近いという地理的な位置関係および律令制社会の機構を勘案した場合、本遺跡で生産した瓦は、発掘調査を行っていない現時点で断定できないが、この久慈郡衙址へ供給されたのではないかと考えられるし、また以前から先学たちもそのように推察してきたのである。いずれにしても、瓦窯址とそこから派生する諸問題は、今後における興味ある研究テーマとすべきであろう。

圖 版



遺跡の遠景、東方の久慈川流域から鷹巣台地を望む



遺跡の遠景<西南より>



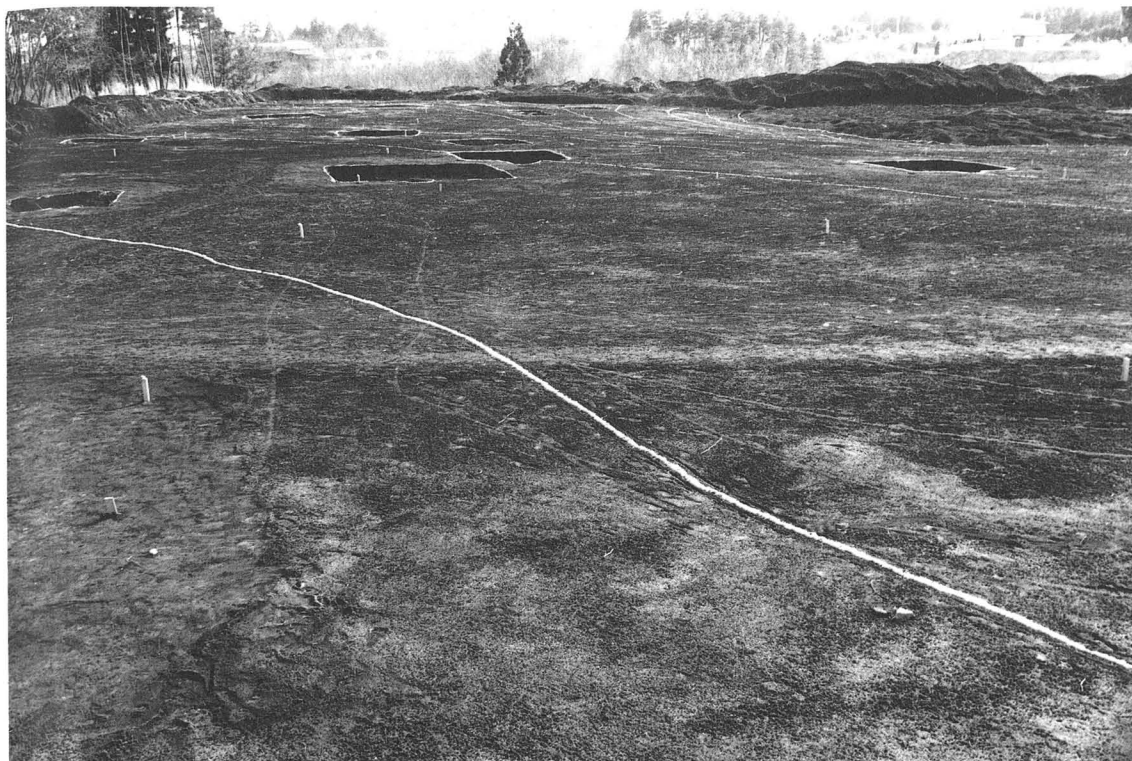
遺跡の現状、中央付近から右側が第一次調査区域〈南より〉



遺跡の現状〈北より〉



遺跡の現状〈東より〉



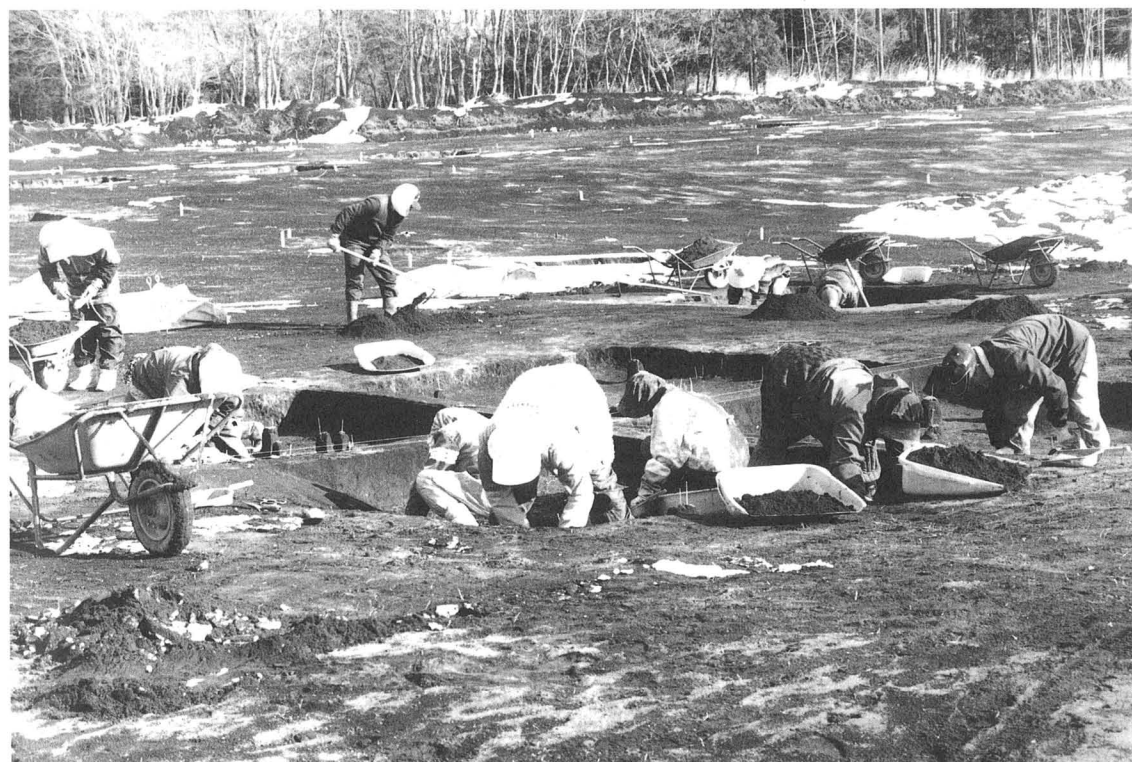
住居址の分布状況、第六～八号住居址付近〈北より〉



住居址の分布状況、第一二・一三・一七号住居址付近〈東より〉



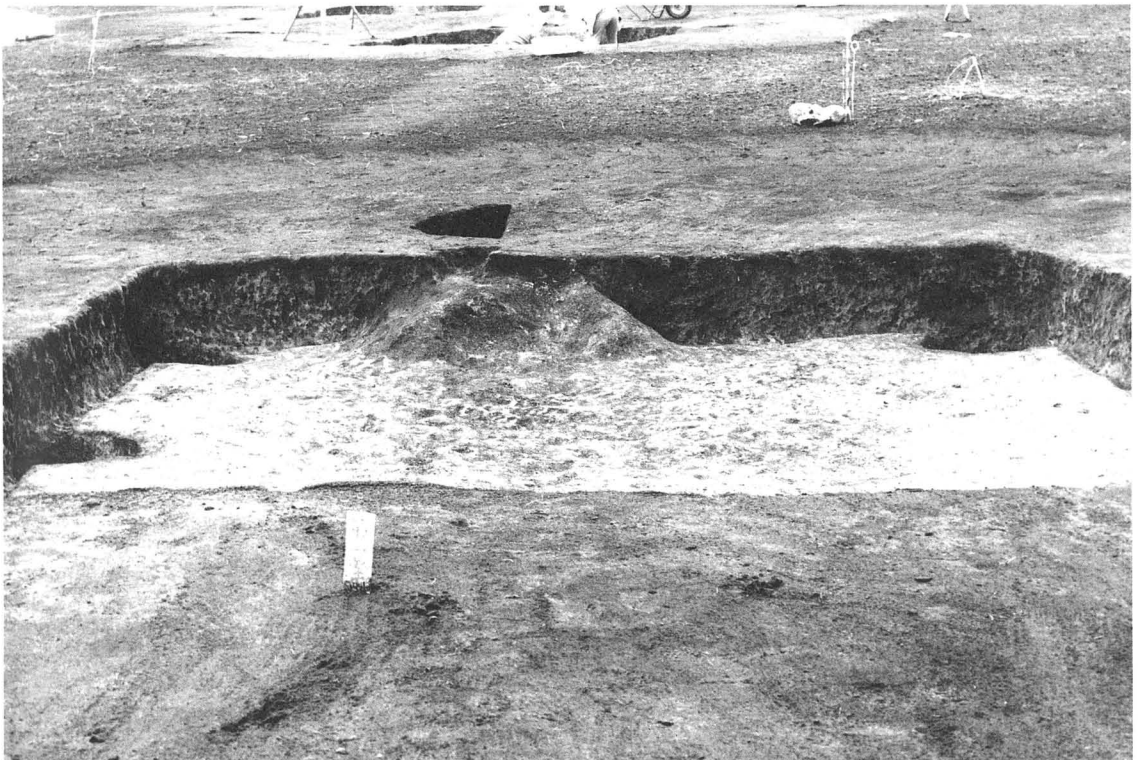
発掘調査の状況、第一一号住居址〈南西より〉



発掘調査の状況、第一三号住居址〈東より〉



第一号住居址全景〈南より〉



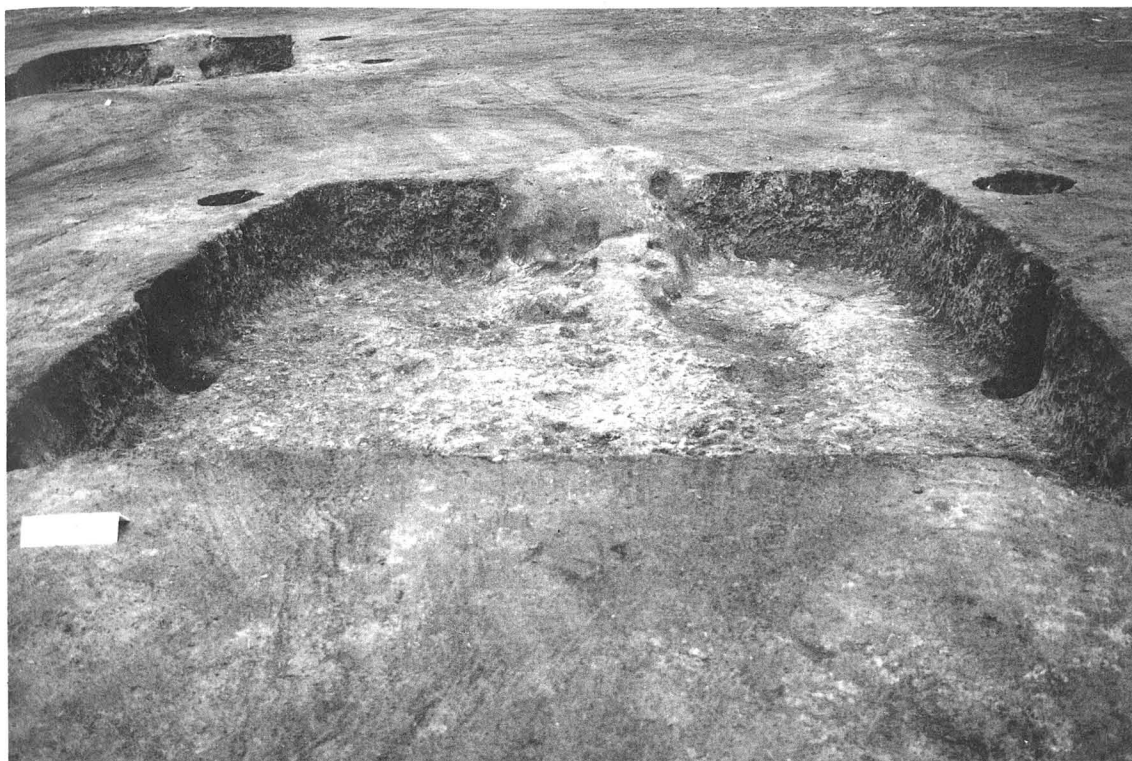
第二号住居址全景〈東南より〉



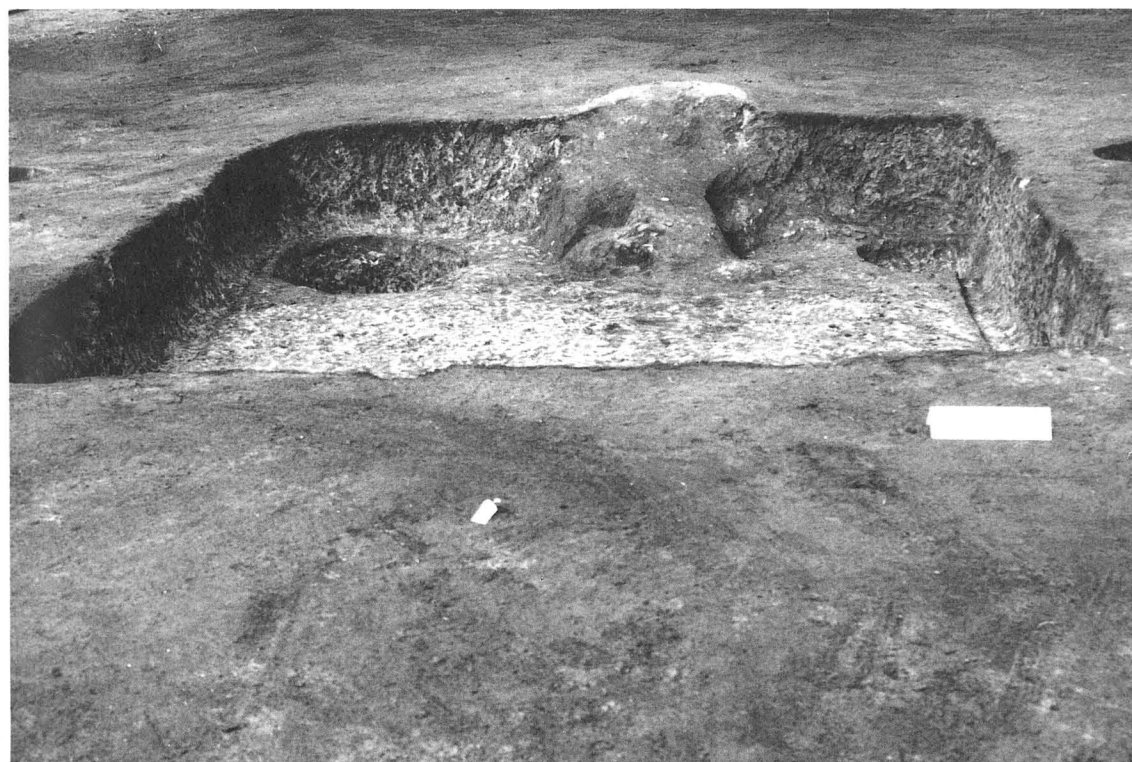
第二号住居址遺物出土状態〈南より〉



第二号住居址遺物出土状態〈南西より〉



第三号住居址全景〈南より〉



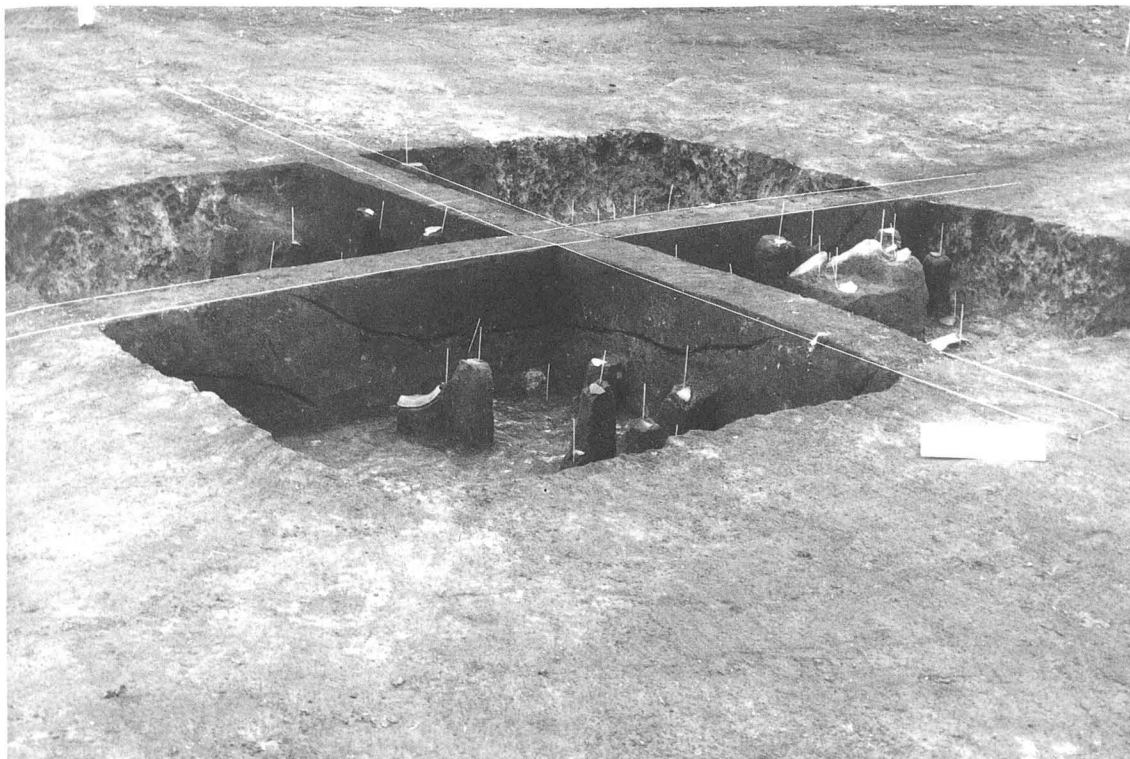
第四号住居址全景〈東南より〉



第五号住居址全景〈南より〉



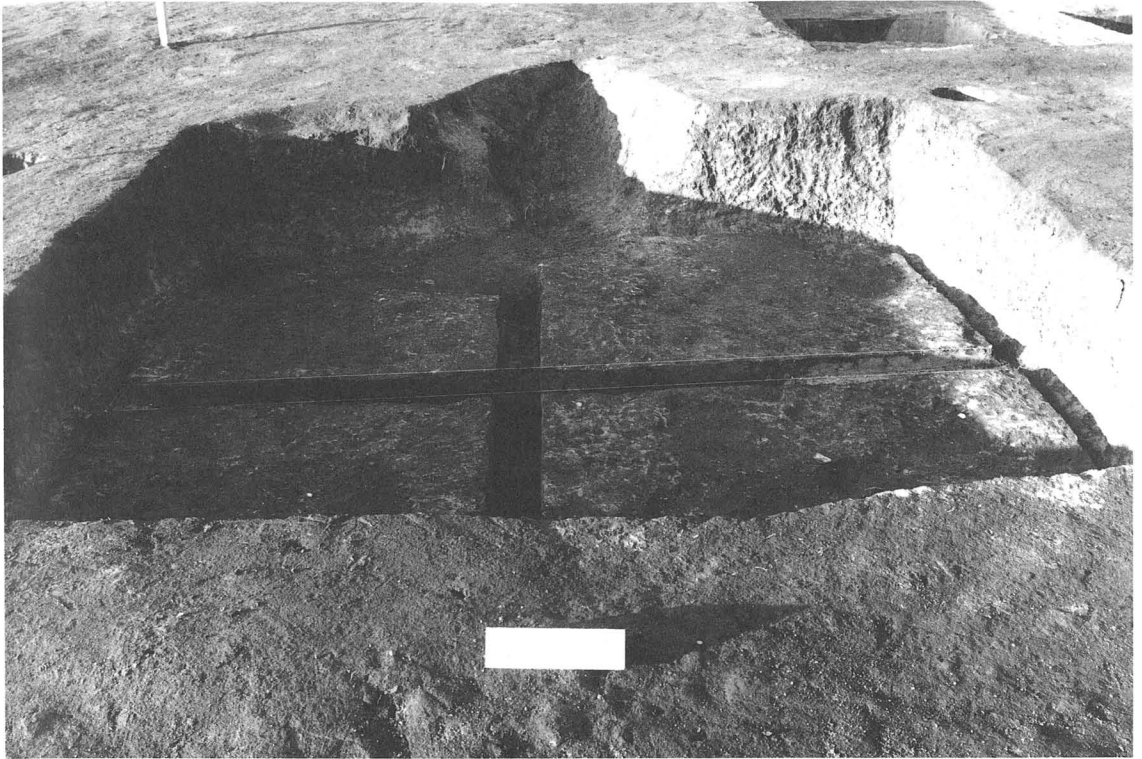
第五号住居址カマド残存状態



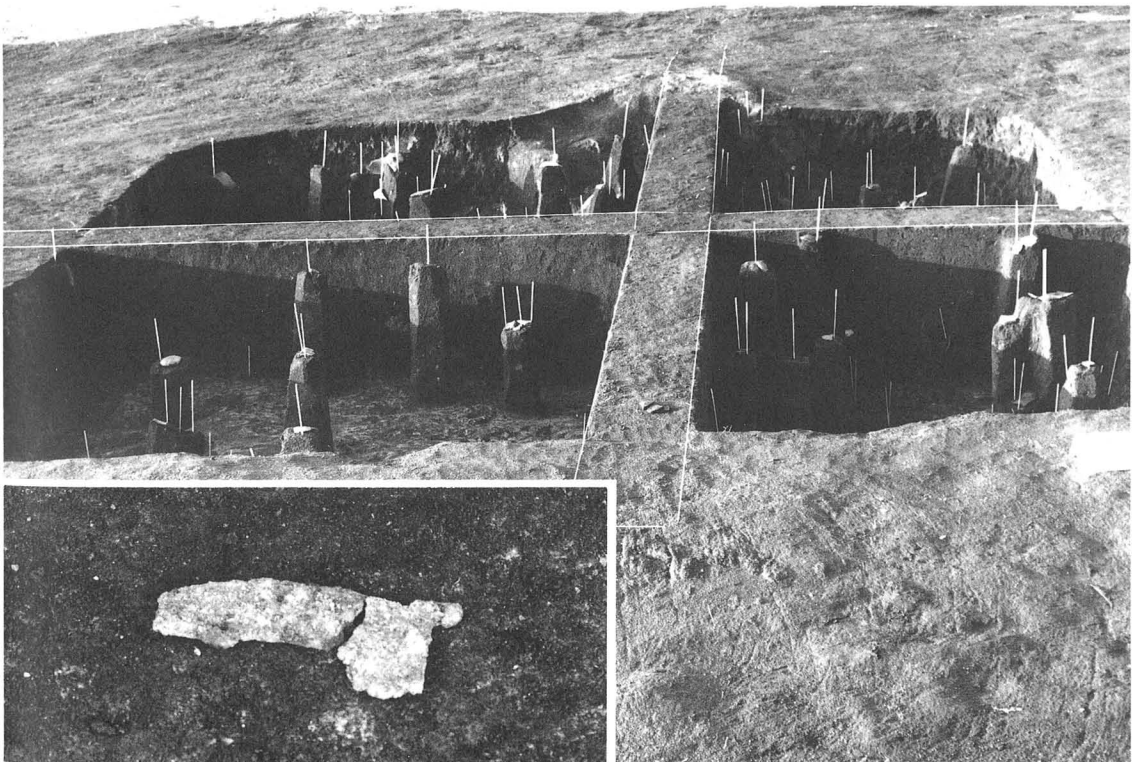
第六号住居址遺物出土状態〈南より〉



第六号住居址カマド残存状態



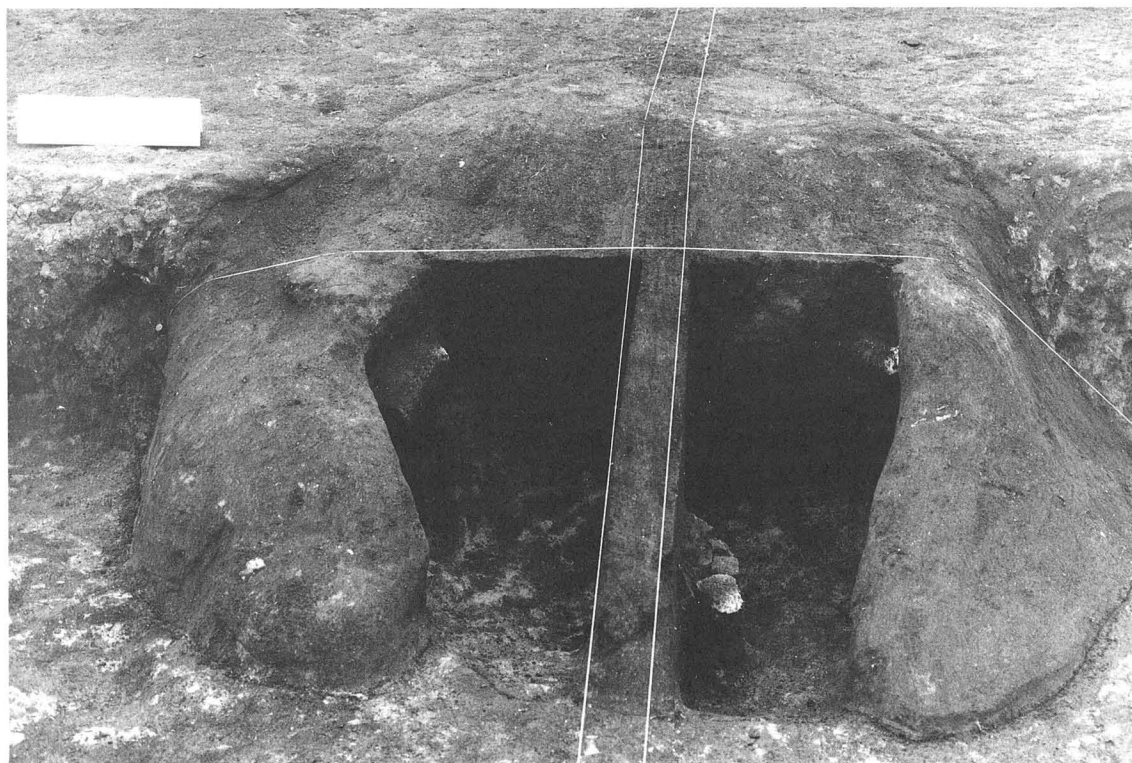
第七号住居址全景<南より>



第七号住居址遺物(下段：鉄鎌)出土状態<南より>



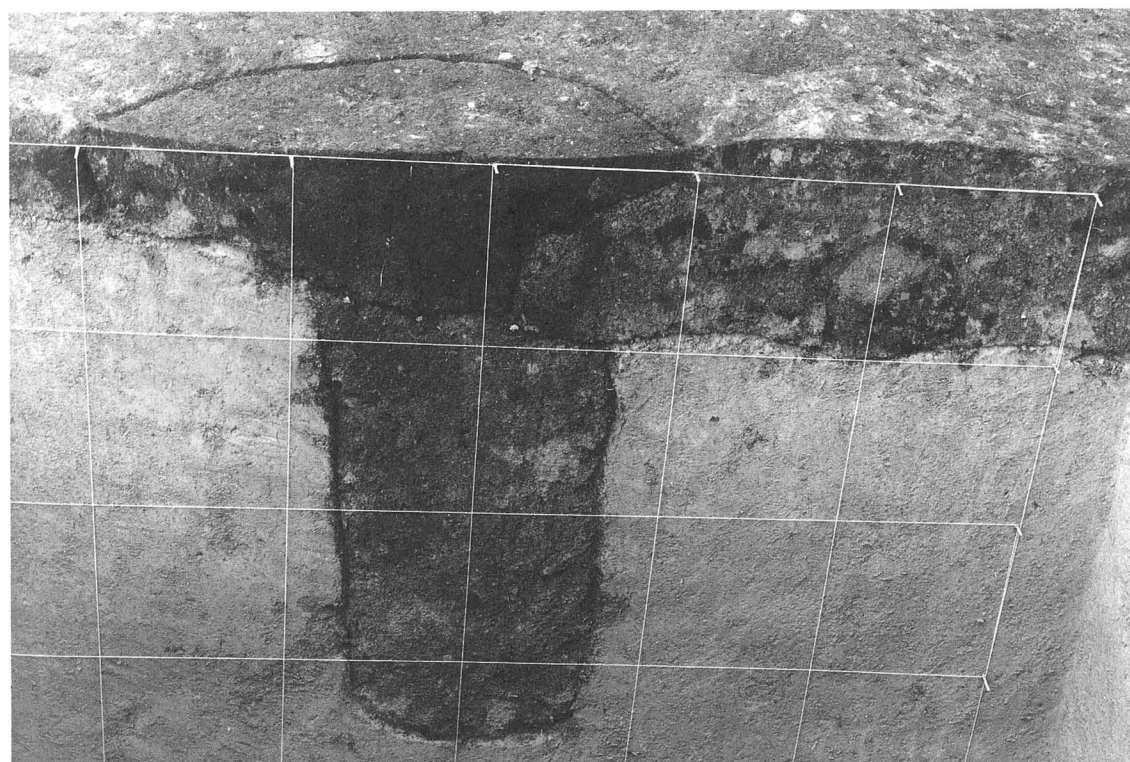
第八号住居址全景<南より>



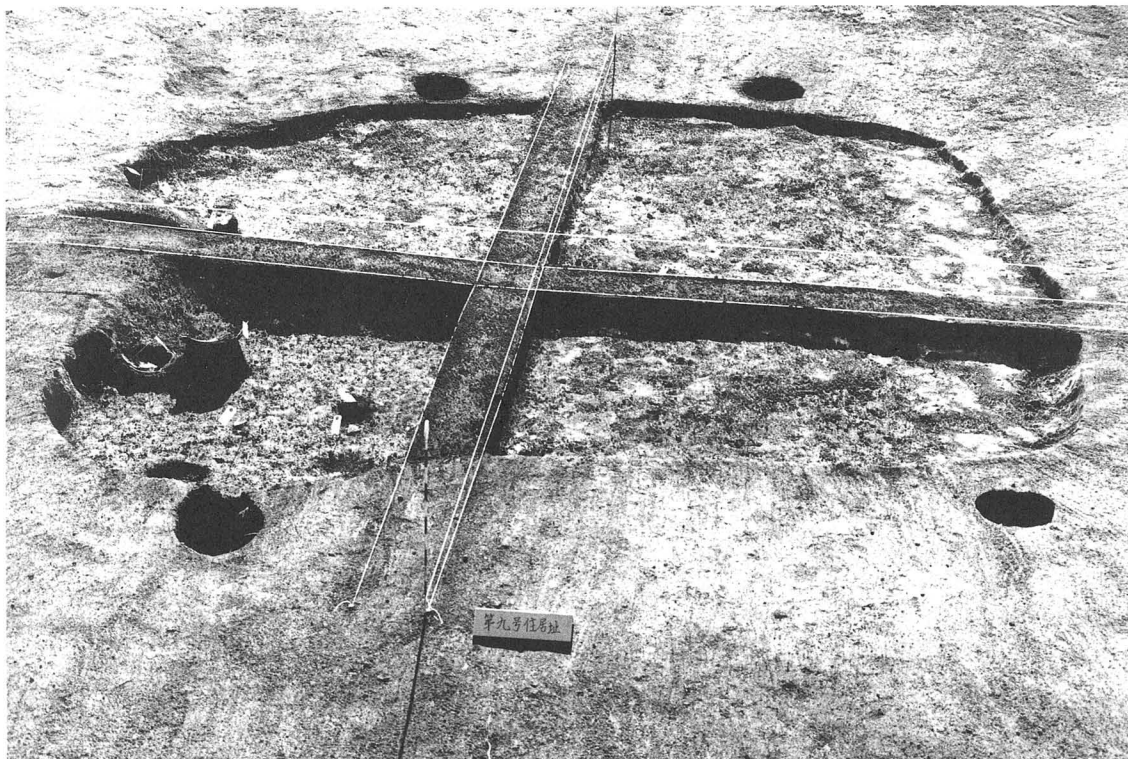
第八号住居址カマド残存状態



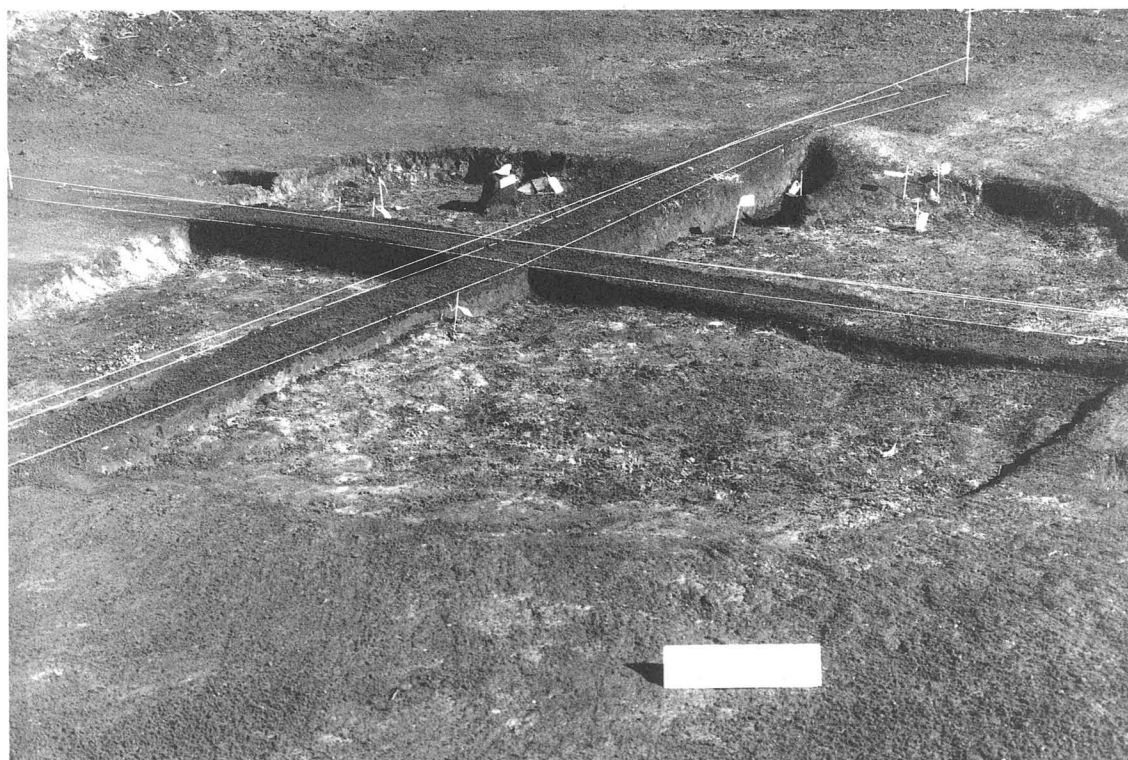
第八号住居址柱穴(P₁)断面



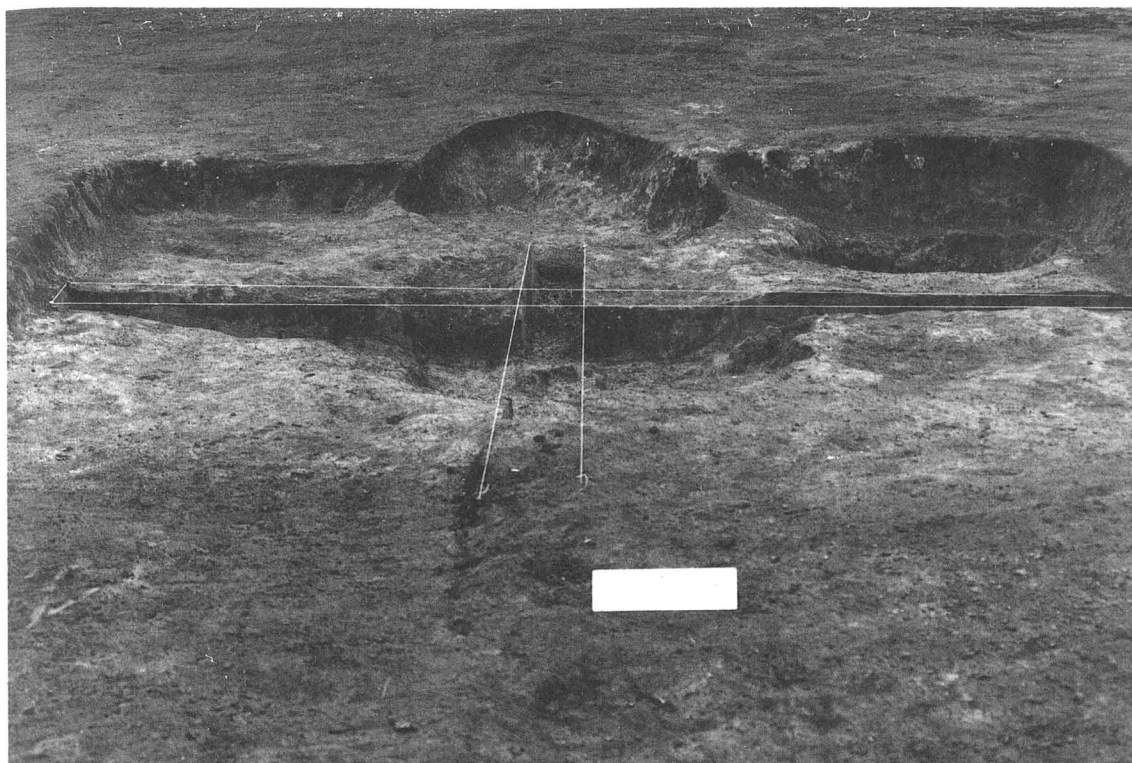
第八号住居址柱穴(P₂)断面



第九号住居址全景<北より>



第一〇号住居址遺物出土状態<南東より>



第一二号住居址全景<南より>



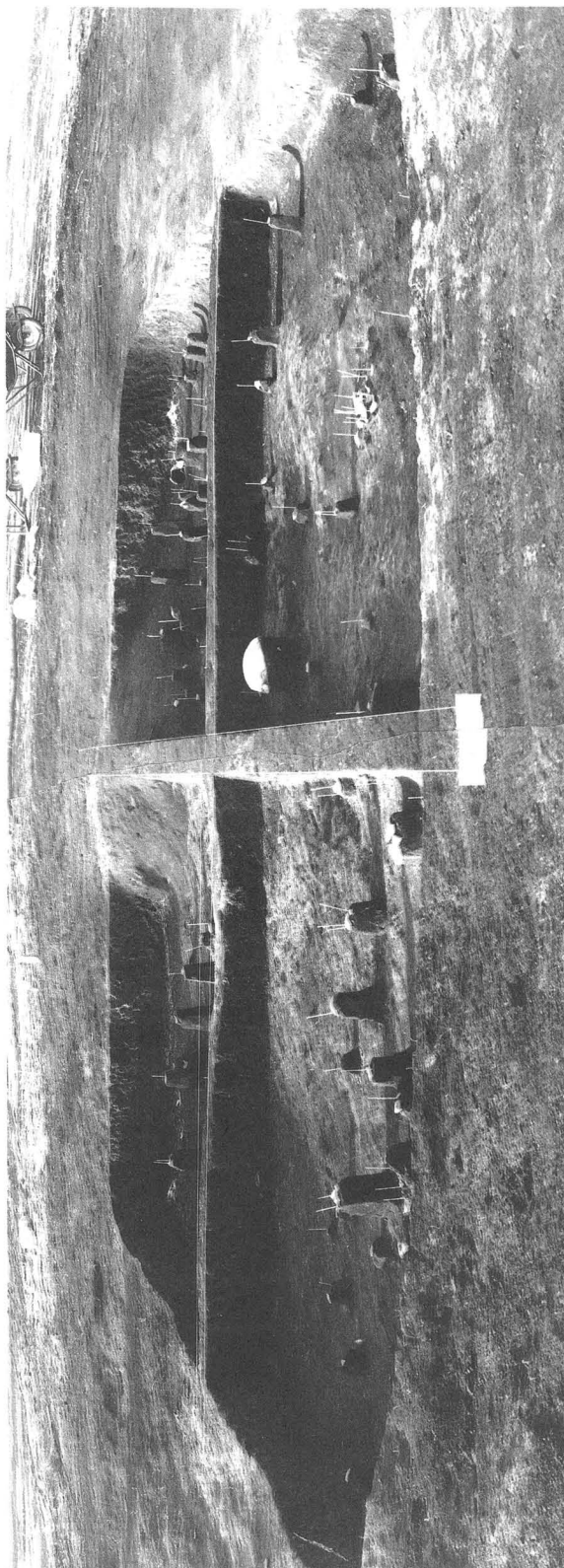
第一三号住居址遺物出土状態<南西より>



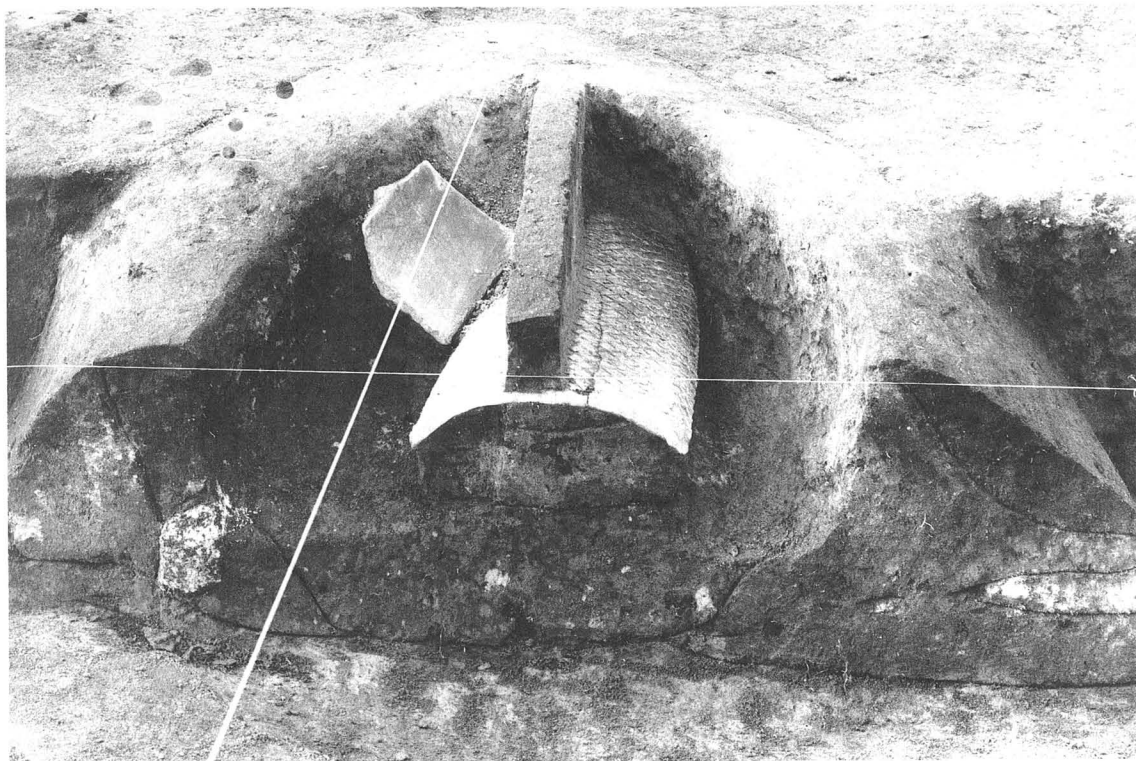
第一四号住居址遺物出土状態〈南より〉



第一五号住居址遺物出土状態〈西より〉



第一八号住居址遺物出土状態〈南より〉



第一八号住居址カマド断面と平瓦出土状態



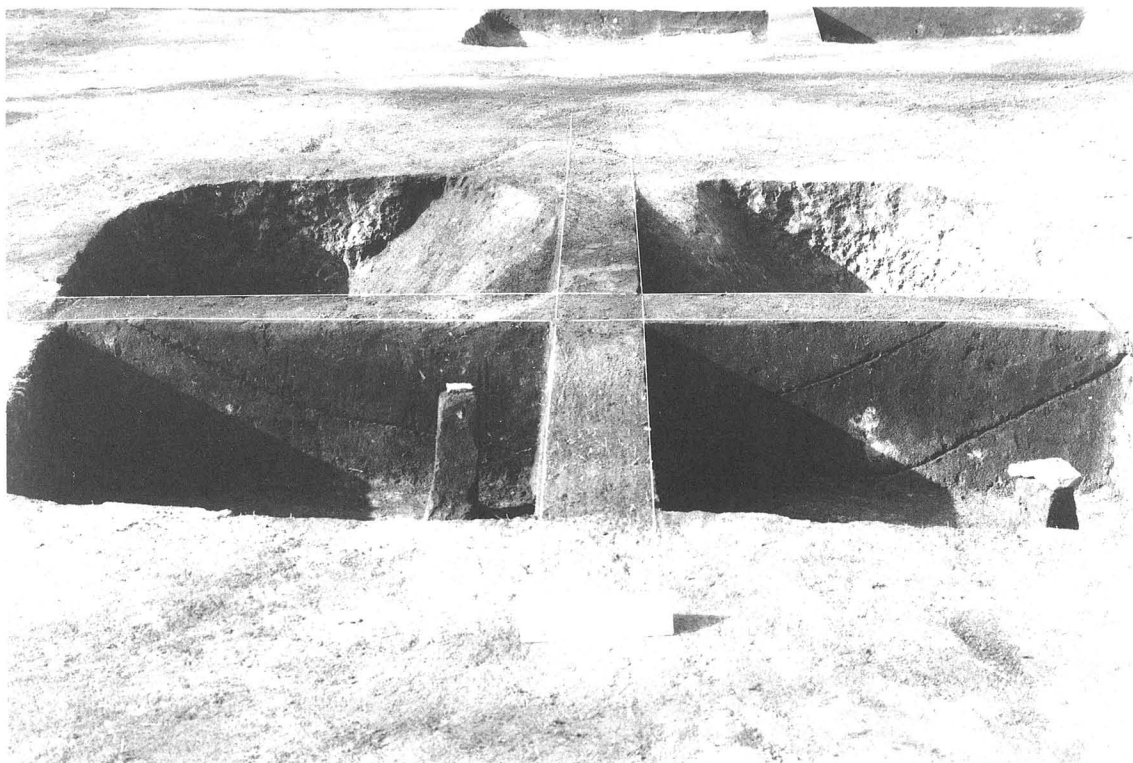
第一八号住居址柱穴(P₃)断面



第一九号住居址遺物出土状態〈東南より〉



第一九号住居址遺物出土状態〈東より〉



第二〇号住居址土層断面<南より>



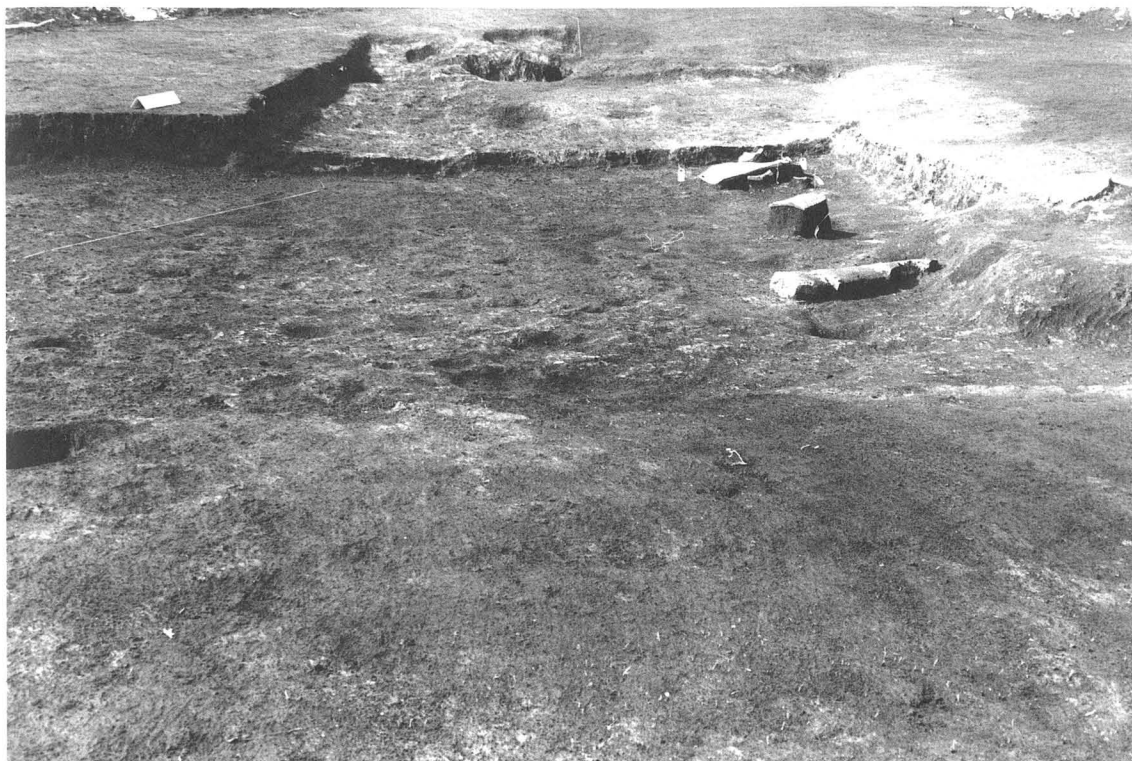
第二〇号住居址カマド残存状態



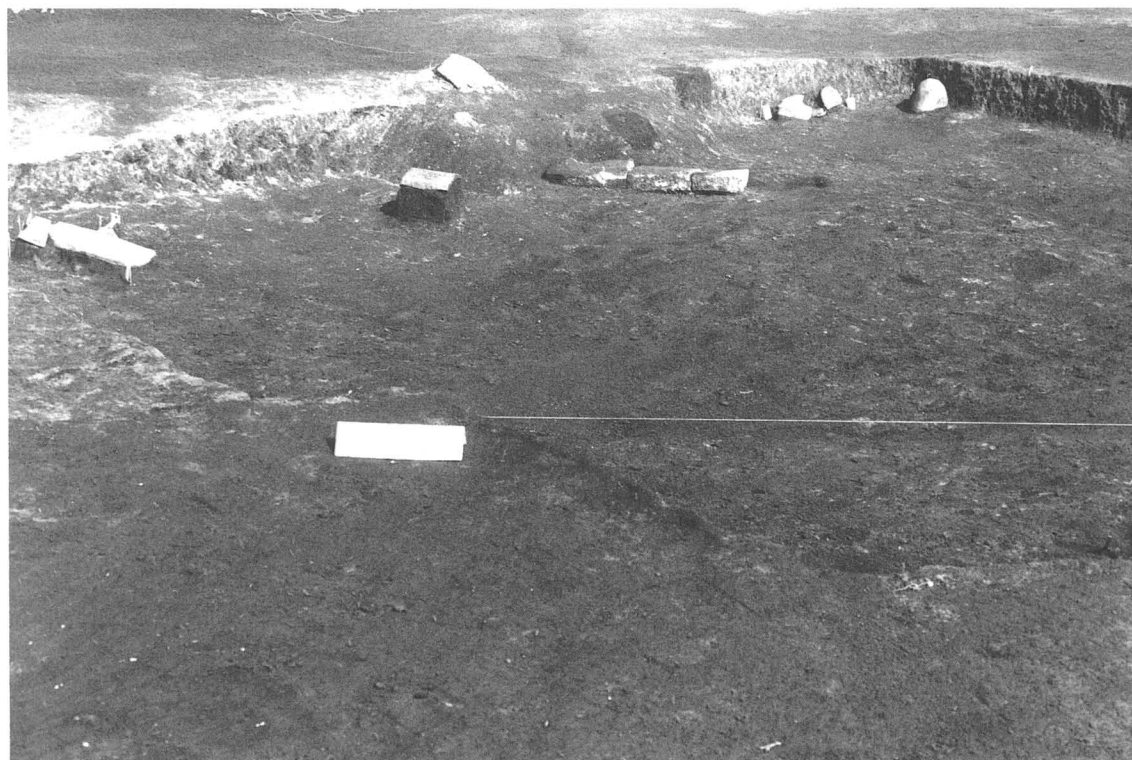
第二二号住居址遺物出土状態〈南より〉



第二二号住居址カマド残存状態



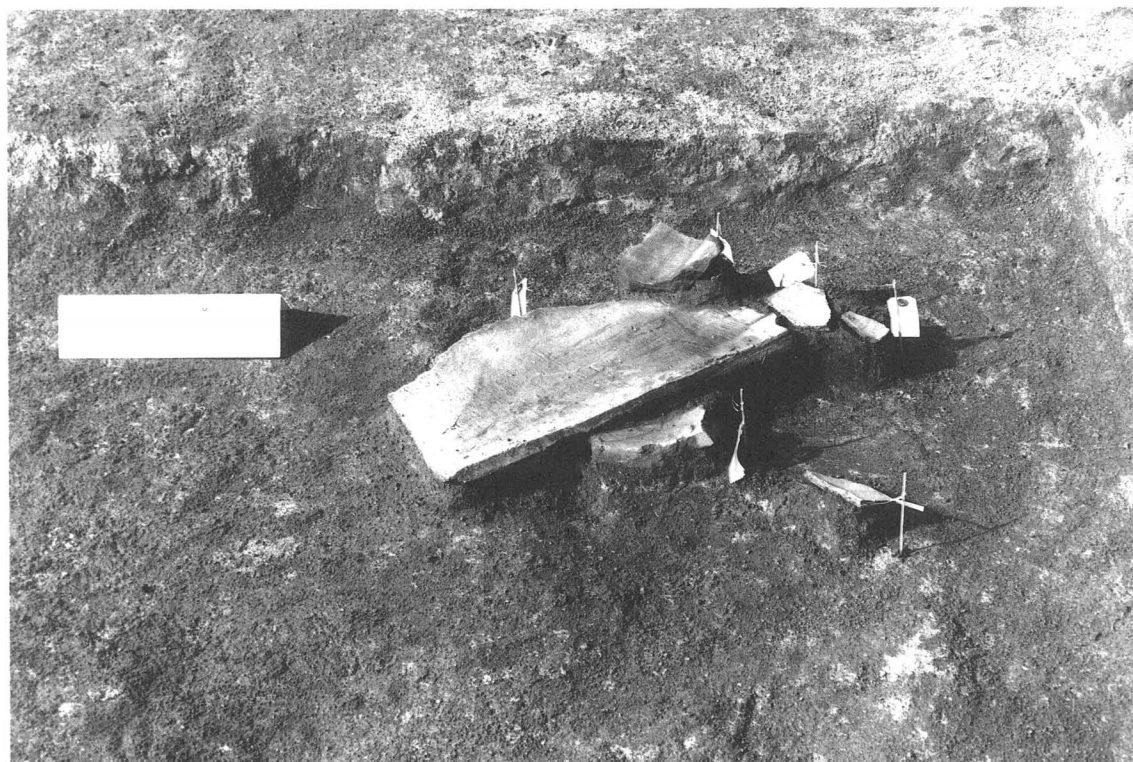
第二三号住居址全景<東より>



第二三号住居址全景<南より>



第二三号住居址カマド残存状態



第二三号住居址Wコーナー付近平瓦出土状態



4H



6H24



6H73



8H99



8Hカマド



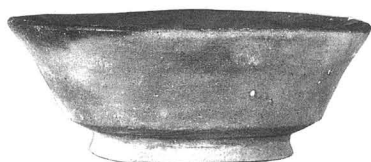
9Hカマド



17H



18H



3H82



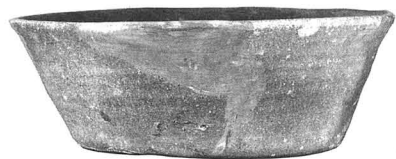
3H接7



4H105



4H接7



5Hカマド



5Hカマド



5Hカマド



6H接3



6H接2



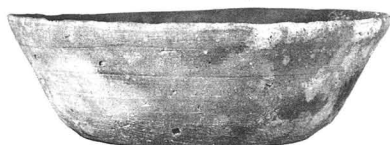
7H111



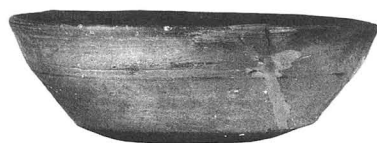
11Hカマド



13H接9



17H46



20H接1



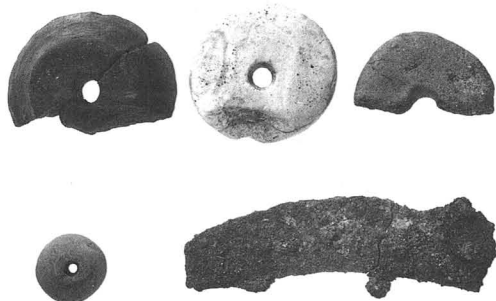
21H5

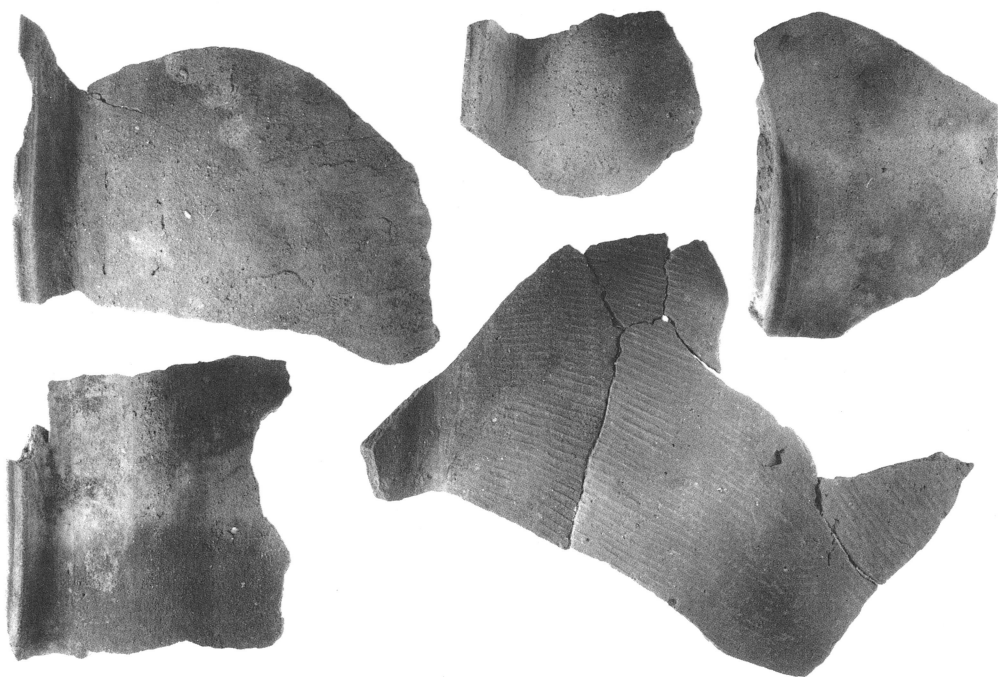


22Hカマド



11Hカマド





12H



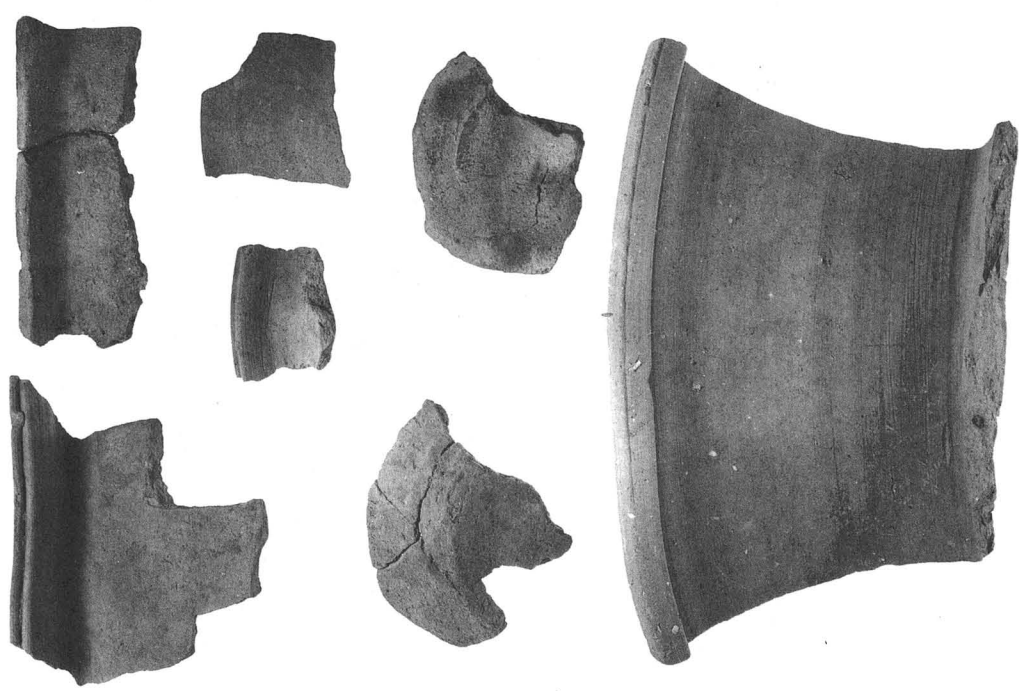
8H



H 31

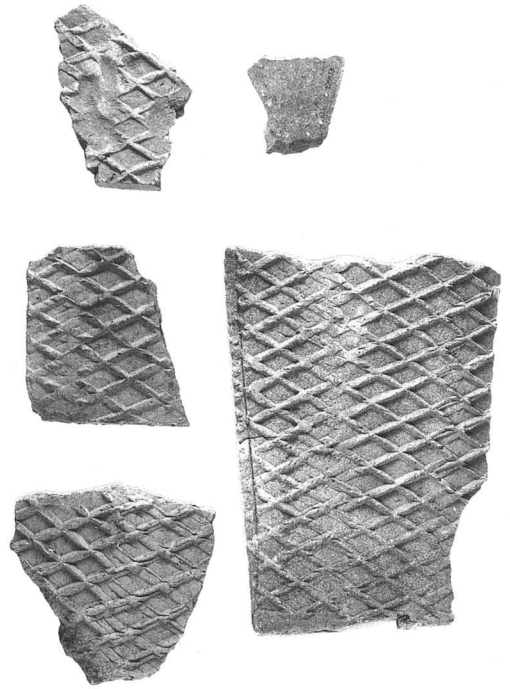


H 91





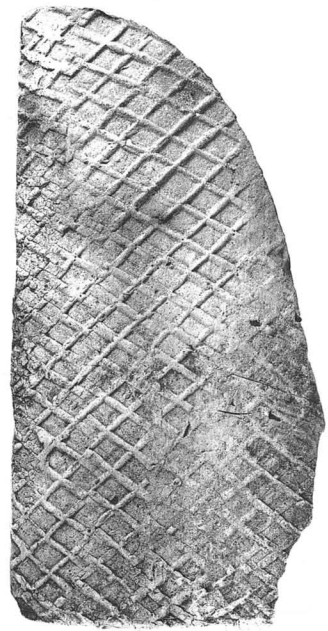
19H



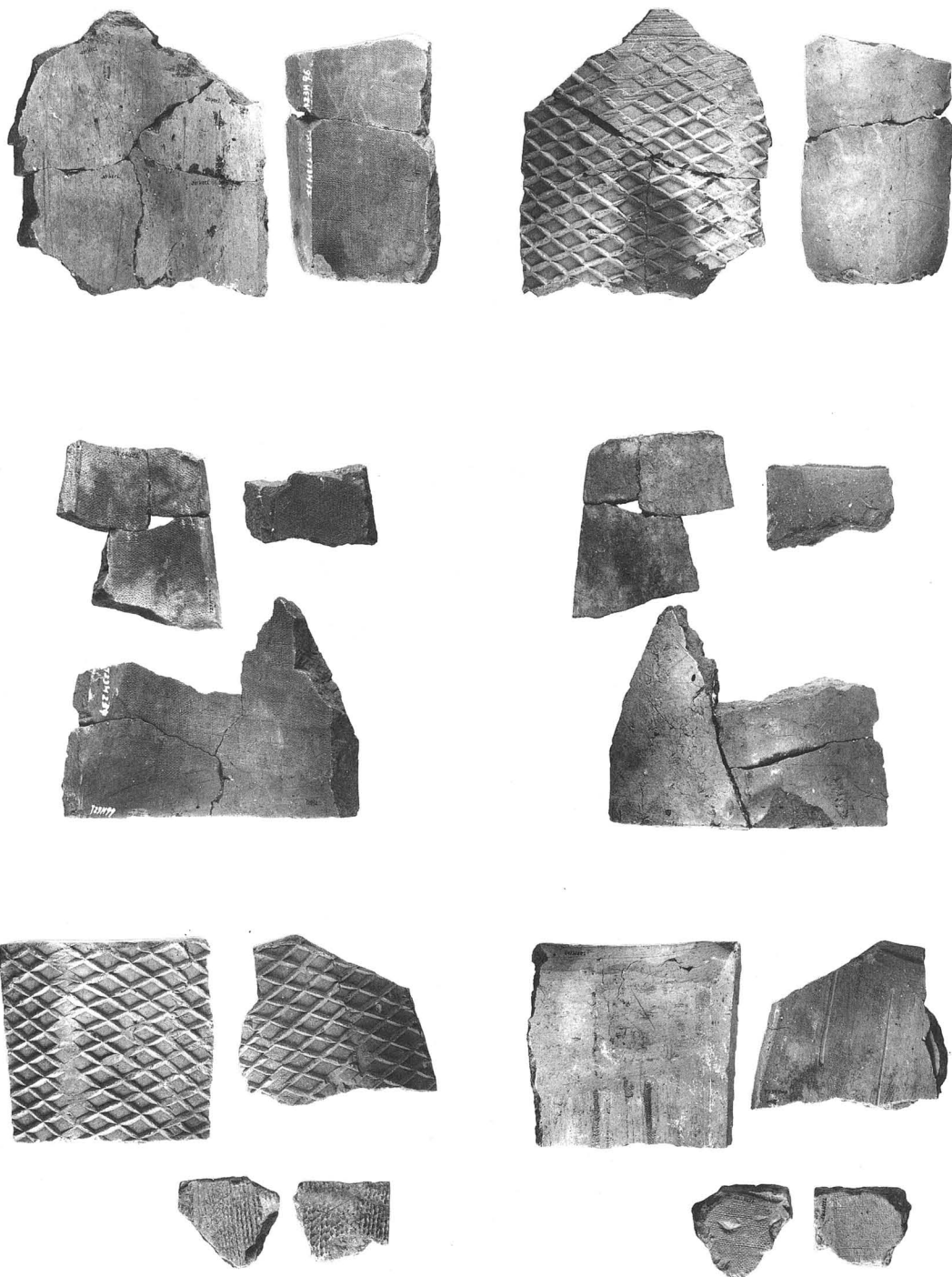
19H



23H



23H



第二三号住居址出土瓦

鷹巣遺跡発掘調査会役員名簿(昭和62年11月1日現在)

会 長	海老根 フ ミ	大宮町教育委員会教育長
副 会 長	鈴 木 勝 一	大宮町文化財保護審議会長
理 事	小 野 剛	大宮町土地開発公社常任理事
同	橋 本 文 雄	大宮町総務課長
同	生天目 晟	大宮町教育委員会教育次長
同	住 谷 順	大宮町企画課長
同	川 澄 多喜男	大宮町都市建設課長
同	井 上 義 安	大宮町鷹巣遺跡発掘調査団長
同	高 瀬 洸	大宮町文化財保護審議会副会長
同	小野瀬 正 明	大宮町鷹巣区長
同	小野瀬 捨 次	前地元町議会議員
監 事	斎 藤 忠 夫	大宮町会計課長
同	金 田 薫	大宮町土地開発公社事務局次長
事 務 局	根 本 宗 昭	大宮町教育委員会主査
同	宮 本 正 詞	大宮町教育委員会社会教育係長
同	山 崎 憲 昭	大宮町土地開発公社係長
同	大 貫 亨	大宮町教育委員会社会教育主事
同	瀧 喜代子	大宮町教育委員会主事

発掘作業従事者

中橋はる子	河井 みよ	山本 つる	小野瀬礼子	吉川 けさ	和田まちよ
小野瀬幸子	大賀ひで子	大賀よし江	柏 密子	戸崎 とみ	後藤 栄子
大森とし子	栗田 満江	後藤きさえ	広木美代子	戸崎ともえ	後藤つや子
広木 義男	横山清太郎				

遺物整理作業従事者

井上 義安	植田 友次	大芦あさ子	石崎 寿子	皆藤すえ子	戸崎ともえ
後藤つや子	鈴木 浩子	小堤 静江			

常陸鷹巣遺跡 - 第二次発掘調査報告 -

発 行 昭和62年12月

編 集 鷹巣遺跡発掘調査会

印 刷 (有)平電子印刷所
